

---

# 彼女に死の選択はない

河道 秒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼女に死の選択はない

### 【Nコード】

N7068V

### 【作者名】

河道 秒

### 【あらすじ】

化け物退治屋の見習い少年、桐谷良平はある日、電車での人身事故を見る。轢かれて死んだのは少女だった。しかしその少女が、桐谷の前に現れて？

h a p p e n i n g くその少年は出会った (前書き)

勢いだけで書きました……。拙い作品ですが、よろしく願います。

## h a p p e n i n g 　その少年は出会った

キンコンカーンコン。

今日も半日が終わる。十月末。中間試験も終わり、学生としてはとても安心できる季節だ。

(今日も疲れた……)

主に精神的にだが。

こんなときは心の中で見えない誰かに向かって、ぼやこうではないか。俺は桐谷良平<sup>きりや じょうへい</sup>。高校一年生だ。恋やら汗や涙やらの青春真っ盛りの時期ではあるが、そんなものは俺には一つたりともない。

親友と呼べるのは一人くらいしかいないし、女で親しい友人なんていない。見た目だけなら美人というのはいるけれど、実は腹黒いという噂や、死なない人間がいる、という都市伝説が出回ったりと、いくらいだ。

「おーい、桐谷。一緒に帰ろうぜ」

「ああ、なんだお前か。なら……」

「よし、じゃあ帰る」

「お前と帰るわけねえだろ。考えろよこのクズ」

「ええ!？」

このちよつとアホ面をした同級生が俺の親友である、日野原隼人<sup>ひの はら</sup>だ。金髪で、留年ギリギリの成績を保持する学年に名を轟かせるアホである。

しかしなぜかこいつとは気が合うので、仲がいい。

「おい、何やってんだよ。早く着いて来いよ。ん？　おーい日野原、しっかりしろー」

「僕はどうすればいいんだろうね……」

日野原が俺の言葉にシヨックを受けたらしく放心状態だ。まあ……見なかったことにしておこう」

と自分に言い聞かせ、俺はその場を立ち去った。俺たちは親友だ。

言わずとも伝わることもあるだろう。また明日ってな。

とりあえず一人で帰ることになった。帰るタイミングが心の中でぼやいていたせいで少し遅くなった。部活をやっている生徒が目に入る。部活は興味が無いのでやらない。やっているほど俺も暇じゃないし、俺は運動向きではない。

そう思いつつ、下駄箱の靴を取り出す。

「君は桐谷君ではないか」

「あ、つ、月城……どうしたんだ、こんなところで？」

「どうしたも何も帰ろうとしているだけではないか。大宇宙がわたしを呼んでいるからな」

最後の一言無けりや普通だろうが。

彼女は月城つきしろ神流。クラスメートで、ちょっと浮いている女の子である。髪は肩までのショートヘアで、足はモデルもびっくりするほど長くて綺麗だ。顔も可愛いの種類に入るほどだが、さっきのような言動がしゃべるたびにある。要するに、デンパ系少女である。

そんな彼女の学校でのあだ名は『宇宙人』だ。何を持ってして宇宙人というのは俺も分からない。

「なんだい桐谷君。わたしのほうばかりじろじろと見て。むむ！」

わたしの『思考透析』がこう語っている」

「一体何を語っているんだ……」

「君はわたしの下着が見たい！　そうか、そうなんだな」

「違うわ！　って、おい……お前、何してるんだ」

Yシャツのボタンを外し始める月城。彼女の行動をいちいち予測できる人間はこの地球上にはいないだろう。

「君が見たいというので見せてあげるんだ。困っている人がいたなら助けてあげなさいとこの地球の大地がわたしに囁いているんだ」

「話を聞けっ！」

「何をするんだ。せつかく見せようと思ったのに」

「見せんでいい」

「ああ、なるほど。君は裸Yシャツというのが見たいのか」

「違う！ そんなマニアックな趣味は無い！ お前は服を脱ごうとするんじゃない！ いいか、学校を出たらそんなことをしちゃいけないんだぞ」

「そんなことも知らなかったのか君は。非常識な人間は妖精の国に連れて行かされてしまうぞ」

「俺は常識人だ！」

またどつと疲れる。月城と一時間絡み続けられたらおそらくギネスブックに載るはずだ。しかし、いったいどういう記録名で載るかは分からない。

「さあわたしは宇宙船に帰る。さらばだ」

「さつき自分で大宇宙に帰る、みたいなこと言ってなかったか？」

「それはおそらく君が違う世界で生きてきたからだ。異次元を渡る能力者のようだな桐谷君は」

「そんな能力持ってないから」

「それは残念だ、では今度こそ、さらば」

「はいはい、じゃあな」

今度はツツコミすぎで喉が潰れそうだ。さつさと自宅に帰って喉を潤し、日課にとりかかろうと思いつつ、革靴を取り出した瞬間、

「桐谷」

「あれ、先生。どうしたんですか？」

俺の担任、間島だ。別名、鬼の間島といわれるほど怖い教師である。鉄拳制裁上等、元ヤクザの疑惑ありだ。

「お前、さつき月城に何をしていた？ 服を脱がすとか聞こえたのだが」

「いや、それは違いま」

「言い訳無用！ 職員室に来い！ 不純異性交遊は校則違反だ！」

「理不尽だああああああああああああああああああああああああああああああ！」

俺の心の底からの訴えが廊下にこだました。

連れ去られてから二十分後。間島が俺の状況説明を聞き入れ、ようやく解放された。

「月城のせいだ……」

俺の背中は間島と月城のせいの疲れにより、一回り小さく見えて  
いるはずだ。

「コンビニで立ち読みでもするか」

今日は週刊誌の発売日だ。それをコンビニで立ち読みしてから帰ろう。そう思うと、踏切が降りた。夕方であるからなのか、人が多い。しかし、その人々がざわつき始めた。原因は、

（何してんだ……！？）

女の子だ。俺と年はたいして変わらないだろう。その彼女が線路に立っていた。何も臆していない顔で。

俺は本能的に助けに行こうと、足を踏み出したその刹那。踏切を通過した電車が彼女の身体をはねた。猛スピードで通過する電車の音が残酷に響く。その少女は今ごろ電車のタイヤでみじん切りになっているだろう。

「っー！」

死は何度か見てきたが、人間が死ぬのは初めて見る。

「なんだよ……これ……」

線路に立ち入ったら、普通システムが動作して、電車が止まるだろ……。なぜ、どうして、止まらなかった？ 故障か。こんなときに。

踏み切りが上がった少し先で、電車がようやく止まる。何人が野次馬が寄っていったが、すぐに駅員が対処し、規制がかかる。俺はその現場を見ずに立ち去った。

今日は凄惨な場面を見たな。夢にでも出てきそうだ。

「ただいまっ」と

家の玄関を開け、荒れている居間に入る。学生の一人暮らし感が  
ばりばり出ている。プリント類が床にぶちまけられ、ゴミに出し忘

れたジュースの缶がテーブルの上に置かれている。

相変わらず汚い部屋だな、と思いつつ、コンビ二弁当を開ける。

焼肉弁当だ。テレビをつけると、心靈写真を取り上げる番組をやっていた。

「はあ……またか」

とりあえず食事終了。日課を始めるとするか。俺の日課。

それは、化け物退治屋のトレーニングである。

化け物退治屋。この世には化け物がいる。心靈現象、なんていうのはたいていが化け物の仕業である。化け物と一概に言っても幅広い。小さな幽霊からUMAまでだ。これをやるうと思っただきっかけは父親がこれで稼いでいたし、何よりもその姿に憧れたからだ。しかし、化け物退治屋といってもまだまだ見習いだが。今までの化け物を殺した数は二体だ。全然だめである。

一人前になるには、訓練あるのみと親父が言っていた。その親父はいまどこにいるか分かったものではないし、母親は俺が小さいときに死んでしまったらしい。だから、この家はほぼ俺が一人暮らし状態になっている。

化け物退治屋の訓練といっても身体作りと、反射神経を鍛えるだけである。武器を使うのはまだまだだ（実際いつ使うのか分からないが）。とりあえず、近所をランニング。

「ふっ、ふっ……」

これを毎日欠かさず（風で寝込んだときは別だが）やっている。何の取り柄も無い自分の密かな自慢である。

「ん？」

人影。一人だ。身体は華奢だ。後ろ姿を見るあたり、女の子だ。

その子を横目で見つっ通りすぎる。はずだった。

「え？」

横目でしか確認していないが、あれはおそらく……あの線路にいた子だ。見間違いかもしれない。ナンパっぽくやって顔を確認しよう。夜だから怪しい人だと思われないうい。

「ねえ、君」

俺は朗らかな感じで声をかけた。

俺がここで何も見ずに、声をかけなければ、普通の人になり、普通の暮らしをしていたに違いない。ここは人生の分岐点だった。そして俺は 皆羽詩音に出会ってしまった。

first day 〽その少女は不死身〽

声をかけたら、その少女は振り返った。やはり、さっきの電車に轢かれたはずの娘だ。化け物の可能性がある。ゾンビとかだな。

「何かしら？」

透き通った声だった。髪をポニーテールにし、どこかの学校のYシャツとスカート。目は気だるそうに開かれているものの、容姿は綺麗である。とても綺麗な、少女だ。お嬢様、という雰囲気がある。

「あ、暴漢なのね」

「違いよ！ 普通の男子高校生だよ！」

「信用ならないわ。こんな夜中にか弱い女子高校生に声をかける男なんて大体暴漢しかいないわ」

「間違ってるから！ 世の中に生きる男の認識間違ってるから！」

「まあいいわ。で、何？ ナンパでもしにきたの？」

「えと……」

さあ、どうする。唐突に聞いたほうがいいのか。しかし、警戒しつつ慎重に話を進めていったほうがいいのか。

「君、住んでるところどのへん？ ここの近く？」

「やっぱりナンパなのね。まあ……そう、ね」

「この辺で電車の事故があったって聞いたんだけど……君は知ってる？ 俺見てないんだ」

ちよつと棒読みすぎたかな、と思っていると、

「ああ、その轢かれた人間、私よ。正確に言うと人間じゃないか」「は？」

「だから、その事件で轢かれたのは私って言ってるの。信じられるかしら？ それと、私メンヘラじゃないわよ」

メンヘラって……。しかし、ウソとも思えない。あの時と服も同じだし、顔もほぼ同じだから、そっくりさんという可能性はないと思う。

「とりあえず信じるけど……」

「は？ バカなのかしら？ 私、電車で轢かれて生きてるのよ？ みじん切りになってないのよ？ 珍しいでしょう？ 内心、こいつ危ないヤツだな、とか思ってるんでしよう？ なら笑いなさいよ、笑いなから踏めばいいわ！」

「ちょ、俺が変な人みたいなの言い回しはよせ！ 別に俺は自分の目で見たことは信じるってことにしてるんだが」

「あなた、異常よ。精神科に行きなさい」

「ええええええ！？ 初対面の人にそこまで言う！？」

驚きである。初対面なのに糾弾されすぎてはいないだろうか、俺。「当然よ。私は毒舌で生きてきたんだから」

「よく分からない生き方をしてるな……。うーん……。とりあえず、名前を言うか。俺は」

「ゴミ、でしょ」

俺が言うよりも早く彼女が反応した。そして今の顔はとても自信に満ち溢れていた。

「んなわけえだろ！ とにかく、名前だ。俺は桐谷良平」

「つまらないわね。私は……。何にしよっかな……」

「名前は一人一つだと思っただけ……」

「そう、じゃあこれにしましょう。私は皆羽詩音<sup>かいばねしおん</sup>。よろしくね、えーと……。キル谷くん」

「勝手に人殺しみたいなの前に変えないでもらえないか、皆羽」

これは月城みたいなタイプの女の子なのかもしれない。面倒だ。

しかし……。マジでゾンビかもしれない……。どうしようかな、と俺が考えあぐねていると、

「それにしても、人から名前と呼ばれるのは何年ぶりかしら？ 十年と少しだっけ……。二十年だっけ？」

脳内でこいつ頭おかしいんじゃないのかという警報が鳴っている。どう対処するんだ……。しゃべる化け物なんて初めてだ。幽霊二匹を成仏させたことぐらいしかないのに。幽霊はしゃべらないんだ。

ゾンビって幽霊？ 生ける屍だから違うか。

「まあ……とりあえず話を聞かせてくれてありがとう。でもこんな時間まで外を出歩いていたら危ないだろ？」

「そうね。暴漢に強姦されるかもしれないわね。って今わたしけっこう上手いこと言った？」

「お前のギャグセンスを疑うよ……。じゃあ、俺はこれで」

「そう。さよなら」

俺は思いついたのだ。見なかったことにしよう、と。ゾンビなんてどうやって倒せばいいか分かったもんじゃない。だめものだが、あとで親父に『ゾンビってどうやって退治すればいい？』とメールしてみよう。

それ以外手段が思い浮かばない。それに何よりも相手はとりあえず女の子だ。手荒な真似をするのは野暮というものだ。

その後、いつものランニングコースを走り、残りのメニューをこなし、訓練終了。

「もうこんな時間か」

もう時計の針が頂点に近い。勉強をするのも面倒なのでさっさと寝てしまおう。俺はそのまま、まどろみに落ちた。

深夜。布団の中でうごめくものがあつた。しかも大きくて生暖かい。そんな違和感を感じ、ふと後ろを振り返ってみると。

「はっ？」

皆羽詩音が眠っていた。俺の布団の中で、だ。この状況は確実におかしい。マンガの中じゃないし、ましてや女運最高の男でもないし、フラグ一級建築士でもない。一体どういう状況なのか分からない。俺は毛布から脱出し、明かりをつけた。

「ん……ちよつと何するのよ、人が眠ってるのよ？ まぶしいじゃない」

「俺の布団を我が物にしたような言い方だなお前は！ まずもってなんでここにいるんだ!？」

「夜這いしたから」

「お前には罪悪感というものが無いのか」

なぜだ。彼女には俺の家の位置まではしゃべっていない。なのになぜか俺の家の位置まで把握し、鍵をかけたのにもかかわらず進入している。

「いつごろここに……」

「二時間くらい前」

「鍵は？」

「ピッキングツールを使ったわね。意外と高いのよね、あれ」

「……………」

しばらくの沈黙。それを俺が破る。

「もしもし、警察ですか？」

警察の返答を聞く前に、皆羽に携帯を取り上げられてしまった。携帯を奪うスピードがZ戦士並みに速かったので驚愕した。

「別に犯罪行為なんて一つもしてないじゃない。なんで警察になんか電話するのよ」

「頭のねじが飛んでるんじゃないんですかね！？ 大丈夫かお前！」

「深夜よ。近所迷惑だわ、大きな声出さないで」

「ふおおおおおおおおおお……」

もうどう対処していいか分かりません。この娘はわざとやっているのかそれとも素でやっているのか。常識があるのかないのか。

とりあえずだが、あの電車についてのことは触れないように注意しよう。

「えと……キレ谷くん」

「俺はあんまり怒らないぞ？ 桐谷だ、桐谷。で、なんだ？」

「ここから一番近い学校はどこかしら？ わたしそこに通いたいたいんだけど」

「ここ二一番近い学校だと俺の行っている学校だな。お前今までどこに住んでたんだ？ 外国だったりするのかな？」

「……色々なところよ。世界中の」

「複雑みたいだな……」

「そうよ。じゃあ、おやすみなさい」

彼女は俺の布団を被りまた眠ろうとしたが、俺が布団を引っぺがしてそれを阻止する。

「何をするのよ。睡眠妨害されるとわたし不機嫌になるわよ？」

「俺が今不機嫌だよ！　つてか何でお前は自分の家で寝ないんだよ。家出？」

「家が無いからよ」

飄々とした様子で言った。あの電車に轢かれるときと同じような顔だった。何も感じていないような顔なのだ。俺はそれが少しだけ不気味に見えた。

「……つまり、行くアテがないと」

「そういうことよ。アホに見えて意外と飲み込みが早いのね」

「なんだか皆羽可哀想な気がしてきたので、

「もうスルーして行こう……。分かった。一晩だけ泊めてやる。朝になったら出て行けよ。俺は隣の部屋を使うからお前はここで寝るよ」

「分かった」

「なんだか不思議な一日だ。これは幸運なのだろうか、それとも災厄なのだろうか。神様に聞いてみたいところだ。」

その後、また彼女が俺の布団に入ってきたのは俺だけの秘密にしておこう。

「ん……」

朝起きると皆羽はいなくなっていた。音もなく去るって一体どういう芸当だ。幽霊なのかもしれない。俺が実は幽霊が見えるという能力を持っていて……

「んなわけないっての」

「寝起きだから頭が変になっているだけだ。今のはおそらく独り言。スルーしてくれたまえ。誰に言ってるか分からないけど。」

（あれ、学生カバンこんなところにおいたか？）

なんだか物の位置が少しずれている。たんすも少し空いてるし。幽霊の仕業かもしれない。しかしそんな兆候は今までにないから、ありえないのだが。まあいい。あとで調べよう。

さあ、今日も怠慢な一日が始まる。

学校はあまり好きではない。気の合うやつが少ないし、テストやら勉強やら進路やらと教師が小言を言う。それを聞くだけの仕事なんていやだ。もっとスリルが欲しい。化け物を相手にするかのようなスリルが。

実際、幽霊を成仏させるのにもけっこうな手順を踏んだし、それなりに恐怖も感じた。ホラー映画とは違い、幽霊つてのは実際に見えるわけじゃない。ちゃんとした手順をふめば自然と消えるのだ。神様と同じ。

そういうスリルが俺にとっては楽しい。

そんなことを机に座って窓を眺めながら考えていると、

「桐谷。僕たち親友だよな！」

アホの代名詞、日野原が近寄ってきた。俺はそれに対し、

「そうだ。俺たちは親友だ」

「良かった！ そうだよな、やっぱり昨日は勘違いしてたんだ。うんうん」

「我が親友よ。親友としての証に自販機でジュースを買ってきてくれないか？ 俺たち親友だもんな」

「オーケー。親友ならこれくらい楽勝さ！」

日野原がダツシユで廊下に駆け出した。やはりアホだった。おそらくあいつは将来、詐欺師に格好の獲物として名前をチェックされることだろう。

オレオレ詐欺とかに引っかけかりそうだ。

日野原が駆け出した二分後。

「これパシリだよね！？」

「あれ、今気がついたの？ で、ジュースは？」

「はいこれ」

律儀に買ってくるあたりがアホである。とりあえずそのジュースの代金を日野原に渡す。

「はあ……全く無駄骨だったじゃないか……。せつかくいい情報を教えてやるうかと思っただのにさ」

「いい情報？」

「教えないけどね」

日野原のわりには少しツンとした態度だ。少しいじりすぎたか。

「悪かったからさ、なあ教えてくれよ日野原！。俺たち親友だろ？」

「もうその言葉には騙されないよ」

「そうか……じゃあ、俺たちはもう……」

シリアス気味に言ってみる。

「え……そんな……桐谷！」

「じゃあな……日野原」

そう言っただけで机を立てて廊下に出る。まあ、トイレに行くだけなんだけどね。

「ま、待ってくれよ！ 俺たち……また……戻れるだろ！」

「……………（必死に笑いをこらえる俺）」

「桐谷」

「っああ……」

あまりにも日野原の表情があまりにも真剣なので必死に笑いをこらえていたが、少し声が漏れてしまった。ばれてしまったか……。

「ありがとう、桐谷！」

「え？ ああ、当然だ」

「じゃあ、また親友に戻れるんだな！」

「ああ。で、その親友は俺に何を教えてくれるんだ？」

しかしなぜだろう。さつきからクラスの片隅にいる女子の視線が俺たちに向いているのは気のせいなのだろうか。なんか全員顔真っ赤にしてるし。

「そうそう、もしかしたら今日、転校生が入ってくるかもしれないんだ」

「へえ……。どこでそんな話聞いたんだ？ うわさにはなっていないようだが」

このクラスはうわさが大好きで、少しでもうわさ話を垂れ流すと十分も経たずにクラス全体に回るといふ不思議な場所である。そんなクラスが転校生などというベタなうわさのタネを知らないはずが無いのだ。

ただ彼の話聞いた瞬間、背中に寒気が走った。いやな予感。

「いやあ……。さっき間島に職員室に呼ばれちゃってさ。それで聞いたんだよ」

「ベタだなおい……。まあいいや、どうせすぐに分かることだろ。

興味もあんまり湧かないし」

「お前は本当に青春を謳歌できないヤツだな……。そういえばお前、月城とその……。ヤッチャったって本当？」

俺は目を見開き、ほぼ絶叫に近い声で、

「誰だそんなうわさを回したやつは！ 殺してやる！ 八つ裂きだ！」

「月城となんな何があつたんだ桐谷！ とりあえず……。まず落ち着いて」

「がるるるる……。…」

俺が<sup>なんが</sup>日野原に諭されて、席に座った瞬間、

「む？ あんなどころに獣がいるな。もしか……。UMAか！」

「違えよ、人間だよ！ そしてなぜこのタイミングで登校して来たんだお前は」

「月城がケモノに食べられた、という話を聞きつけてやってきた」

「そんな話してねえよ！」

一体どうやったたら聞き間違えるんだ……。いや、聞き間違いどころの話じゃない。もう、話を上書きしてるぞ、こいつ。

俺が心の中で考えを整理していると月城が、

「まあそれは置いておくとして」

「置いておいていいの！？」

「黙れ日野原。で、なんだ別件か？ 用があるならもうちょっと普通に話しかけて」

「別に用などありませんが」

「ないの！？ ここまで引っ張っておいてないの！？」

「君、そろそろ頭がスポンジになってきたかい？ 精神科に行くことをお勧めするよ」

わお、二十四時間以内で二回も精神科受診の勧めを出された。なんだかもう、真っ白だ。ツッコむ気力さえも奪われていく。

「っ、月城、桐谷がだんだん灰みたいになくなっていくよ！？」

「おお、これは異世界へと繋がる鍵かもしれない……。何せ、彼は異世界へわたる能力を持っているのだからな」

「そ、そうだったの！？ 今度連れて行ってもらおうと。異世界で間島を殴って、それから元の世界に帰れば」

その時、鋼鉄の肉体が動いた。

「お、おい……。日野原……」

「間島のヤツほんとだめだよな。バカだし、ゴリラみたいな顔してるし、三十すぎても独身だし。ははははっ、笑える」

「日野原……まだ愛の鞭が足りないようだな……」

「えっ……？」

日野原がようやく後ろに間島が立っていたことに気付いたらしく、ゆっくりと鋼鉄の塊のほうを向いたとき、

「うっ、うわああああああああああああああああああああああああああああああああああ……」

彼の名は俺の胸に一生刻んでおくことを神に誓ったのだった。

間島が三分簡単人間クッキングを終えた後、ホームルームが始まった。現在、日野原は俺の隣の机で突っ伏している。彼の魂は行方不明だ。

「よし、今日は転校生を紹介するぞ」

日野原の情報はどうやら正しかったらしい。とりあえずその転校

生の顔を確認しようかと思ったその時、俺は驚愕した。というかいやな予感どおりだった。

「今日からこの2・Aに入ることになった皆羽だ。よろしくしてやつてくれ。皆羽、まずは自己紹介だ」

「ひゃい！」

驚愕二度目。噛んだ。あの俺の前で毒舌という毒舌をふるい、俺の精力を根こそぎ持っていったあの不死身疑惑のかかっている女が、頬を赤らめながら、噛んだ。

「きゃいばにえしおんでしゅっ（皆羽詩音です）！ きよりえかりやもよろしくおねぎやいしましゅ（これからもよろしくおねがいします）！」

「……………」

クラス全員が啞然した。流石にこの噛み具合はどうなのだろうか、みたいな目だ。間島も対応に困っているし。

「じゃ、じゃあ、皆羽はその後ろから二番目の席に座ってくれ……す、すぐに一時間目始まるから、みんな準備しろよ……………」

「は、はい」「」

見事な噛みっぷりにクラス全体が引きまくっている。皆羽の靴の音だけが虚しくクラスに響く。しかしあれは噛む、という領域を超え、既に別の国の言語になってしまっていた。

「……というか俺の後ろの席じゃねえか。どうしてくれるんだ、間島……いや、面識はあるんだ。こう、普通に話しかければいいんだ。」

そう、普通に

「あ、桐谷君、こんなところに落ちていたの」

さっきまでの噛みっぷりはどこへ言ったんだと思いつつ、言葉のキヤッチボールを続ける。

「俺は物じゃないから……」

皆羽が座ると同時に間島が立ち去り、名ばかりの授業準備の時間に入る。

転校生、というところで質問攻めに合うのが定石だが、さっきの

自己紹介のせいでみんな彼女に近寄りづらいらしいので、そんなものはない。

「何よ、その目……。む、昔から大勢の人の前でしゃべるのは苦手なのよ……」

ちよつと彼女が小さく見えた。その仕草がなんだか……可愛い。

そんなことを思っていると、いつのまにか魂というものを取り戻した日野原が耳打ちをしてくる。

（おい桐谷……お前あの娘と知り合いなの？　すごく美人なんだけど……）

（ま、まあ色々経緯があつてな……。そんなに親しくは無いぞ）

（……で、どういう娘なの？　自己紹介で嘔みまくりだったけど）

（いや……そのな　　）

知らないほうがいいぞ、といいかけたとき、

「あら、そちらの男は桐谷君のお友達かしら？」

「う、うん。僕、日野原隼人っていうんだ。よろしく」

「日野原君？　よろしくね」

「あ、う、うん」

おい、俺のときは名前を間違えまくっていたじゃないか。俺のこ  
と最初はゴミって言ってたじゃないか……。どういふ事だこの扱  
いの差は。しかも若干日野原の顔が赤い！　俺の思考がぐちゃぐち  
やになりそうだ。

俺は皆羽に何もしてない気がするんだが……。そんなことを考えて  
いると、一時間目の授業開始のチャイムが鳴った。

二時間目も何の問題もなく始まる　　と思いきや、

「んっ」

机の中に、紙が入っていた。内容は「昼休み、屋上まで来てくだ  
さい。お話したいことがあります」。

「……………」

ばっ、と周りを見渡す。この手紙、誰にも見られていないな。皆  
羽は授業の準備をしているし、日野原は絶賛睡眠中である。そして



彼女はフェンスに手をかけながら言う。どこからか吹いてきた風で彼女の綺麗な髪をふわりとさらう。そして、俺は今まで彼女に向けていた疑念をぶつける。女の子に言うのは失礼かもしれないけど、これが仕事になるかもしれないんだ。

「……………お前は、不死身の身体、なのか？」

「そうよ。おかげで随分長生きしてるわ」

「……………なんで、昨日、線路に飛び出していったんだ？」

「死ぬためよ。何度も何度も死のうとした。でも死ねない」

彼女はほんの少しだけ、顔をうつむけながらも続ける。そのしゃべり方にはどこか悲哀が混じっていた。

「普通の人間には分からないでしょうね。長く生き続ける苦しみが。死のうと思っても死ねない苦しみが！ まあこんなことを愚痴ってもしようがないわね。さあ、化け物退治屋さん、なんでこんなことになったか分かるかしら？」

彼女のその訴えは聞いているほうも辛くなるほどに、悲痛だった。

「……………分からない」

「呪いよ、呪い。不老の呪いと、不死に近くなる呪い。アニメとかマンガによくあるでしょう？ かぐや姫に出てくる不死の薬を飲んだわけでもないし、超能力をもってるわけでもないのよ」

「じゃあ、なんだっていうんだ」

「取られたの、魔女に。命を」

「魔女？ 命を取られた？」

そんなケース全くもって聞いたことが無い。まず魔女がいること自体が信じられない。しかし、目の前に電車で轢かれていても生きている人間がいるのだから、魔女はいるのだろう。

「というか魔女ってどんな人だ？ やっぱり三角帽子を被り、鼻がピノキオばりに長い、巨大な釜に入った怪しい液体をかき回している老婆のことだろうか。」

それはともかく、だ。皆羽は死にたい、という願いからあんな自殺行為をしたのか。それもおそらく何回もやっているはずだ。あの

時、目が据わっていたから。

「そう。ずっと昔、わたしが普通の可愛い女の子だったときに」

こいつ、自分で自分の事を可愛いとか言い始めたぞ。自画自賛だ。しかし、さっきまでのような暗い表情ではなかった。

「森にいたら、魔女が来て、『命』を取られて、それからずっと不老不死なのよ。はい説明終わり」

「おいおいおい！ 絶対に省いちゃいけないところを省いたな お前！ もうちょっと詳しく説明してくれよ……」

「しょうがないわね、耳の穴かっぽじってよく聞くのよ。良い分かった？」

「はい……」

なんだ、何も悪いことしてないのに、俺の立場が下になってる。

おかしい。絶対におかしい。この状況も、この話も、この女も。

「そうね、このあたりから説明しましょ。人の『命』と『魂』は別物なの。命は有限のもの。魂は輪廻する可能性のあるものだから無限かもしれない。輪廻するかどうかは死んだこと無いからわからないわ」

「へえ……」

「で、『命』が取られると『魂』だけがこの体の中に残る。魂は寿命を持たないからわたしは死ななくなる。死ぬときに消えるのは『命』なの。アーユーオーケー？」

「ちよつと待て。魂は無限『かもしれない』なんだろ？ じゃあなんで無限って断定できるんだ？」

「それは輪廻に関する問題。残留するものとは違うの。じゃあ、続けるわね。これでわたしは死ななくなりました、でも不老までは違う」

「ふむ……」

いけね、秋の晴れた陽気だから小難しい話を聞くと眠くなるな。

「魔女は、追加でわたしに不老の薬を飲ませた。不死の薬の劣化版だそうよ。これで、わたしの不老不死の経緯は分かった？」

「ま、まあ。でもなんで魔女はお前の『命』を取ったりしたんだ？」  
「そんなものわたしが知りたいわ。まあ、そのおかげで助かったともいえるし、人の道を踏み外したともいえる」

「どうしてだ？」

「わたし、その魔女に会ったとき、死に掛けていたのよ。確か……病気だったわね」

彼女はフェンスから手を離し、俺の隣に座って、眉一つ動かさずに淡々としゃべり続ける。これも一種告白だな。笑えない話だが。

「ふうん……。じゃあ、最後の質問。どうして……どうして俺にこのことを伝えたんだ？」

「わたしの願いを叶えてもらうためよ」

「は？」

俺はつい、彼女の言ってることが一瞬だけ理解できなくて、素っ頓狂な声をあげてしまった。いや、何の義理も無いだろ……。

「わたしの不死身のことを知ったからには同等の対価が必要とされるのよ」

「騙されたに近い呼び出し方でしたが」

「そんな小さいことは気にしないほうが良いわよ」

「小さくねえし！」

「もつと寛大になりなさい」

「寛大になってもこれは怒ると思うな!？」

くそう……。さっきから彼女に振り回されっぱなしだぞ、俺。そろそろ反撃を

「あ、もう昼休み終わりだわ」

「俺は神に愛されていないのか……」

「それはそうでしょう、桐谷君なんだから」

「理由になつてねえ！ くそ……飯も食いそびれたじゃねえか……」

「はっ！ まさか……」

彼女が俺のほうを向いて、目を見開いた。

「どうした、皆羽。俺は今疲れてるんだ。無駄な話は聞かないぞ」

「まさかあなた……お昼ごはんにわたしを食べる気ね!? 野外プ  
レイが好みなの!？」

「食べねえよ! そして好みでも何でもねえよ! 言いがかりはや  
めろ……」

「本当のことでも言っただけのことと悪いことがあったわね」

「というか、この娘ちよつと自意識過剰なところがあるな。今後注  
意して接していかないとクラスメイトに誤解を生むことになっ  
てしまふぞ。」

「さて、そろそろ帰りますか……」

「昨日異常に精神的に疲れたんだ……」。

「じゃあ、そういうことで、放課後付き合ってもらおうよ」

「何に?」

「魔女捜し」

彼女は無邪気な笑顔で言った。

今日からなんだかともない化け物のしでかすことに巻き込ま  
れそうだと、と心の中で人生で一番大きなため息をついた。

五時間目は担当の教師がいないので自習となった。ようは、ある  
程度静かにすればなんでもやってよし、の時間である。まあ、俺は  
眠くなったら寝るだけだが。

日野原は俺の机に来て、その陰に隠れながら思春期の男子がほぼ  
必ず隠す類の本を読んでいた。しかし、なぜここで読むんだ、こい  
つは。

「いいね、いいね……。なあなあ桐谷。この娘良くないか? すっ  
げー良いと思うんだけど」

「お前が良いんなら良いんじゃないか。俺はそんなに興味は持た  
な」

俺の言葉を後ろの転校生がこう遮った。

「桐谷君の好きな趣向はポニーテールのFカップ未満で、身長はあ  
まり高めではない娘よ」

たった今俺の社系的地位を滅亡させましたよこの人。なんか日野原の目線がとても痛い……。こんなアホにそんな目線を向けられたくはない。

「何でお前がそんなこと知ってんだよ!? まさか朝一緒にそれも漁ったんじゃないだろうな」

「ええ。ちよつと大きめの参考書の表紙のしたに、スポーツ雑誌の表紙、それからまあそういう娘がいっぱい載っている本が出てきたわ。まさか、見開き一ページ目にスポーツ雑誌のページを載せているとは思わなかったけどね」

「わああああああああああああああああああ!?」

なんか一瞬だけクラスの空気が凍った。この瞬間、完全に俺へ向けられる目線が普通の人から小細工を利かせる変態に変わったのだ。この魑魅魍魎の一種め……。あとでちゃんとした常識を教えてやらないと……。

「桐谷……今度、お前の好きそうな系統の娘が載ってる本をあげるよ……」

「そんな同情はいらん!」

ああ、もうだめだ。このクラスで生きていけないよ……。完全に皆羽と同じ扱いになっちまうよ……。

「計画通りね」

「こつこつという会話することまで見越されてたのか!? 手回し良すぎだろ!」

こつこつして皆羽の俺に対する社会的抹殺計画はもの見事に成功を収め、クラスの喧騒が戻ったとき、

「おーい、お前ら! 今は自習の時間だ、勉強をしろ、勉強を!」

なぜか担任の間島が教室に突撃してきた。俺の横にいた日野原はものすごい慌てている。まあ、違反物だし、間島なんかに見つかったら本日二度目のクッキングタイムだからな。

「やばいやばい……!」

そう言うと、日野原の手からエロ雑誌は消えていた。

そう、何を隠そう彼は超能力者だ。

なんでも、物をほんの少しの距離だけワープさせることが出来るんだとか。しかし欠点しかないといっていいほどの能力なのだ。物は軽いものじゃないとワープできないし、距離は一、二メートルが限界らしい。

まあそのなんともビミョーな超能力を使い、窮地を脱出した日野原だったが、

「日野原、席にもどれ……おい、お前この本はなんだ？」  
「え？」

どうやら雑誌のワープした先は日野原の机の上だったらしい。これだからこの超能力はビミョーなのだ。まあ、間島に違反物を発見されたからには当然、熱き愛の鞭が下る。

「日野原、俺を一日に二回怒らせるな……といっても指導だ。容赦はせん！ ついてこい！」

「日野原、元気でなー」  
「お前も一緒に来るか、桐谷？」

「いえいえ結構です。どうぞごゆっくりと日野原に時間を割いてやってください」

「うむ」

「う、わ、わああああああああああああああああああああああああああああああああ！？」

日野原の絶叫とともに五時間目の終業を告げるチャイムがクラス中に虚しく鳴り響いた。

六時間目は寝てしまったので記憶が吹き飛んでいる。いつのまにかホームルームが始まっていた。そしていつもと変わりなく放課後になった。

クセで帰ろうかな、と思っていると、  
「ちよつと何帰ろうとしているの？ わたしに付き合っ予定はどうしたのよ」

「ああ、そんなものがあつたな。なんで俺が……。まあ、いいけど

わ」

怠慢な一日を過ごすよりは有意義そうだ。

「そう。じゃあ早速行くわよ」

「へいへい」

ちよつと面倒だが、彼女についていく。

皆羽詩音という不老不死の女の子は表情に変化が無いのか？ 嬉しそうな顔というものが見てみたい。どんな顔なんだ。想像もつかない。俺を罵っているときのような顔だろうか。いや、それはサデイストのすることだ。いや、こいつはサデイストだろ……。思考がだんだん滅茶苦茶になってきたので、この考えをやめることにした。こんなことを考えたって無意味だからな。

「で、魔女ってどこにいるんだ？」

「分からないわよ。こつちが聞きたいくらいだわ」

「えええ！？ 行くアテもなく魔女を捜すのか、お前は……。まったく本当に困るやつだ」

「世界中を旅しているのも魔女を捜すためなのよ。それにしても桐谷君がこんなにも使えないなんて……。予想が当たってしまったわ」  
「予想してんならついてこさせるなよ！ で、魔女はだいたいどこにいるのか、分かるのか？」

「知らないわ」

「オーマイゴッド……」

これじゃ散歩とほぼ同義じゃないか……。なんだか時間を無駄にしている気がする。彼女はこちらを振り向いて言う。

「でも、大丈夫よ。あなたの仕事にはなるはずだから」

「え？？」

「魔女で無い化け物の類が自然にわたしに近づいてくるから」

「……………」

よく分からなかったが、時期に分かることなのだろう、と俺は思い過ごし、そのまま彼女と街中を歩いた。

あてどもなく歩いてみると、陽が落ち始めていた。流石に遅い時

間まで、女の子を連れまわすのも良くない。不老不死だけど。

「皆羽、今日はこの辺にしないか？ また明日捜せば良いんだし」

「そうね。じゃあ帰りましょう」

「お前、家が無いんだっけ。どこかのホテルにでも泊まるのか？

そこまでなら送って行ってやってても」

「何を言っているの。わたし、あなたの家に住むのよ」

「は？」

うん、GAGだろう。いいGAGセンスだ。一瞬、この俺ともあ  
るうものがぼかんとしてしまっただぜ。皆羽は将来芸人になれるかも  
しれん。

「またまた、ご冗談を」

「泊めなかつたらあなたを殺してわたしが住むわ」

「ひいひいひいひい！？」

どうやら本気だったようだ。いや、待て。思春期の男子の家に軽  
く泊まるうとする女子構成ってなんだ、と思いつつ、

「ああ、大丈夫よ。桐谷君」

「な、何がだよ」

「夜にあなたがわたしの布団に入った瞬間に、あなたの急所をもぎ  
とるから、大丈夫」

「ひいひいひいひい！？ それだけはやめろおおお！」

恥らった顔も無く背筋が凍るようなことを言った。これはもう腹  
を括るしかなさそうだ。とりあえず、昨日をやりすごしたんだし…  
…なんとかなるはずだ。うん、信じてるぜ、俺。

「分かった…分かったから大事なものを取らないでくれ……。で  
もお前の生活必需品なんてないぞ？ どうするんだ？」

「その辺のスーパーで買って行くわ」

「そうか。俺は先に戻ってるぞ。家の場所は分かるだろ？」

「ええ。でも変態の桐谷君がわたしの下着の購入を見たがらないな  
んて不自然だわ」

「……………」

俺は彼女に一体どういう認識をされているのだろうか。確認できるものならしてみたい。

「そんな落ち込むことは無いわ。人には必ず欠点があり、長所あるものよ。桐谷君には長所ないけど」

「欠点だらけで悪かったな！　じゃあ、またあとで」  
「ええ」

女性と同じ屋根の下で生活する理由はもうちょっとマシであってほしかった。これは歪すぎるだろ。不老不死の女の子のために魔女を捜す。わお、マンガにしたら売れるんじゃないか？

しかし、一つ謎がある。

なぜ、彼女は魔女を捜しているんだ。魔女を捜して『命』を返してもらおう、とか。しかしそんなことが上手くいくはずがない。彼女が現在何年間生きているのかは分からないが、俺よりもはるかに長い時間を生きていることは火を見るより明らかだ。

そんな彼女が世界中を歩いて見つけれない魔女をこんな、都会に遠いわけでも近いわけでもないこの土地で見つかるというのか。

(あとで聞けば済む話か)

家の前に着く。今日も一日疲れたな、と思っていると、カサカサカサ！　と紅葉した木の茂みがゆれた。

「ッ！？」

まさかこれが皆羽の言っていた、わたしではない化け物の類、なのか……。

「いたっ」

「……………」

シヨートヘアに、艶かしいまでの長い足。そしてうちの学校の制服。

「月城……こんなところで何をしていたんだ……」

「ちよつとオーパーツを」

「なんだよ、その、ちよつと散歩してました、みたいな言い方は！

？　第一、人ん家の前の木の上でそんなもの探してんだ！？」

「そんなことどうでもいいだろう」

「よくねえよ。で、実際のところは？」

彼女は一瞬だけ、考えるような仕草を見せ、

「ま、待ち伏せをしていたんだ」

「拳動不審すぎるぞ」

「本当のことを言つとだな、君の家に邪気が漂ってきたのだ」

「はあ……」

邪気、ねえ。皆羽は邪気しか放っていないような気もするが。

「まあ何事も無いので良かったよ」

「……………」

「さらばだ」

と言つて駆け出した瞬間、どてっ、と思ひ切りこけた。何も無いところで、こけた。

俺は彼女の近くに行き、声をかける。

「おい、大丈夫か？ 怪我は無いか？」

「ううう……。痛いよう……」

そのちよつと涙目になった顔がその……異常に可愛かった。いつもの凜々しさが抜けてさらにあどけなく見えるのだ。

いつもより可愛げがあるので、つい、

「家上がつて絆創膏貼つてくか？ このままだと傷が悪化しちゃうから」

「うん……」

これはマズイ。破壊力が強すぎるっ……惚れてしまいそうな勢いなのだが

「あら、桐谷君が女の子をわざと転ばせておきながら、助けるといふベタな手法を使って女の子を家にながらせようとしているわ」

レジ袋を両手に持った皆羽が俺の後ろに立っていた。

「んなことしてねえよ！ つーかお前、どこから見てた」

「ほぼ全部よ」

「まずは知人を見たら声をかける練習をしようか」

「息を殺す練習ならいつぱいやったけど」

お前はどこの暗殺者ですか。というかけっこう恥ずかしい場面を見られたぞ……。クラスメイトの女の子に赤面している姿と、遠目から見たら口説いているようにしか見えない姿。どちらも社会的抹殺をするには十分だ。

すでに俺の立ち位置が危険だというのにも関わらず皆羽はさらに追撃をかける腹づもりなのか。女って怖いよね。

「ああ、それと」

「……なんだよ」

「わたしの下着はあまり見ても興奮しないんじゃないかしら」

「知るかそんなもの」

こいつの下着。青っぽい感じた。いや、裏について子どもっぽい柄か。いやいやこいつに限ってそれはあり得ん。紫か、さぞかしその姿は扇情的であろう。

彼女のボディラインを見ると案外良かったりする。

「何よじろじろ見て。八つ裂きにするわよ」

「はい、すみません……。じゃあ月城、行くぞ」

彼女はこくりと頷き、俺についてくるのだった。

とりあえずの処置として月城には傷口を消毒した後、絆創膏を貼って帰ってもらった。まあ、遅くまで男の家にいるのも考え物だからな。

そして、俺がぼうつとしていると、

「それにしても桐谷君。あの娘には随分優しいようだったけど……。不思議系少女がお好みだったのかしら？ てっきり昼間に言った

」

「ああ、もうそれは言うな！ ……別に善意で動いたって良いじゃないか。怪我してる人がいたんだし、クラスメイトだし」

「ふうん……」

「なんだその訝しげな目は」

「別に」

なんだか不機嫌そうなオーラを出しているが、俺の気のせいだろう。俺は気分転換ついでに日課をしようと思いついた。

「皆羽。ちょっと俺、身体動かしてくる。ついでに飯、買ってこようか？」

「その必要はないわ」

「もう飯買ってあんのか」

「わたしが作るから。ここにお世話になるせめてもの感謝の意よ」  
まあ、うん、そういうことだ。もうこういう普通じゃないことはスルーして行こう、俺。

それにしても皆羽の料理って………どういうのだろうか。よくある劇的にマズイ、とか。そんなだったらいやだ。

「分かった。じゃあ、楽しみにしてるよ」

「えらく素直なのね……」

「じゃあな。三十分くらいしたら戻る」

そう言い残し、玄関を飛び出る。ああやっべ、制服のままだ。まあいいか。夏でもないからそんなに暑くもないし。

(それにしても皆羽はなんで俺なんかについてくるんだろ……)

化け物退治屋の見習いだからか。いやそれならその一人前の人間についていけば済む話じゃないか。

「ふっ……ふっ……」

なんだって一体こんな俺に。何の取り柄もないのに。

俺をプロフィールで書くとしたら、何の特徴も無いのが特徴とでも言うのが適当だろう。ああ、今のクラスだと変態か……。ああやだ。

「ちょっとそこのお兄さん」

「はい？」

女性の声だった。声のするほうへ振り向く。そこには黒い三角帽子、黒いローブ。帽子を深く被っているせいで顔がよく見えない。

しかしその姿はまさに、

「魔女……?」

「声をかけた相手を魔女呼ばわりするなんて。最低だわ。通りすがりのコスプレイヤーだと思ってくれて構わないのよ」

通りすがりでコスプレイヤーがいるのは東京の秋葉原くらいだろう。

「すみません……。で、何か用件があるんですか」

「まあちょっとした実験台になってもらいたくてね」

「ええ……」

こんな怪しい装束を身にまとう人間の実験台といえば、人体改造くらいしか思い浮かばない。ショッカーにでもされてバッタ仮面と戦うのだろうか。

そんなくだらない疑問を頭の中でしていると、

「いや、そんな怪しいものじゃなくてね、このマリファ……いやこの錠剤を試してもらおうかと」

「あんた今どさくさに紛れてこの国で持つてはいけない物の名前言おうとしたよな」

「気にしないで。というか、気にしたら……負けよ」

「なんなんだ今の溜めは。しかも俺は何に負けるんだ……」

「とにかく、これを試して欲しいの」

黒ローブが手に持っているのは透明な容器だった。その中には、カプセルがほんの二、三錠だけ入っていた。

「これは一体何の効用があるんです?」

「願いを叶える薬だよ。常に持つておくと良い」

「……………?」

願いを叶える薬。

俺の昨日からのことを考えると信じられないことも信じるほか選択肢がないのだ。しかしランプの魔神でもないし、七つ球を集めてやるわけでもない。

「飲むと願いが叶うわけじゃないの。飲む前に願う。効果はそう何度もないけど」

「ふうん……？」

飲む前に願う、か。まあ、怪しい薬でないことを祈るか、それともこれをつき返すか。

「うーん、やっぱりこれは……」

俺は、言葉をつなげられなかった。なぜなら、目の前からさつきまで確かにいた黒ローブが消えていたからだ。魔術？

（いやいや何を考えているんだ俺……）

まあ、ここはいつもの見なかったことにしておこう、だ。そう、それが一番だろう。

俺は手に持った薬に若干の不信感を抱きつつ、その場を立ち去った。

（というか、一番大事なこと聞き忘れたな。あんたは、不老不死にした女の子がいますかって）

今度出現したときにまた聞こう……。

その後、ランニングを終えて、家に帰った俺を待ちうけていたものはカレーの香ばしい匂いだった。なんだか、とてもおいしそう。

まるで夫婦みたいだなあ、と頭の中で冗談を抜かしつつ、

「皆羽、あとどれくらいでできるー？」

「しばらくかかるわ。先にお風呂にする？ それとも……」

俺は次の言葉に期待する。

「あ、カレーが」

「タイミング悪いなおい！」

「あら桐谷君、この言葉の続き、なんだと思ったのかしら？ まさか『わたし』とでも思ったのかしらね、この汚い豚が」

「そこまで罵らなくて良いだろー！」

「考えたことは否定しないのね」

終始皆羽にもてあそばれているような感じがするのは気のせいだろうか。気のせいであることを俺は信じたい。

俺は少しだけ声を鋭くして、彼女に問うた。

「皆羽。魔女って容姿はどんなヤツだ？」

「おそらくあなた考え付きそうな魔女の姿で合っているはずよ」

「……俺、今日、それっぽい人にあっただけだ」

俺がそういうと、彼女は台所から瞬間移動したような速さで俺の元へと詰め寄り、

「冗談、じゃなさそうね」

「ああ。その人、俺に渡すもの渡したらすぐに消えちまったから、確証はもてないけど」

「そう……」

彼女は一瞬、考え込むような表情をして、

「時期にもう一度現れると思うわ」

「どうしてそう思うんだ？」

「あなたを観察するためよ。その薬が効いているかどうか」

彼女はテーブルの上に置いた、魔女から貰った容器を指差した。

俺より圧倒的に知識のある皆羽がそういうのだから、そうなのだろう。信じるほか無いのだ。

「分かった。そんなときには捕まえとくさ」

「ええ、よろしくお願いしたいものね」

俺は頭の中に浮かんだふとした疑問を投げかけてみる。

「なあ、皆羽。お前、今なんさ」

また俺の言葉は遮られた。今度は皆羽が首筋にナイフを当ててきたのだ。あれ、こいつ、ナイフをどこに隠し持っていたんだ？ 来たときには持ってなかつたはずだ。未恐ろしい。

「人には聞いちゃいけないことがあるでしょう？」

「は、はい……」

「分かればいいのよ、分かれば」

やっぱり彼女は怖かった。しかし、その後に食べたカレーが近くのカレー専門店のカレーよりも美味しかったのは口に出していない。

食後。皿洗いは俺がやり、ひと段落した頃。

「お風呂、借りるわね。どう？ 桐谷君も一緒に入る？」

「ぶべらっ」

今出した声をもう一度やれと言われても無理だろう。なぜなら、自分でも何言ってるのか分からなかったからだ。

「お、おま……何いってんだ!？」

「あらいやだ。冗談じゃないわよ」

「どっちの意味で言った!？」

あなたと入るのが冗談じゃないわよ、という意味なのか、今は冗談じゃないという意味。いったいどっちなんだ……。

「どっちの意味で捉えてもらっても構わないわ。ただし」

「ただし？」

「わたしはあまり自分の身体には自信を持っていないわ。警察に行くくらいだったら見ないほうが良いかも。顔なら自信あるけど」

ナルシストなのか、謙虚なのか、どっちははっきりしてくれ、と心の中で願った。

「とにかく先に入ってくれ……。シャンプーとかは女性用のものないけど」

「買ってきたから大丈夫よ」

「そうか」

しかし、こいつはどこから金を……いや、考えないほうが得策だろう。聞いたらまた喉元にナイフを当てられそうだから。

そんなことはどうでもいいとして、今考えるべきはあの魔女だ。じきに現れる理由は俺を観察するため。薬の効果を見るため。そのために来るのだ。

そして、皆羽は彼女の『命』を取り返そうとする　ということだろうか。

「うーん……」

俺は考えあぐねていた。いや、考えに集中できていなかった。な

ぜなら、

(風呂場からシャワーの音が……！　なんだこの生殺し状態は！  
?)

さつきから水の音がずっと聞こえてくるんです。はい。お年頃の女の子との同居生活にはまだまだ苦惱しそうだ。

いつも皆羽に弄ばれて気付いていなかったが、彼女はとんでもなくボディラインや顔立ちが良い。しかもポニーテール。ああ、毒舌さえなければ、いいのになあ、と頭の中でふと思う。

あと一つ残念な点を挙げると、彼女はよほど感情が表に出ないよ  
うで、ほとんど表情に変化が見られない。いつも無表情とまではい  
かないが、無愛想な顔つきをしている。笑ったらどうなるんだろう  
か、と妄想を開始した途端に思った。

(あいつが笑う場面……俺を踏んでいるところしか思い浮かばない  
のはなぜだっ……！？)

恍惚とした表情で、邪悪な笑みを浮かべながら、俺を踏んでいる  
場面が一番最初に出てきたのだ。俺はよほど彼女に恐怖しているら  
しい。

「良い湯だったわ。次、入っていいわよ」

そんな俺の目の前に現れたのは、バスタオル一枚で身体を隠して  
いる皆羽だった。

「お、お前は服を着てから来い！」

「だって、服がここにあるんだもの。しょうがないじゃない」

「そりゃそうだが……って何でお前は俺の前で服を着るんだ!？」

「わたしだって男の子の前で服を着替えるなんて……けっこう恥ず  
かしいのよ?」

「そんな涼しい表情で言われても説得力無いぞ……」

彼女は恥ずかしいと自分で言いつつも、まったく頬を赤らめませ  
ず、語尾が小さくなることも無かった。しかし、裸を見たら殺され  
ると思い、俺は後ろを向いた。

「じゃあ、俺は風呂入ってくるよ……」

「ええ」

風呂場を開けるとなんだか良いにおいがした。女もののシャンプーやらリンスやらボディソープやらのせいだろう。それがやけに俺の感情を揺さぶる。

これは何の匂いなのだろう、とシャワーを浴びながら考える。シャンプーを取ろうとしたら、同じものが二本あったのだ。

(二本買った覚えは無いんだけど……)

まばたきをしてもう一度そこを見ると、シャンプーはなくなっていた。まあ、ただの幻想だろう、と軽く受け流したのだった。

俺が着替えて、リビングに戻ると皆羽は既に寝ているようだった。和室で寝ているはずなので、放置しておくことにする。入ったら確実に殺される。

テレビを見てみると、また心霊現象を取り扱った番組だった。最近はホラーが流行なのか？ 夏はもう過ぎたんだが。

「なんだ、全部偽者じゃんか……。ネタバレされるってのは面白くないな」

幽霊については一通り知っている。これでも勉強はしているつもりなので、大体の事は分かる。まあ、不老不死なんてそんなものが存在すること自体イレギュラーだから、まずもって文献が存在しない。

あつても古文だったり、俺には解読できないようなヤツだ。まあそんなヤツを使ったところで彼女のが分かるとも思えない。

何せ、その元凶は魔女なのだから。

second days 〳その耳はキツネ

そして翌朝。皆羽が裸エプロンで料理をしているとか、朝起こしに来るとか、そんな幻想的なことは一切無く起床した。まあ、そんなことがあってもパニック状態になるだけだろう。なぜか、って？

聞くな。人には触れちゃいけない部分があるだろう。恋愛経験がこの人生で一回も無いとか、女性にはネクラとか呼ばれたりすることは絶対に言わない。

「はあ……」

「ほほう。人間の朝などこんなものなのじゃな」

「そつだよ……ってお前誰!?!」

皆羽でもなければ、親父でもないこの声。俺の布団の横には、少女の姿があつた。つぶらで、俺を見る大きな瞳。少し小さな体躯に、朝でもナイトキャップを被っていて、そのナイトキャップからは 耳が生えていた。

猫耳でもなく、犬耳でもなく、ねずみ耳でもなく……言うならば、  
「キツネ耳?」

そのキツネ耳は尻尾を嬉しそうに振りながら言った。

「おお、よく分かったのう。分かる人間も少ないぞ。というか昨日からここにいたのじゃが。シャンプーとか言うやつに化けておつたぞ。それにしても、この家主はけっこうマニアックな趣味を持っているようじゃの」

昨日のシャンプーの数が増減していた原因はこいつにあつたらしい。

「まず人を変態扱いするな! そしてお前は誰だ!? なんでキツネ耳なんて生えてんの!?!」

「それはじゃな」

と、キツネ耳が何かを言いかけたところで、皆羽が扉を開けて入ってきたのだつた。

「さすが、桐谷君だわ。獣プレイなんてマニアックな」

「なんでこいつと同じ事を言う!? 良いか、皆羽こいつはな」  
「邪魔してごめんなさい。どうぞ、続けて良いわよ。わたし、そういうの気にしないタイプだから」

若干だが、このキツネ耳に対して敵意みたいなのを向けているのはいったいどういうことだろうか。そして、なぜか、俺に対するの視線がととても痛い。

「待て、お前はこの状況を見てなんだと思ったんだ……?」  
彼女は顎に手を当てて考え込むような体勢をとった後、

「桐谷君が夜な夜な拾ってきた少女にこれから手を出そうとしていたんでしよう?」

「断じて違う」

こいつの想像力は思春期の男子を軽く超えていると思う。俺でもそんなこと思いつかん。

「こいつ、朝起きたら横にいたんだよ……」

「へえ……それ、化け狐よ」

「え……化け狐ってあの化け狐?」

「そうよ。昨日言ったでしょう。わたしでない化け物の類が近寄ってくるって」

「おお、そのの娘。よく分かったのう。博識じゃな」  
キツネ耳が続ける。

「ただの化け狐ではないぞ。その中で最上位の天狐てんこというものじゃ。偉いのじゃぞ」

「天狐って神様じゃねえか!? なんでこんな所に……」

天狐。狐が千年生きた姿である。そして、神にも通ずる、神聖なる霊獣。神獣である。

本来その姿は見えないのだ。狐にもランク付けがあり上から、天狐、空狐くうこ、気狐きこ、野狐やこというものだ。気狐から上は形というものが存在しない。

幽霊とでもいえよう。そしてその天狐は幽霊にもなれるし、魚に

もなれるし、こうやって少女の形を取ることまでできる。ようは、変幻自在。

そんなお偉い狐がなぜこんなところに来たのか。天狐は悪さをしないはずなのだが……。

「なんだ、ババアじゃ」

その瞬間、天狐の九本の尻尾が一瞬にして、ナイフへと変わり、「それ以上言ったら、おぬしを殺めてしまつかもしれぬなあ」

「す、すみません……。というか、なんでこんな所に来たんだ？　うちは無宗教なんで、原因は皆羽を除いて何も無いはずだけど……」

「ふむ、それはのう……」

と難しげな表情をしながら、言った。

「その前に飯をよこせ。朝じゃる。飯をよこせ」

「え……」

「何をぼうつとしておるのじゃ！　はようせいっ」

神様でもお腹すくんだ……。

やっぱり用意すべきは油揚げか、それとも稲荷寿司か。どちらもこの家の中にはないので、

「天狐……様？　稲荷ずしも油揚げもこの家には無いんだが」

怒るかな、と思っていたのだが、

「フォアグラで良いぞ」

どうやらこの神様はお供え物でとても良いものを食べてきたようで、舌がおごっているらしい。まあ普段は神社とかにいて、そこにあるお供え物を食べているのだから。しかしフォアグラなんて供えるやつがいたとはびっくりだ。

「桐谷君、遅刻するわよ。そんな化け狐などと構ってないでさっさと行きましょう」

「なんじゃ、おぬしら、寺子屋に行くのか？」

「江戸時代ではそう言ったらしいな……。学校だ、学校。分かった、皆羽。すぐに行く」

「朝ごはんは作れないわ。ごめんなさい」

「いやいいよ。俺は勝つ手に済ますから。ということで天狐様。話はまた後でな」

皆羽は自分の仕度をするべく俺の部屋から立ち去った。しかし朝だからか最後まで不機嫌そうな顔をしていたが……。まあ気にしないで置こう。俺が言つと、彼女は頬を膨らませ、

「このわしを愚弄するというのがじゃな！ 許さん、罰を受けよ！」  
罰ってなんだ罰って。神罰か。

「はいはい。駄々をこねるのはよしましょうね、神様。着替えるから出て行きましょう」

見た目が小さいので、小学生をあしらっているようにしか思えないのだ。いや、待てよ。もしかして皆羽は俺のことをロリコンだと勘違いしていないだろうか。大変な誤解を生んだら学校で流されかねない。

「くそう！ こうなったら化けてでもおぬしらについて行ってやるわ！」

「お前は絶対についてくるな！ 俺の社会的立場が危くなる！」

「もう落ちてるけどね」

と身支度を終えた皆羽。早いな。女の子って着替えとかに時間がかかるもんだけど。

「うるさい！ 仕立て上げたのお前だろ！」

「何のことかしら」

「お前は素晴らしい記憶力を持っているようだな。お前の不都合は全部消えるのか」

「褒めないで……照れるじゃない」

「褒めてないからな……お前は先行ってる。一緒に出て行って見つかつたら色々面倒だ」

「分かつたわ」

さて、俺も着替えて行くか、と思つた頃にはあの天狐はいなくなつていた。まあ、稲荷寿司やフォアグラでも食べに行ったのだろう。そう思い、俺はカバンを持って家を出た。

「おはよ、桐谷……」

俺の横にはやけに眠そうな顔の日野原がいた。俺はカバンの中にしまつてある物を机の上に出しながら言う。

「どうした。お前の唯一の取り柄……いや、お前の唯一の生きている証拠、元気が無いぞ」

「僕はちゃんと元気が無くても生きてますよ！ いやさその……姉貴が色々うるさくて」

「ふうん……」

「若いうちは色々苦悩すべきじゃぞ。老いてもつたら悩むことさえ忘れてしまうので」

「そうそう……ってお前ちょっと来い」

俺の真後ろ天狐がいた。その身体を持ち上げて、廊下に連れ出そうと思つた瞬間、

「ちよつと……桐谷君つてもしかしてロリコン……?」

「いやだあ、気持ち悪い」

「今度からちよつと距離置こうよ……」

ヒソヒソヒソヒソ。俺のこのクラスの中での社会的地位はもう、無いに等しくなつてしまった。しかも全部化け物のせいである。

とにかく天狐を廊下に連れ出し、

「なんでお前はここにいるんだ」

「教科書に化けておつたのじゃ。それにしてもこの寺子屋はずいぶん広いのう。おぬしはいつもここに來ておるのか。贅沢じゃな」

「まあな……。楽しくは無いけどな。そうだ、あんたの名前は、天狐で良いんだよな？ 正式な名前があったら教えて欲しいんだけど」

「いや、天狐でよい。そのほうが気楽じゃからな」

まあ神獣にも色々あるのだろう。触れないで置こうと思ひ、話を  
変える。

「なあ、天狐……」

「様、はいらんど。堅苦しいのはもうこりこりじゃ」

「そうか。天狐。お前、引き続き何かに化けていてくれないか？  
このまま授業に出るのもまずい」

「まあ良いじゃろ。では、先ほどと同じく教科書に化けるぞ」

「ああ、頼む」

たった一瞬だった。まばたきで目を閉じているうちに天狐は女の子の姿から教科書に姿を変えたのだ。さすが、化けるのは朝飯前らしい。

俺はその教科書を拾い上げ、誰の目にもつかぬよう、ひっそりと席に座る。

「桐谷……お前……色んな趣味持ってたな……」

「言うなよ！」

くそ……日野原までに言われちゃおしまいじゃないか。俺が心の傷を自分で治そうとしているところに、

「桐谷君はロリコンだったのか……」

追撃をかける月城。もう反抗する気力さえ残っていないところに、  
「獣プレイにロリコン、それからポニーテール、と。まさに変態ね」

止めの皆羽。もう、俺は、しばらく立ち上がれそうに無かった。

真っ白に燃え尽きたジョーの気持ちがよく分かった瞬間だった。

「はっ!？」

そして気付いたときには、放課後だった。クラスの大半が出て行き、となりには疲れた様子の日野原がいた。

「なあ日野原。俺今までどうしていたんだ……？ 授業を受けて記憶が飛んでるんだが」

「ああお前。普通に授業を受けてたけど……でもなんだか目がうつろだったし、動きもフラフラしてたし。なんだか機械的でもあったような……」

「そうか……」

どうやら無意識のうちに半日を過ごしていたようだ。

「帰るか、日野原。行こうぜ」

「おう。あれ、そっぴやあの子どうした？ てんこちゃんとか言うてたけど。帰ったの？」

「何でお前がアイツの名前を知っているんだ？」

「だって昼休みに出歩いてたじゃん。クラスのみんなにチャホヤさされているところ、お前も見ただろ……って覚えてないのか？」

「……………」

「いたずらっていう自覚が無い神様はこれだから困る。しかもチャホヤって……まあ見た目はどうとでもなるからな、あの狐。」

「お前の妹なんだろう？」

「は？」

「いやだから、そのてんこちゃんが、あれはわしの兄じゃ、とか言うてたんだが」

「ここで変に言い訳するのもだめだな。勘違いを起こしてしまう。」

「まあ、義理の妹みたいなもんだ」

「へえ……。まあいいや。じゃあ、帰るか」

「おう」

皆羽は先に帰っているようだった。後ろの席はもう空っぽである。しかし不老不死に続き、魔女。その次は化け狐。しかも天狐。化け物の類が三連続。こんな本当の化け物なんて、人生に一回遭えるかどうかだというのにも関わらずに、だ。

退治しようにもできない相手。なんだか、自分が情けなくなってくる。

そんなときだった。いつもの通学路。その途中にある公園に差し掛かったところで日野原が足を止めた。

「なあ、桐谷。あれ、皆羽ちゃんじゃないのか？」

確かにあの髪の毛と華奢な体躯と新しい制服は皆羽の後ろ姿だ。「皆羽ちゃんって……。あいつは可愛げというものをこの世で見せないんじゃないかってくらいそれが無いぞ」

「いいんだよ、そんな細かいことは。おーい、皆羽さーん」

「おいおい……」

日野原が彼女に向かって走ったときだった。その皆羽だったものが、突如、巨大な狼の姿に変わった。

(化けた!? キツネか、それとも狸か……)

「日野原、離れる!」

「う、うわあああああああああ!?!? 狼!? どうして!?!」

「お前、なんかカッターとか持ってないか? 何でも良い。とがってるものだ!」

「バタフライナイフならあるけど」

お前は中学生か。

「それでも良いからよこせ! んで下がってる」

「お、おう……」

狼が吼える。

恐ろしい速度で、突進してくる。それを身体を使って何とかかいくぐるも、狼は瞬時に方向転換し、再び俺めがけて飛び掛る。

「くそっ!」

飛び掛ってきた瞬間、しゃがんで狼の腹に向かって膝蹴りを打ち込んだ。狼の体は意外に重く、吹き飛びはしなかったものの、ダメージは与えられた。

なんだ、このスリルは。初めて体感する恐怖。死への道が見える。

「あははっ、良いじゃん……」

自分でも分かるくらい顔がにやけている。狂気じみた顔になっているだろう。

心の底から、楽しいのだ。

狼は次は熊に化ける。ツキノワグマだ。そして、本能が告げる。

殺される、と。

そう、相手は攻撃してこない幽霊でもなければ、穏便な妖怪とも違う。明らかに敵意を持った、化け物。だがしかし、これが、本業だ。

「うおっ!」

鋭い爪がふり回される。凶暴なまでの暴力の嵐。一撃でも当たれば皮膚が裂け、ミンチになってしまっただろう。それを本能と動体視力で何とか切り抜け、熊の懐に入る！  
バタフライナイフを展開する。熊のほんの一瞬の隙を突いて、跳躍し、熊の目を狙う。

「うおおおおっ！」

見事に命中し、片目を傷つけた。これで勝負は分らない。たとえ、熊でも片目を失えば、爪をふり回す位置がずれるはずだ。回避のための一手を打ったというわけだ。

だが傷ついても熊だ。これから、どう手を打てば良い……俺がそう攻めあぐねていると、

「いやあ、御見それしたわ。けっこうやるではないか、若造」

「は？」

この声。その熊が一瞬で、キツネ耳と尻尾の生えた女の子へと姿を変える。

「天狐……」

「いやあ、腕試しをさせてもらったのじゃ。悪かったのう、手荒な真似をして」

「え……」

俺と戻ってきた日野原が顔面蒼白状態である。

どういうことですか、これ。もしか、命がけで戦った相手が知り合いの化け狐で、殺しにかかられたりしたのにそれを腕試しだと言いつ張る、ということでしょうか。

「天狐……今日の夕飯抜きだな」

「や、やめるのじゃ！ 謝罪はしておろう！ だから夕飯を抜きにするのはやめい！ 神にたてつくのか！？」

「うるせえ！ おかげで死に掛けたろうが！ 抜きは抜きだ！」

「あのおう、二人とも一体何が起こったのか説明してもらえますでしょうか……」

日野原が俺たちの会話に押され気味に言った。

「そついや、忘れてたなお前のこと」

「ええ！？ ひどいよ、桐谷！」

「ああごめんついうっかり心の声が漏れちゃった」

「心の中でも忘れられてたあっ!？」

まあこんな雑談はさておき、だ。こいつに事情を説明しないといけない。彼は俺がちょっと特殊な人間であることも知っている。超能力を覚えてくれた際に俺のことを教えたのだ。

等価交換ってやつ。

「まあそれはそれで置いておいて。それでな、こいつは、天狐っていうんだ」

「そりゃ知ってるよ。自分で言ってたじゃん」

「ああ、名前じゃないんだ。天国の天に、狐で、てんこ。神獣っていうまあ神様的一种だな。何で来たのかは分からないけど」

「神様なの……？ この子が？」

「おう」

「改めてよろしくじゃ、若造」

日野原は若干戸惑っているようだ。まあ、仕方あるまい。自分がいくら小さい能力を持っているということを抱えているとはいえ、これは神様です、なんて紹介されたら固まって当然だ。

俺のほう異常なのだ。

おかしいのだ。そして、悩ましげな表情をしながら日野原が呟いた。

「狐ってどう書くんだっけ」

「お前はそんなことで悩んでいたのか!？」

「いや、狸と狐って似てるじゃん？ だからどっちなのか分からないくてね」

「言ってることがわけわかんないくらいの次元に達してるぞ、お前」  
「若造よ、おぬしは本当に寺子屋に行っているのか……?」

天狐が言う。

「まあそれは良いんだけどさ、桐谷。僕思うにそろそろこの辺を離

れたほうが良いと思うんだよね……。ほら、なんか人だからができてるし……」

「うわっ、やべ……ツラかるぞ！ 日野原あとは任せた！」

「おう、任せとけて……ええっ！？ ちよっと待てよ！」

「お前ならやれる！ お前にしか出来ない仕事だ……」

俺が少し真面目な口調で言う。

「分かった。やってみせる！」

とことんアホだった。何をどうするのかは分からないが、とにかく逃げたほうが良さそうなので、俺と天狐は公園を脱出した。

その後、警察に捕まったり、天狐を狙ったりしているマニアックな変態も出ずになんとか帰宅。逃走のおかげで飯を買い忘れた……。

「はぁ……疲れた……」

「ずいぶん遅かったじゃないの。どうしたのかしら？」

「どうしてお前は涼しげな顔をしているんだ……俺、お前に合鍵渡してないし、まずは服を着ろ」

下着姿の皆羽がいた。非常に扇情的なしなやかな肢体が俺の両眼に映っている。

「ああ、合鍵なら盗ったわ」

「だからお前はそういうことに対して罪意識無いの！？」

「無いわ」

「そんなにきつぱりいわれても困るんだけどな……」

すると、彼女は何かに気付いたようで、

「桐谷君、何かに襲われたりした？ 服のボタンがほつれてるわ」

制服の第二ボタンが外れかけていた。狼の爪か熊の爪か、そのどちらかに引っかかってしまったのだろう。

「いや、実は天狐に腕試しだ、と後付されて、襲われた」

「まあまあよいではないかよいではないか」

「お前はどこの武士だ」

アホな会話をしていると、皆羽が口を開いた。

「ねえ、化け狐。あなたは何の目的でここに来たのかしら？　気まぐれで神獣が民家に下りてくるなんて話聞いたことないわ」

「ああ、そうじゃった、そうじゃった。話すのを忘れておったわい」  
天狐は改まった口調で、

「わしがここに来た理由はな、おぬじじゃ、桐谷良平」

「俺？　なんで？」

「魔女と呼ばれる者に接触したじゃろ。その魔女は一度現れたものの前には必ず現れるのじゃ。その娘が説明したじゃろ」

「まあな……」

「で、あなたと魔女には何の関係があるのかしら？」

「大切なものを盗まれたのじゃ。それを取り戻すために、わしは、魔女を追っているのじゃ」

「ふうん……」

彼女の表情が一瞬だけ暗くなった。皆羽も天狐も色々複雑なようだ。

「どうやら、魔女は大切なものを盗むらしい。俺も気をつけよう。」

「じゃ、飯買ってくる……って皆羽が作るんだっけか？」

「ええ。あなたに言われるまでも無くつくってあるわ。食べましよう。化け狐は稲荷寿司で良いのよね？」

彼女が笑顔で言うと、天狐は正反対に苦い顔をした。皆羽は意外と年上キヤラなのだ、と痛感させられる、そんな瞬間だった。

the witch く魔女は笑う

不老不死の少女と会ってから三日目。

天狐と会って二日目。

そんな不思議に包まれた生活が続く。ただ、その影響はあまりないという事だ。学校にも行ってるし、自我の無い化け物にもあったりはしていない。唯一変わったことは、俺が魔女から貰った小瓶を必ず身につけているという事だけだ。

そして、今日もちよつと怠慢な一日が始まる。

「皆羽、俺先行くわ。ちよつと今日は急ぎの用事がある」

「そう。じゃあ、わたしはあとから出れば良いのね。化け狐は縛っておくか、釜に炊くか好きなようにしてもいいのね？」

「お好きなように……」

天狐のヤツ、なんか皆羽にしたのか？ やたら怖い事を言う。いつものことだが。

「じゃあな」

今日早く学校に着かなければいけない理由。それは昨日、月城に呼ばれたからである。なんでも大事な話があるんだとか。

たとえ頭の中身が残念とはいえ、月城だつて女の子だ。大事な話があるといわれて、行かない人間はいないはずだ。

「……………一体何の用なんだろう」

ぼそつと一人さびしく呟くと、学校に着いた。そのまま、いつものようにクラスへ入る。俺の席の横には月城が座っていた。

おはよう、と声をかける前に、彼女が口を開いた。

「で、君はここで行為に及ぶと」

「なぜそうなった！？ しかも及ばねえ！」

「君は多趣味なようだな。ロリコンで、ポニテ好きで、しかも野外プレイをご所望とは。中々に……………変態的だ」

「ロマンチックに言っても無駄だからな！ お前は俺を勘違いして

いるぞ！」

「いや、クラス内の評価を言ったまでだ」

最後を省けば、俺のクラス内の評価だった。心の中の何かが折れそうだった。

「で、何で俺を朝早くに呼んだんだ？ 昨日メールしてきたけど……」

……

「ああ、そんなこともあったな」

「おいおい……」

「いやなに」

彼女は続けた。

「魔女がいるというんでね。探してみたいんだ」

俺は動揺した。

ここ二日で魔女に関することが出てきているのに、ここでもまた魔女。月城は関係ないと思うのだが、こんなときだと冗談に聞こえなかった。

「……何の目的で？」

「ふっ……世界征服だ」

思い過ぎだった。

完全に思い過ぎだった。そうだ、こいつが真面目なことを言うはずがない……。

「魔女の力さえ手に入れば！ この地球をやがて宇宙全てを征服できる！」

「無理だな」

「そして全てのぬいぐるみを手に入れられる！」

「夢は意外にも小さいんだ」

「胸が小さいと言ったな桐谷君。抹殺するぞ」

「胸なんて一言も言っただろ！」

ひどいこじつけだった。しかも、月城、ぬいぐるみが欲しいんだな。普段からは考えられん趣味だ……。

「胸には夢と希望が詰まっている……そうなのだろう？」

「小学生に対する説明だなそれ」

「まあいいではないか。それは置いておいて……」  
彼女は少し改まった口調になる。

「本当に魔女の目撃情報があるんだ。魔女、といっても、ありきたりな格好だ。三角帽子に、黒いローブ」

「へえ……。なんかのコスプレじゃないのか？」

「こんなところでコスプレをしている人間もいたらそれはそれで興味深いよ」

「そうだな、ははっ」

「で、まあ。魔女捜しをしたいと思う。魔女捜し。いいじゃないか、なんか部活をやっているようで」

「よし、じゃあ、人手がいるな。皆羽と日野原も呼ぶか」

「うむ、それは任せたぞ、参謀」

いつから参謀になったのだろうかという問いかけはあえてしないことにした。まあにもかくにも、こいつの遊びには付き合ってやるうかと思ひ、

「任せとけ。放課後からで良いか？」

「うむ」

「了解だ」

そう言った瞬間、日野原が入ってきた。彼が朝こんなにも早く来るといふのは極めてまれなことだ。例えて言うならば、地球の自転が反対周りになるくらいの珍事である。

「よう、日野原。ずいぶん早い登校じゃないか……いや、ずいぶん早い投降じゃないか」

「なんで言い直したの!? 僕何も悪いことしてないよ!？」

「気にするな。瑣末なことだ」

「瑣末じゃないよ! まあ、今日は徹夜明けだから、さっさと学校に来れたんだ。昨日から今日まで姉がいないから、ゲームし放題だったんだ」

「あ、そ。じゃあ、日野原、放課後は空いてるってことだよな」

「まあ空いてるけど。何、ゲーセンでも行くの？ 僕金無いよ」  
さて、単に魔女捜しというのでは物足りない。こいつの興味をそ  
そらせるもの……

「この辺で、黒いローブをきた、超美人がいるんだ。んで、そいつ  
を捜しに行つて、ナンパするってわけよ」

「おお……どんな人なの？」

「謎に包まれているからこそロマンを感じるんじゃないか。いいだ  
ろ、付き合えよ。今なら、可愛い子二人くらい連れてくるぜ？」

日野原はおもむろに左手を差し出し、口の隙間から見える歯がき  
らり、という効果音がならんばかりの顔で、

「その話……乗った」

「よし、いいじゃねえか」

俺はその左手を握り返した。よし、これでメンツはそろったも同  
然。皆羽は魔女探しを元からするつもりだったから、すぐに話に乗  
つてくれると思う。

俺はそう願いつつ、窓を眺めた。

昼休みのことだった。

日野原は徹夜明け宜しく就寝中、皆羽は学食（いつたいどこから  
金を仕入れているのだろう）、月城は行方不明なので、俺は外で一  
人さびしくパンを食べることにした。

ベンチに腰掛けて、校庭で元気に身体を動かす生徒を見ながら食  
っている、茂みの端から尻尾が見えた。一本じゃなくて複数でし  
かも黄色。明らかにそこに行ったら面倒なことに巻き込まれますよ  
といわんばかりだなので、

（無視しよう……）

無難な解答だ。そう思いつつ、パンを口に運ぶ

「のどが！ 喉がああああ！ 気管が死ぬ！」

その尻尾でのどを締め上げられていた。

「神を無視するとは何事じゃ！ 慇懃無礼傍若無人厚顔無恥傲慢無

礼傲岸不遜！ 成敗してくれるわ！」

「やめるこの……ぐああああああ！」

と、三途の川の向こう側に渡る一步前で尻尾が解けた。

「はっはっあ……昨日今日と二日連続で俺を殺すつもりか！ お前は！」

「いやいや気のせいじゃよ」

「なんのせいだって……？ しかもなんでお前はここにいるんだよ。家にいるんじゃないか？」

「許そうではないか……はむっ」

「お前は人を怒らせるのが得意なのか！？ 何俺の焼きそばパン丸呑みしてんだよ！」

完全に口の形が、どんぐりを頬張ったリスのようになっていた。

「ふあふあ、おひふこふでえはなひか」

「物を食べてから言葉をしゃべれクソ野郎」

それから時間をかけて、飲み込んでいると、

「けふっ……けほっ、けほっ！」

むせた。俺は天狐の背中をさする。一分もしないうちに楽になっただようので、

「ほら、言わんこつちやないだろ」

「すまんのう。しかし……ふむ……フォアグラとはまた違うおいしいさじゃのう」

「お前は本当に稲荷神に分類されるのか……？」

「考え方が柔軟ではないのう……もつと臨機応変に対応せんか。そんなことではこの……ろーぐばる社会において生きていけんぞ」

「グローバルな。やっぱ横文字はダメか？ でもフォアグラは分かるんだよな。不思議すぎるぞ、お前」

「普段人間の姿に化けるときなんて無いのじゃから、語彙力は無くても当然じゃろっ」

開き直ったようだった。

そっだ、どうせならこいつも月城の魔女捜しに付き合ってもらおう

うか。こいつも目的は一緒なんだし、人数が多いほうが楽しい。それに、こいつは面白いヤツだからな。

「なあ天狐」

「なんじゃ、わしは尻尾の世話で忙しいんじゃ」

「尻尾に世話なんて必要なのか……」

九本あるし。

「魔女捜ししないか？　うちのクラスメートが魔女の目撃情報を持つてるんだとか」

「ほう、面白そうな話じゃの」

「よし、そうと来れば話は早いな。今日の放課後だ。学校の前に立っついてくれ。みんなでいくから」

「よかろう」

どうやら魔女捜しご一行は楽しそうなメンツになるらしい。

とりあえず昼休みも終わりそうになったので、天狐とは一旦別れ、教室へ戻る。教室内の喧騒の中に入るのは俺にはできそうにない。仲間にはなれなさそうなのだ。

ただの勘違いかもしれないが、俺はそう感じてしまう。人付き合いが面倒というのもあるかもしれないけれど。

「なあ、皆羽」

「何、わたし今忙しいの。超ド級変態のあなたに付き合ってる暇は無いわ」

「超ド級変態ってなんだ！？　せめて普通の変態にしてくれ……」

「桐谷君、そんなにわたしに罵りたいのかしら？　じゃあ罵って

あげるわ。変態ゴミ虫ロリコンドM変態性欲の塊馬鹿シスコン変態」

「ときおり変態を交えるのやめてくれねえか!？」

「だって事実じゃない。わたしは事実を覆い隠すようなことはしないわ」

「ウソをついたことがないのか」

「わたしはいつだって人に優しいもの。ウソなんてつかないわ」

「すごく涼しげな顔でウソをいえるんだなお前は」

罪意識という言葉から一番縁の遠そうな女だった。というか、まったく動じてない。

「で、本題は何かしら？　ロリ谷くん」

「ロリコンじゃないと何度も言ってるだろうが……今日、月城と日野原、それから天狐と俺で魔女探しをするんだ。月城が魔女の目撃情報を持つてるらしくて。それをもとに搜索するんだと」

「へえ……で、わたしもそれに参加しろというのかしら？」

「まあ、そういうことになるな……」

彼女は少し逡巡し、

「良いわよ。手伝ってあげる。感謝なさいな」

「はいはい、ありがとうございます……」

こんな怠慢な生活にも楽しみがほんの少しだけ増えたようだ。

授業中は何も考えないで終わった。俺は教室内では影でひっそりしている地味っ子タイプなので教師から当てられることはまず無いし、日野原の隣だから、普通にしてればいい子扱いされるのだ。

「皆羽、日野原行こうぜ」

「ん、ああ。美女探しね」

魔女捜しの間違いだとは思っただが、あえてスルーすることにした。

「まあ良いわ。あまり人と群れるのは得意じゃないけどね」

「普段のお前を見ていると考えられん……」

「こんな美少女でも欠点はあるわよ」

「自分を美少女とか言ってる時点で欠点になりうるぞ」

「五月蠅いわね。ゴミに帰すわよ」

「地に帰すの間違いだ！　俺はゴミじゃない」

月城が流麗な動きでこちらへ近づいてくる。ほんとに黙ってれば美人なのになあ、と俺は心の中で嘆息する。

「それではみんな、行こうではないか。おや、皆羽君もついてくるのかい？　嬉しいな、転校生と仲を深めることが出来て」

「世辞は結構よ」

なんか、月城にガン飛ばしてるんですけどこの人。まさか、月城裏で皆羽にケンカ売ってたんじゃないだろうな……すごく目つきが怖い。

「まあ二人ともそんないがみ合わないで、やることやろうぜ。下に天狐が待つてんだ」

「わたしには関係ないことね。……魔女以外には」

皆羽はぼそりとつぶやいた。その表情はひどく悲しげでもあった。「そうだな、桐谷君。人を待たせているならば行こう」

「賢明だな」

俺はそう言い返し、生徒が少し残っている教室をあとにした。

と思つたのだが、教室から出る瞬間、日野原が俺に聞いて来る。

「なあ、美人つて誰だ……？」

「ここにいるじゃないか。美人が二人」

「ええええ……」

こんなことも推測できなかったのか、こいつは。

「まあいいじゃんかよ、楽しそうだし……下には天狐もいるんだ。

一緒に行くことになってる」

「宇宙人に噛み女かよ……さらには狐女つて……桐谷、お前将来詐

欺師になれるよ」

「とりあえずありがとうと言っておこう……」

渋々ついてくる日野原だった。

校門に出て、天狐と合流した俺たちは月城の情報をもとに、商店街を練り歩いていた。特段ケンカを起こすこともなく、魔女を捜す。特に皆羽と天狐のふたりは常に周囲を見渡していた。「魔女捜しに一生懸命になってくれる人がいるとはなあ。感激するな」

と月城が言う。

「まあな。興味があるらしいんだよ、この二人」

なるほど、といいながら月城は手を顎にあてた。

「で、その情報以外には何か無いのか？」

「残念ながら」

と、彼女は手をひらひらさせた。

その情報というのは、この商店街の人間が魔女っぽいコスプレをした人を見かけたと言っているのだ。時間帯はちょうど学校の放課後あたりの時間だという。

その姿を見た者はいたのだが、顔を見たものは誰一人としていない。話しかけられてもいないそうだ。ただ、壁にぼうつと立っているだけ、らしい。

しかし、今日に限ってその魔女さんが出てこないのだ。月城も内心イライラしているのではないだろうか、と推測する。

「そうだ、桐谷君。このあたりに新しく店ができたんだ、寄っていないか？」

もじもじとしながら月城は言う。それはこの年頃相応の反応だった。彼女はいつも意味の分からないことを言っているから、こんな反応は新鮮である。

「どんな店だ？ といつかお前もそういうのに敏感なんだな、女の子って感じがする」

「そ、そうか。ふむ。ええと、その店というのはな」

「もったいぶるなよ。なんだ、とっておきなのか」

「オカルトを取り扱っている店だ。水晶とか、オーパーツとか、隕石とか売っているんだぞ。すごいだろう、感激するだろう、震えるだろう、そそるだろう」

「……………」  
やはり月城は月城だった。そしてその店は間違いなく危ないはずだ。

「あのなあ……………そういう店をなんでチェックしてるんだ、お前は」  
「当然だろう。この宇宙には神秘が漂っているんだ。それを捜さず

にして地球人と語れるものか」

「お前は決定的に間違えてるぞ。話の内容が宇宙から地球に変わっていることに気付かないのか……？」

「うるさい。黙れ、地底人が」

「地球人じゃない!？」

衝撃だった。

そして、罵られていた。

「え、宇宙人っているものなの?」

日野原が不意に聞いて来る。

「いる。いや、いると信じている、と言ったほうが適當かな」

「でも、テレビとかでたまにやってるじゃん、宇宙人特集」

「まあ、あんなのはまがい物だ。自分の目で見たことしかわたしは信じられないんだよ」

さつきまで魔女捜しだったはずだ。なぜ、宇宙人に話題がずれているのだろうか。

皆羽はさつきから一言も話さずに周囲を探ってるし、天狐は眠そうにまぶたをこすっているし。なんだか混沌とした状況である。

「よし、もう今日は終わりに……」

と俺が言いかけたところで、商店街の喧騒が、一気に悲鳴へと変わった。

キヤーなどという、ありきたりな悲鳴を主婦達が上げている。膝が笑って立てない人間もいた。なぜなら、俺たちの後ろの女性の上半身が吹き飛び、噴水のように、血を吹き上げていたからだ。

皆羽と俺に、赤黒い血がかかる。

「わあああああああああ!？」

日野原が叫ぶ。

俺は叫ばずに いや、叫べずに、その血のシャワーを浴び続けた。血糊とはよく言ったものだ、べとべととする。鉄の味もする。凄惨としか言いよつたものだ、べとべととする。鉄の味もする。

「どついう……ことだ……? かまいたちでも言うのか……」

「いや……そのようなものではない……これは、化け物の仕業じゃ」  
「化け物だと……？」

俺が天狐に問うた。すると不意に、皆羽が、  
「化け物というのは、通常ではあり得ない現象を起こせるもの、ということだとわたしは理解しているわ。わたしにしろ、化け狐にしろ、通常では絶対にできない芸当でしょう。細かく言うと、魔法使いとか、超能力者になるわね」

このような状況になっても彼女は表情をほぼ変えずに、至って冷静であった。皆羽には感情が無いのか、と本気で思うくらいだった。  
「とにかく、ここを一旦離れよう！　こんなところにいちや危険だ！」  
「そうだな、桐谷君。賢明な判断だ」  
「う、うん」

天狐と皆羽は何も言わずに、神妙な表情でついて来るのだった。とりあえず、俺と皆羽は血をタオルで拭くのだった。

ただ、俺はその時、笑っていたような気がした。

その後、警察が来て、ブルーシートを張り、あの死体は見えなくなった。メディアの人間が群がったが、今回の事件は簡単に報道するわけにはいかないらしく、全くと言っていいほど、情報が流れていなかった。

上半身が吹き飛んだ、なんてお茶の間で報道したら、それこそメディアのほうに批判が行くだろう。

俺たちは商店街からは離れたカフェで座っていた。

「なあ、みんな……今回のことは忘れたほうがいいかもしれないぞ」  
俺がぼそりと呟く。

「忘れるわけ無いだろう！　僕、見ちゃったんだから、この目でしつかりと……」

「あまり大きな声を出すでない。他の人間に気付かれたらどうする気じゃ」

「ああ、ごめん……」

それつきり沈黙してしまった。流石にあの場面を見てハイテンションになれというのも酷な話だ。

「僕、今日は先に帰るよ……」

日野原が席を立ち上がる。

「そうか……気をつけて、帰れよ」

「うん……」

月城もそれに連なるように立ち上がり、

「わたしも今日は帰らせてもらおう。すまないな、主催したのはわたしだというのに……」

「いや、いい。今日はほんの偶然なんだ、しょうがない」

「そういつてくれるとありがたいな。では、また明日」

「ああ、じゃあな」

沈黙が降りる。

テーブルには俺たち三人が取り残された。化け物にゆかりのある三人。しかし、俺は彼女たちほど知識があるわけでもないのだ。あの現象を説明できるわけもない。

そして、その沈黙を破ったのは誰でもない、俺だった。

「なあ、そろそろ帰ろう。警察に事情徴収されたくないだろ？」

「そうじゃの、おぬしの言つとおりじゃな。面倒事はあまり得意でないのよな」

「そうか……皆羽？ どうした、何か考え事か？」

「ああ、いえなんでもないわ。考え事と言えば考え事かしら。桐谷君をどう拷問しようかなって、考えてただけよ」

「お前は何を考えてんだ！？」

非常に危険な考え事だった。制止させておいてよかった、と俺は心の底から思う。

「塩責めか水責めか、木馬責めで鞭打ちやるか……考えあぐねていたのよ」

「お前はまず、拷問等禁止条約を読め！ 国際法だぞ」

「暗記してるわよ、そんなもの」

変なところで頭が良かった。というか、マニアックなものを覚えているな、こいつ……。未恐ろしい、というのはまさに彼女のことを指していると思えない。

とりあえず俺たち三人はカフェから出て、帰路に着いた。

「近くに魔女がいるとの情報があるのじゃから、あれはおそらく魔女の仕業じゃろう」

と天狐が遠い目をしながら言う。

「ただ、どこにもそんな仕掛けは無かったんじゃ……。人を一人殺せる魔法なら必ず痕跡が残るはずなのじゃが……」

「そうなのか？ 魔法って呪文がどうのこうの、じゃないのか」

「違うな、魔法というのは正式な儀式を経てから行使するもの。大きいものなり、小さいものなりそのあとが残るはずじゃ」

天狐は、淡々と続ける。

「そもそも魔女というのは悪魔と契約したものじゃ。魔法使いとは違う。それに彼女らが行使するものは、人を害するものじゃ。昔の魔女狩りは知っておろう？」

「ああ、少しは……」

魔女狩りはヨーロッパで起こり、多くの人間 主に女性が魔女であるという疑いをかけられた。その頃、魔女というのは災厄をもたらす存在とされていたのだ。

そしてその魔女はその魔女狩りで、死んだ。その数は最大4万人と言われていたらしい。

「魔女狩りで死ななかつた魔女は主に人を惑わす魔法を使うからかう。痕跡を見えなく出来る、と考えるのが普通じゃろうが……」

「ん？ じゃあ、その惑わす魔法の痕跡は見れないのか？」

天狐は、驚いたように言う。

「察しがいいのう。うむ、そこが問題なのじゃ。幻惑に幻惑を重ねればどうなるかは分からないが、ほんの少しのほころびは見えるはずなのじゃが見えなかった、というのが問題点じゃ」

「ふうん……」

難しい話になってきたので、聞き流すことにする。

しかし、あんな、容易に人を殺すことが出来るなら、俺たちが立ち向かってでも殺されるだけだ。ああ、皆羽は違うか、不死の身体なのだから。

家に着く。入った瞬間に、夕飯を買い忘れたことに気が付いたので、買ってくる俺が言うつと、

「わたしは何でも良いわ。適当に買ってきてちょうだい。今日はごめんなさいね、作れなくて」

「いやいいぜ、皆羽。家事全部押し付けちゃ悪いからな。天狐は何がいい？」

「一番高いものを頼む」

「よし、一番小さい弁当を買ってきてやる」

俺の言ったことに腹を立てたのか、ぴーぴーうるさい天狐を背に俺は自宅を出た。夕日はもうほとんど沈みかけている。東の空からは満月が出掛かっていた。

まさか、今度は狼男でも出るのではないか、と俺は少し疑っている。

コンビニに入って、適当な弁当を三つ買い、また家へと戻る。

「やあ、薬の効果は試したの？」

と後ろから声をかけられた。一度は聞いた事のある声。俺が振り返ると、そこには、黒い三角帽子を被り、黒いローブを身に着けた人間がいた。

今度も、帽子を深く被っていて、顔が見えない。ただ、目の前の魔女からは気持ち悪さを感じさせるほどに、濁った雰囲気が発せられていた。

「……魔女か」

「前言わなかったかしら？ 見た目だけで魔女呼ばわりするのは良くないって」

「ああ言ったな。でも事実、お前は魔女だろ」

「全くレディに対する扱いがなっていないのね。まあいいわ、あの

二人から大体の話を聞いているんでしよう?」

「ああ。だから、来てもらうぞ、一緒に」

俺はこいつを好きになれなさそうだった。なんとなく、関わりにくい感触だ。

「んー、この私を連れて行く、ね。その服の内ポケットの薬に頼んだほうが早いんじゃないかしら。大事に持っていてくれるのね、それ」

「ッ……」

魔女は透視能力でも持っているのか。

「ま、私だつてのこのこついて行くつもりはないわ。だつて、いやだもの」

「……力づくで!」

頭の中のスイッチが切り替わる。天狐と戦ったときのような気分。俺は魔女の懐に入るべく、コンビニのビニール袋を放り投げ、全力で走る。

しかし、今回は戦う理由が違う。皆羽と天狐のために戦う。ただそれだけなのだ。

「人を軽く殺せる私に立ち向かうとはいい度胸じゃない! 好きになつちやいそうだわ」

「てえい!」

魔女の懐に入り、その顎に向かってアッパーを放つ。俺は確かに顎を捉えた。完璧に、体重を移動させ、放った。

しかし、俺の拳は魔女の顎をすり抜けた。

「言つたでしょう。わたしは魔女だと」

「後ろッ!??」

今まで目の前にいた魔女が塵気楼のように、消えた。

「遅いよ、桐谷君」

そう魔女が言った瞬間、俺の腹に冷たい感触が走った。そして、熱くなつていき、激痛に変わる。そしてそれに伴う違和感。平べったいものが俺の内臓をえぐる。

ナイフと腹の間から血がどろどろと出る。

「はっ……」

「自分の愚かしさを呪いなさいな。魔女に挑もうなんて、十年早いわ」

ナイフが引き抜かれ、地面の落ちた。腹から一気に血があふれ出る。激痛すぎて、痛覚が麻痺しそうだった。

「ふひひひ……あははふふっひは！」

「どうしたの……？ 致命傷のはずなんだけど」  
自分が自分で無いような感覚に陥る。

ただわかるのは、まだ終わってはいないという事だけだ。ナイフを拾い、おぼつかない足取りで魔女のほうへと向かう。

笑っていた。

「なんだ……いったい、なんなんだ！」

「はっ！」

ナイフを振るう。魔女はそれを避けた。避けたという事は今度はすり抜けないという事に等しい。

もう一振るいする。はずだったのだが、糸が切れたように俺の身体から力が抜け、くるくると回りながら地面に倒れこんだ。地面のせいか、身体が冷たかった。

「火事場の馬鹿力もそこまでのようね。さっさと殺してあげるわ。

あなたは、一般人なのに、秘密を知ってしまったている」

「はっはあっ……」

「さようなら」

死にたくない……。

俺のその最後の呟きが言葉になったかどうかも分からずに、俺の意識は途切れた。

## A m y s t e r y 　その謎は深い

三途の川っていうのは本当にあるらしい。今、俺の眼前には、人生の中で見た川で一番綺麗な川が流れている。その向こうには、豊かな草原が広がっていた。

「よし、行くか」

どうせ夢か、本当に死んでいるのだろう、と思いつつ、俺は川に足をかけた瞬間、腹に衝撃が走った。

「げふっ!？」

「おお、戻ってきたか」

耳元で天狐の声がした。

「ん……どういうことだ。んで、ここどこだ。俺、ナイフで刺されて死んだんじゃ……」

「何を言ってるのかしら。あなたの寝ていた横にはナイフはあったけど、刺されてはいなかったわよ。道端で寝るなんて、ホームレスにでもなりたかったの?」

「おい……どういうことだ……」

俺は焦って腹を探る。

無かった。ナイフで刺されたはずの傷が。

あんなにも、死ぬくらい痛かったのにもかかわらず、傷一つ、痕跡一つ残っていない。まるで時間を戻したかのように綺麗になっている。

「おい、皆羽……俺をどうやって見つけて、どうやって運んだんだ……?」

「あなたがあまりにもものろいから、このあたりを捜していたのよ。そしたら、地面でひからびているあなたを見つけね。弁当はないし、ナイフは転がってるから一回家に持ち帰ったのよ」

「俺を物呼ばわりするな……。どうやってここまで? お前の力じや流石に……」

「引きずって来たに決まってるじゃないの、首根っこ掴んで来たのよ」

「窒息死させるつもりか！ そうだ、その俺の倒れてた地面に……血はついてなかったのか？」

「ええ、一滴もついてなかったわよ……桐谷君、何があったの？」  
「実は……」

俺はさっきまでの出来事を全て話した。魔女に出会ったこと、殺されたこと、なぜか生きていたこと。

彼女はその後、考えこむような仕草をし、

「……まずいわね、それ。何かされてるわよ、魔女に」

「何かってなんだ？ 別に変わったところなんてないし、不死身になっただけでもないし」

「あなたに分からなくてわたしに分かるはずがないじゃない。少しは常識で考えなさい。この無能。見ていて滑稽だわ」

「すみません……」

「いいじやろ、別に気にすることでもない。魔女が現れた、それだけでも大いに収穫なのじゃから、許してやれ」

「そうね、化け狐。夕食を何も買ってきていないこと意外はお咎め無しね」

「あ……」

そういや、魔女と戦うときに弁当を放り投げた記憶が断片的に残っている……。現在時刻は午後十一時。よい子はもう寝る時間である。

と思っていると、本当に天狐は寝ていた。九本の尻尾を器用に使用って、布団と枕を造り上げていた。

「寝たな……」

「ええ、寝たわね。ということとで桐谷君、ご飯買ってきて」

「話題に共通項が全く持って見られないが……まあいい。買ってきてやるよ」

まあ、別に何も話すことは無い。この時間に弁当を売っていると

いう幻想を抱いてしまったが、その幻想はあっさり殺されてしまい、弁当が一つしか買えなかったという結果に至る。俺はおにぎり二つが夕食ならぬ夜食になった。

流石に秋の夜は冷えるから、温かいお茶が体と心に染み渡る。

「ふいー……あつたまるな」

「おいしいわね、この緑茶。新茶でもないのに」

「趣味も無い俺の唯一の楽しみだからな。お茶とか飲み物はちょっと贅沢してんの」

「そう」

と皆羽は興味なさげに答えつつも、お茶をすする。

そして夜は更けてゆく。不吉な夜は、今日で終わりと願いたい。

最後に魔女から聞いた言葉。魔女は案外そばにいる。これはどういうことだろうか。

俺の身の回りに魔女がいるという事だろうか。しかし、安易に相手の言葉を真に受けるものではない。

そう、俺はどうすれば良いのか分からないのだ。そんなことを考えつつ、布団に入った。

朝、いつものように起きて、歯を磨いて、着替えて　　というところで気づいたことがあった。魔女から貰った小瓶。興味本位でいつも持ち歩いていたのだが、その中身がないのだ。

ない、というよりか減っていた。十粒くらいあったカプセルが三つしかなくなっているのだ。

いつ使ったのだろうか。俺はこれを自室以外で出していないし、ましてやこれを飲んだこともない。そんな疑問を頭の中に抱えつつ俺は秋の朝に身を投じた。

今日は不思議な、奇怪なことが起こらぬよう願った。制服の第二ボタンが取れていたので、つけ直した。不吉なものの予兆でなければいいが。

学校に着くと、日野原がいなかった。また寝坊だろうか。あいている机を横目で見つっつ俺は月城のもとへと歩いた。彼女は何をすることもなく、ただ天井をぼうつと見上げている。

「おーい、月城」

「ん？ ああ、桐谷君か」

「どうした、なんだかやけに呆けているみたいだったんだけどさ」

「まあわたしにも色々考え事があるのだよ。世界をどうやって征服するだとか、超能力の研究だとか」

「そうかい……」

その考え事というのは通常では考え事とは言わず、妄想というだろう。

「まあいいや。で、昨日あのあとどうなったか分かるか？」

彼女は顎に手をあてながら話し始める。

「まあ少しだけだが。メディアは未だ入れていない。報道も禁止。

近くに不審者を見かけたとの情報だ。その人物は女で、メガネをかけていたという。魔女のような格好をしていたそうだし」

「へえ。よくそこまで規制されてんのに情報を集めたな」

「まあね。褒めるがよい」

「すごいすごい」

棒読みだった。

しかし、一晩でそこまで調べ上げるとは大したものだ。調べて、とか頼んでないわけだし。将来報道関係の仕事につけるんじゃないか、と俺は思った。

それとなぜか後ろから殺意を感じる。俺がそう感じて振り返るとそこには鬼のような形相の皆羽がいた。俺が月城と話しているのがそんなに気に食わないのだろうか。

「サンキューな、月城」

「ああ」

俺は彼女の机を離れ、自分の机に戻る。もうそろそろ授業の時間だし、何よりも後ろの人に殺されそうだからである。

陽気な声を出し、

「なあ皆羽、なんかあったのかい？」

「別に特段何もないわ。目の前にゴミがあること以外普通よ」

「あ、そうですか……」

さらに俺を見る目が汚物を捨てるときのような目だったので、これ以上話すのは逆に彼女を逆なですると判断し、前を向いた。

俺は制服の内ポケットから小瓶を出した。やはり、その中身が減っている。朝でボケてるのかな、と幻想を抱いたが、それは幻想ではなかったらしい。皆羽や天狐は俺の部屋には入ってこないはずだから、彼女らが発見するわけもない。

だとしたら、考えられるのはあの時だけだ。魔女に殺された時。

あいつは薬の効果が出るかを知りたがっていた。そして、俺は死にたくないと思った。条件は揃っている。

あとは俺の口に無理やりにもカプセルを詰め込ませれば、実験は完了というわけだ。しかし、昨日の夜、天狐と皆羽が俺に何か特殊なものをかけられている、とは言っていないかった。

一体どうということなのだろうか……。

「おい、桐谷。桐谷！ 桐谷良平！」

「……………」

「無視か。無視するとはいい度胸だな、あとで職員室できっちり指導だ！」

しかし、魔女はどうして薬一つに固執し、さらにその被験者が俺なのだろうか。運が悪いだけって言うのも説明がつかない。

「……………」

まあいい。そんなことはあとで考えればいいだろう。

「間島先生、呼びましたか？」

「よし今すぐ職員室に來い」

「なんで!?!」

その後間島の苦しい指導が始まった。

職員室から開放されたのは昼休みになってからだ。精神的に疲弊してしまい、教室に行くこともなくいつものように校庭のベンチに座った。

「まったく、何が何なのやら……」

「そう。あなたは今、あなた自身が分かっているもの。当然よ」  
いつのまにか、俺の横に、魔女が座っていた。確かに、魔女は案外俺の近くににいるのかもしれない。

「お前……」

「まあ二日連続は忙しいわ。家でゆっくり寝ていたいもの」

「二ト思考だ。」

「あなたが生きていられるのはわたしの力の恩恵があつてこそなのよ。ああ、大丈夫よ、わたしの姿はあなた以外には認識できないようにしてあるから」

「俺が一人でしゃべってる風に見えるのかよ……。で、やっぱり俺を生き返したのはお前か」

「ええ。あなたが死にたくない、なんて言うから。あのまま何も言わなければよかったのに。そしたらあつさり死ねたのよ」

「まだまだやりたいことがあるんだ。そう簡単には死にたくない」

「童貞だものね」

「だまれ」

魔女は白い足をぶらつかせながら言う。

「まあ、それなりに代償は貰うけどね。今日はその受け取りよ」

「代償……?」

「何よ、七つの球集めただけで願いが叶うやつと同じだと思つたの? 勘違いもはなはだしい。あの子だってそうでしょ。不死になるという事は生きる苦しみ……つまり、永遠に人の死を診なければいけないという事。それが、代償よ」

「不死になつた、代償?」

「そうよ。あの子もまた然り」

あの子……誰の事だ……？ 天狐か。

「だから、代償は払ってもらわよ。払わないのなら、この世から退場ね」

「……………」  
その目深に被った顔が俺を見つめていると分かる。怪しく、そして、恐ろしい。本能的な部分が警鐘を鳴らしている。

代償。代価。報い。犠牲。罪滅ぼし。

しかし、何を支払うのかが問題だ。命、とかだったら詐欺だ。

皆羽と天狐は携帯を持ってないから連絡がつかない。魔女に襲い掛かっても昨日のようにあしらわれて、デッドエンドを迎えるのが関の山である。

「で、俺は何を払うんだ」

「そうね……………」

魔女は鼻息がかかる距離までぐっと近づいた。そして優艶に笑い、

「あなたの」

そう、言いかけたところで、

「そこまでじゃ」

「っ!？」

天狐が出てきた。俺の制服のボタンに化けていたらしい。朝取れていた、第二ボタンだ。

魔女が一気に距離をとる。

「久しぶりね、狐」

「ああ、久しいのう、魔女。百年ぶりのかろう」

「数えるのなんて面倒だから数えてないわ。まああなたがそういうのだから、そうでしょうけど。それにしてもよくわたしが見えるわね」

「お前は化け物の類だからの。見えるわ」

二人の目線（魔女はどこ見ているのかは分からないがおそらく天狐を見ているだろう）が交差する。それは、本当に殺したい相手を見る目だった。

恨みや妬みなどでは表すことの出来ないほどの負の感情だ。

「与太話はこれくらいにしておこうかの。魔女よ、返すものがあるだろう？」

「そんなものはないわよ。わたしこう見えて貧乏なのよ？ 貧乏人を物剥ぎするとは神様も墜ちたものね」

「黙れ！ 墮としたのは……墮としたのはお主だろう！」

彼女が激昂する。神の怒り然とした姿。

天狐は神に通ずる神獣だ。どこかに必ず居場所 つまり、稲荷神社があるはずだ。そこから魔女に墮とされた、ということだろうか。

「いやねえ。願いを叶えてあげた代償じゃない」

「あんなものは勝手に契約を結ばれたに等しいじゃろうが！」

「神社の神様はワガママで困るわね。いっその手で葬りましょうか、神様殺しの魔女に二つ名を変わっちゃうけどね」

「……もう一度言う」

彼女の小さい後ろ姿だけで分かる。天狐はここで、殺し合いをやるつもりだ。

素人の俺でも分かるような怒り。神の怒りとても表現できる。

「あれを返せ」

「断るわ」

「ならば……！」

その刹那、天狐の姿の手には日本刀が握られていた。そのまま、一瞬で魔女の懐に入り込み、斬りかかる。しかし、魔女は俺に見せたときのように消えて、天狐の頭上に現れた。

(おいおい……一般生徒が……って、なんだよ、これ……)

俺たちのいた、学校敷地内から全て人が消えていた。俺と、天狐と魔女以外この空間に人が存在していなかった。俺たちがいた空間そのものなのだが、どこか違う。どこか歪で、どこか壊れた空間だ。まるで作り物のような場所だ。

「ここはわたしの作った空間だから好きに暴れてもらっても構わな

いわよ、狐」

魔女は空間さえ作り出す。正体がさえ分からぬその魔女は、本当に、作り話にでも出てくるような技量を持っているらしい。

「せいっ！」

頭上から降ってくる魔女を彼女は横一閃した。だが魔女はそれをその黒いローブで受け止めた。普通の布きれではない。

何か特殊なものだ。まずもって、この世に存在する繊維ではないだろう。

「狐、お前はもういらぬわ！ 消えてしまいなさい」

「神を消そうなどと、実に愚かしいわ！」

日本刀を捨て、次は大蛇へと身を変える天狐。変化はなんでもできるのか。

その大蛇が魔女を丸呑みにせんと口を開ける。魔女は俺がまばたきをしていた間、その一瞬にほつきを出し、それにまたがって、大蛇を蹴った。

大蛇はよろけるも再び、魔女に襲い掛かる。

「はっ！」

魔女が手を前に出した瞬間、大蛇が何か見えないものに弾かれた。大蛇の姿からもとの少女の姿へと戻る。

「良平、ここは一旦退こう。今のわしでは到底無理じゃ」

「お、おう」

「よし、こつちじゃ」

俺は彼女に言われるがままだった。当然といえば当然だ。人間の領域を超えた戦いを見て、首を突っ込もうな度という人間はいない。小さな、俺の身長の三分の二くらいしかない少女のあとに続いて走る。俺は無力だった。

そして、振り返ると魔女がほつきにまたがりながら、俺たちをながめていた。その姿を見て疑問に思う。魔女は一体、何の代償を払わせようとしたのか。

走っているといつの間にか、いつもの俺の学校にいた。

「なあ天狐……」

「すまぬ。しばらく一人にしてくれんかの。家に戻る」

「そ、そうか……分かった」

その校門を目指す彼女の後ろ姿がいつもより、数段小さく見えたのは気のせいではないだろう。そして、その姿を見送ると同時に、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。

結局、疲労困憊満身創痍のまま、昼休みが終わってしまった。まだ、あのとときの事象に頭が追いつけていない。

「とりあえず、家に帰ったらあいつから話を聞こう……」

俺はそう決意し、席に座った。隣の日野原は今日は休みらしい。

馬鹿は風邪を引かないというのはウソだったのだろうか。

そして、もう一人、魔女に関わったことのある人物に話しかける。

「皆羽ちよつと良いか？」

「何かしら」

「魔女に……お前は、魔女にどうやって会ったんだ？」

「どうやって会ったか、ね。正確に言くと、あつちが会いに来たのよ。昔の話だけど」

「へえ……で、どうなったんだ？」

「……いいわ。話してあげる。ちよつとこっちに来なさい」

「うおっ……」

首根っこをつかまれて教室の外へ引きずり出される。まあ、授業なんてもともと受けてないに等しいから別にいいが……。

それにしても苦しかった。

そんなこんなで、彼女に体育館の裏側に連れて行かれた。

「この辺でいいわね」

「なんでこんなところまで連れてきたんだよ。別に教室の中で話したって良いじゃねえか」

「わたし、大勢の人がいる中でしゃべるのは苦手なのよ。大勢の人

に向かつてしゃべると同じ原理よ」

よく分からない……。

「お前にも可愛いところはあるんだな」

「可愛いところしかないわ」

「………………。で、本題に入るぞ」

「さっきの話の続きね。わたし、森の中で遊んでたのよ。昔はもつとどこの土地にも緑があったから」

彼女は体育館の壁に背中をもたれかからせながら言う。

「それでその森で、放火だったのかはどうかは分からないけど、火災が起きた。冬で空気が乾いていたから森の火事だったからすぐに火は回った。けっこう森の奥にまで行ってしまっていたから、出口に出れなかった」

「………………。そうか」

「それで、もうダメだと思ったときに魔女が来て、今の身体になったの」

「…………。その時に『命』を取られたのか」

「ええ。魔女に死にたくないって言ったら本当に死なない身体……死ねない身体にしてくれたわよ」

「………………。お前は」

俺は魔女から言われたことをそのまま皆羽に言う。

「お前は、生きていて苦しいか？」

「…………。」

皆羽の表情に影が落ちた。

魔女が言っていた、皆羽の不死の身体になった代償。生きる苦しみを永遠に与えられること。それは俺にはわからない。

なら、彼女に聞けばいいのだ。不器用なりに、彼女を助けてあげられたらな、という願いだ。

「話したところであなたには、分からないでしょう？」

「…………。そうだな、分からないと思う。でもな、一人でそんなことを抱えていてもただ苦しいだけだろ」

「……なら、あなたはわたしについてきてくれる？ 腐ることなく、朽ち果てることもなく、死ぬこともなく、生き続けてわたしについてくれる？」

「……………」  
答えられなかった。

それは、おそらく彼女の今一番叶えたい願い。人間誰しも、一人では生きていけないのだ。支えて支えられながら、生きるのが人間だ。

「ごめんなさいね。少し感情的になりすぎたわ。あなたにこんな話をしてもしょうがないものね」

「……俺のほうこそ悪かった。ちよつとその辺歩いてくる」  
永遠に生きるということ。

それは孤独を意味するものとも言える。好きな人が出来たとしても、その人は必ず死ぬ。彼女は生き残る。際限なく、永遠という時の中を生きなければならぬ。

それはもはや拷問に近い。いつ精神がおかしくなっただってしょうがない。だから、あの電車にわざと轢かれたのだ。

死にたいから。

「なんだよそれ……なんなんだよ……」

自分の腹の底から怒りが湧いてくる。自分に対する情けなさ、この代償を払わせた魔女に対する怒り。

俺は無力だ。

そう自己嫌悪に陥っていると、ポケットの携帯がバイブ音を鳴らした。メールのようだ。差出人は、日野原だ。内容は、『僕んちまで来てくんない？ 話したいことがあるんだけど』とのこと。

放課後だったら行けるか、と思い、『じゃあ行、放課後にナイフ持って行くわ』と返信。おそらく風邪ではないはずだ。なにせあいつは学年に名を轟かせる馬鹿だからな。

後ろの席の彼女とは気まずい雰囲気を迎えた放課後。 日野原の家

に向かう。皆羽にはこのことを既に言っているから問題ない。

「どうやら彼は俺とほぼ同じく、一人暮らしらしい。なんでも親が仕事で家を長く開けるからだそうだ。そんな日野原の家は一軒家だ。何回か行ったことがあるから、場所は分かる。」

「家の前に着き、インターホンを押す。」

『はいー、どちらさまー？』

「引越しです」

『あ、はい』

え、このインターホンのカメラ壊れてんのか。そして扉が開いて、私服姿の日野原が現れる。

「つてあれ？ 引越しじゃないの？」

「てめえは引越すんのかよ……。まあいい。上げる。もてなせ」

「横暴ですね！」

「当たり前だろ。お前のものは俺のものだ」

「家もなの！？ なんとというジャイアリズム！」

とりあえず日野原の家に上がる。家の中はこいつが一人暮らししているとは思えないほど綺麗だったので、驚愕した。開いた口が中々ふさがらなかった。

「ただまあリビング周辺は少し汚かったが。」

「で、わざわざ俺を呼びつけた理由はなんだ？ 今日にはサボりもやっただじゃねえか」

「まあ……。昨日の事を考えててね」

「ん？」

「少しだけ、彼の表情が曇る。何か、昔を思い出しているような、そんな、雰囲気。」

「彼は間を開けて口を開いた。」

「……僕は、ああいう事件を一度見ているんだ」

「あ？ どういうことだよ」

「僕に超能力があるのは知ってるだろ。それはその……。ローブみたいなのを着た人に会ってからできたものなんだ」

「おい……お前……」

日野原は今まで見せた事のないような神妙な面持ちで言った。

「うん……僕は魔女に会ったことがあるよ」

どうやら、俺には厄介ごとが憑きまとうらしい。

昼間には魔女に会って、化け物同士の戦いを見るし、そして今は近くに魔女に接触したやつがいる。異常だ。これが、皆羽の言っていた、彼女でない化け物の類が近寄ってくる、ということか。

魔女は、俺に限らず、人のすぐ側にいる。

「で、どんな状況で会ったんだ？　魔女に」

「んー、えつと……確か僕が中三のころだったっけ。その頃ちょっといじめられててさ、悔しかったんだ。自分が情けなくてずいぶんとひどい話だ。」

「ちょうどその頃、学校でやれば願いが叶うっていうおまじないが流行ってた。僕もそれをやったんだ。いじめたやつらを見返したい。何らかの力が欲しいって思ってたんだ」

「それで魔女が……？」

「正確に言っと、その後しばらくしてからだね。怪しい格好してたから不審者だと思ってた。ふざけて言ったんだよ」

「何を聞かれたんだ」

「何か欲しいものはあるって聞かれたから、超能力が欲しいって答えて　それから、こうなったんだ」

「そうか……」

しかし、彼は代償をとられたようなことは言っていない。今の口ぶりからしてそうと分かる。必ずと言っていいほど、魔女は代償を求める。天狐にも、皆羽にも俺にも求めてきた。

どういうことなのだろうか。

「なあ日野原……お前は何か取られたりしたか？　その後何か変わったことがあったとか」

「いや別に。何もとられてないよ。ただ……」

彼の表情が恐れを見るものになる。

「超能力を手に入れた後、その変質者が消えた後、周りにいた人たち……全員、昨日みたいに死んだんだよ。僕を除いて」

「な……………」

超能力の代償。その代償は一生抱えていく恐怖だった。何十人も人間の身体が一気に引きちぎれ、自分だけが生き残り、その惨状をまざまざと見せ付けられる。

皆羽と同じ種類の代償。一生の恐怖を抱える。

だから日野原は怯えていたのか。

「…………その、悪かったな、思い出させて」

「別にいいよ。いつものことだから……………」

「…………俺帰るわ。明日は学校来いよ」

「ああ、できたら行くよ」

俺はそう言い残し、日野原の家を出た。夕日がもう沈みかけている。

今の俺の気持ちとしては魔女を殺したい。天狐はどうかは知らないが、彼女が激昂するという事は相当なことなのだろう。そして、皆羽や日野原は魔女に不幸にされた人物だ。彼らだって、普通の生活を送りたかったはずだ。

それなのに、あいつはそれを壊した。

腹立たしかった。心底。殺したいくらい。惨殺したいくらい。手足をばらばらにしたいくらい。願いを叶えられるなら、魔女を殺して欲しいと願おう。

俺は内ポケットから、小瓶を出した。願いが叶うカプセル。

それは本当だ。俺がこうして生きて立っていられるのもこのカプセルの恩恵があつてこそなのだ。しかし、これで魔女は殺せるのか。殺せないかもしれない。その疑念が頭をよぎったとき、俺の怒りで沸騰していた頭が一気に冷却される。そして、俺はその小瓶を再び内ポケットにしまった。

じきに魔女は現れるはずだ。俺に代償を払わせるために。

「…………ちっ」

気持ちをとりあえず落ち着ける。

そろそろ家に帰らないと、天狐や皆羽が俺を待っているはずだ。そう考えていると、皆羽が目の前にいた。横断歩道で、歩行者信号のほうは青。

彼女に声をかけようとしたとき、トラックが来た。当然赤信号なのだが、減速する兆候が見えない。瞬時に思い浮かぶ惨状。

彼女はそのトラックに気が付いていた。

しかし、避けようとはしなかった。

(あいつ……！)

俺はとっさに駆け出して、彼女の身体を掴み、自分の身体ごと横に飛んだ。

「桐谷君!?!」

「なんでだよ……」

俺は彼女の上になったまま言う。激昂するように、そしてせがむように。

「なんでお前は命を粗末にするんだよ！ お前、あのトラックが減速しないの分かってたろ!?!」

「……………」

彼女は答えず、閉口する。

先ほどからずっと魔女に人生を壊された人の話を聞いていたから、魔女の被害にあった人を 哀れんでいたのだ。

「電撃事故の時だってそうだ！ お前は、お前を大事に思う人間がいることを分かってねえんだ！ 死なない身体だからって…………」

「……………」

「自分を粗末にするな!」

自分の今の激情に流されて言葉をしゃべったから自分でも何言ってるかよくわからない。ただ、言いたいことは全部言えた気がする。

彼女は俺の今のまくし立てっぷりに驚愕したのか、目を見開いている。

「……ふふっ、あははっ、あははははは！ あなた良いわ！」  
さもおかしそうに笑う。

「わたし、あなたのことが好きになったみたい」  
「は？」

衝撃的な告白だった。

「でもその前に降りてくれる？ このままだとあなたがわたしを押し倒しているみたいに第三者からは見えるわよ」

「わっ……！？」

俺は今までにならないような速さで飛びのいた。

「ええと……皆羽？」

「ん？ どうしたの、桐谷君。わたしの顔に何かついてるかしら？」

「いやついてない、けど……」

「そう。じゃあ帰りましょう」

「おう……」

俺はそう言っただけで彼女の後に続く。なんとなく話しかけづらい。

一つ。落ち着いて考えることがある。皆羽に何か言った。そして、彼女は笑った。そして告白された。……どう見たっておかしい。おかしいにもほどがある。

しかし、その告白した当人である皆羽の足取りは黙考する俺とは裏腹に、足取りが軽く見える。

「桐谷君」

「……な、なんだよ」

「わたしは、あなたのことが好き。それは本当よ。それで、あなたの返答は？ わたしだって女の子ですもの、好きな人がわたしをどう思っているか聞きたいわ」

俺は彼女のことは変わったやっただと思っていたが 嫌いではなかった。

ただ、曖昧な答えを出すのも失礼だ。だから、

「俺は、お前のことをもっと知りたい。ただ、まだその資格が俺にはない。だから、その資格ができれば……」

「男の子ってたまに分らないわ……うん、でも桐谷君がそういうのなら」

「ありがとう」

ただそれだけだ。簡単なこと。人の心の中に立ち入るには相応の資格がいるのだ。それを安易にすると、彼女を傷つけてしまいかねない。

俺は皆羽の横について歩いた。彼女の表情は、歳相応の少女の笑顔だった。

A m y s t e r y 〽その謎は深い〽 (後書き)

遅くなつてしまいました……。

**T h e k e y w o r d 〱 謎のありか〱 (前書き)**

すいません、試験やらなんやらで更新が遅くなりました……。。

## The key word 〈謎のありか〉

むずがゆすぎる思いで家に到着した。

家に入るとリビングで天狐がちよこんと、ぼうつとした様子で座っていた。覇気がなく、まるで魂が抜けたような、もぬけの殻のようだった。

「おい、天狐。おい、しつかりしろよ」

すると彼女は気を取り戻したように反応し、

「あ……ああ。おぬしか、すまぬのう。少し考え事をしていたのじや」

取り繕ったような、口調だった。

「そうか……ならいいが」

少し不安が募った。

「なあ、天狐。俺は、魔女の正体を探りたいんだ」

俺は先ほどの皆羽からの思いを伝えられて決意した。彼女を生き続ける苦しみから解放してみせると。それが、今俺にできる一番の事だ。何しろ、屋上で言われたことが願いを叶えて欲しい、ということだったのもある。

その為にはまず、魔女　その化け物の正体を知らなければならぬ。なんたつて、俺は普通の人間であると同時に、化け物退治屋の見習いでもあるのだから。

天狐は不思議そうな表情をし、

「お前はなぜそんなに厄介ごとに首を突っ込みたがるのじゃ？ 今日見て分かっておろう、あれは人間で処理できる範囲を超えていると」

「そうだ。でも、案外魔女は近くににいるみたいなんだ。だったら、不意をついちまえばいい」

「どうということなのじゃ？」

「魔女自身が、言っていたんだ。わたしはすぐ近くにいて。そ

れはおそらく本当だと思う」

「……なぜそう言い切れるの？」

皆羽が訝しげな表情で言った。

「勘だよ。ただの、勘」

すると、言った皆羽は見るからに呆れた表情をし、その場に座ってしまった。

「どうしてこんな人を好きになったのかしら……」

「お前は恥ずかしいことを言うな……」

彼女の顔から目を逸らした。さすがにやはり、面と向かって好きとか言われると恥ずかしいのだ。女性経験ゼロの俺にとってはだが、まあそんな俺たちのやりとりを聞きもしなかったような様子で、

天狐が、

「魔法の正体は分からぬ。全くもって正体不明じゃ。現代では……

ええと、ウマというのかの？」

「それ、UMAだ」

「無礼者！ 馬鹿にしおつたな！」

「いやしてねえし」

片腕をそんなにぶんぶんされてもそんな背が小さくちゃ、俺の頭には届かないと思う。

「まあ正体が分からぬのじゃ。わしとて、努力をしていないわけではない。しかし、なぜか正体がつかめんのじゃ……」

さすがは真正正銘の化け物と言った所か。皆羽も世界を旅しても見つからなかったとか言ってるわけだし。

皆羽、天狐、日野原、あと月城あたりにも声をかけて、魔法に関する情報を集めてもらうとしよう。まだ、この内ポケットに入っている小瓶を使うのはまだ早いのだ。

「そついや、もうこんな時間か。皆羽、今日も飯は作らなくていいよ、あんま遅くなると天狐がまた寝るし」

「そつね。じゃあ買って来ようかしら」

「俺が行く。危ないだろ、こんな時間に出ちゃ。いくら田舎とはい

え……」

皆羽はぐつと顔を近づけてくる。彼女のきれいに整えられた髪の毛からはとても良い匂いがして、俺の鼻をくすぐった。

心臓が走った後のように激しく脈打つ。

「あなた……優しかったのね」

「うん……まあその……普通だとは思っ……」

「ふうん……じゃあ買って来なさい。わたしのために」

「いきなり態度が傲慢になっただな」

「わしはそうじゃのう……稲荷寿司を」

「お前、昨日までの高飛車な要求はどこへ言ったんだ」

「いや、あれは胃に来ることを思い出したのじゃ……」

胃が弱かったようだ。

俺は秋の帳が下りた空の下に出る。昨日の夜はここで殺されかけたんだ。魔女に。もしかして、殺しに来たのは代償を奪うためだったのか。

薬を使わない俺に苛立ちを感じ、魔女自らが俺を殺すことにより、実験結果を得る、といった算段だろう。

「ちっ……」

コンビニに入って稲荷寿司と、同じ弁当を二つ買った。少し、嬉しい反面、恥ずかしかった。

おそろいだから。

復路を進む。魔女は出てこなかった。一日一回とか言う限度があるのだろうか。

「ただいまー」

「ふう……」

そこでちょうど、バスタオル姿の皆羽に会ってしまった。以前は確か、まったく動揺することがなかったはずなのだが、

「あまり、こっちを見ないでくれるかしら……？ わたしの身体はあまり見る価値はないから……」

「わ、悪い！ 俺、先にリビングに行くてるな！」

そう言って、ダッシュでリビングに駆け込むのだった。

明らかに、最初の頃と反応が違う。ついさっきのことだったので、脳裏に彼女の姿がフラッシュバックされるところで、天狐に話しかけられた。

「のう、良平」

「ん？ なんだ、天狐」

「あの娘とおぬしは夫婦になるつもりか？」

「め、めお、夫婦って！ なるわけないだろ！ 話が飛びすぎだっ」

「ほほう……ずいぶん顔が赤いのう……」

こいつ、俺の反応を楽しんでやがる。九本ある尻尾が楽しそうに揺れている。この小さな少女が今はものすごく憎たらしく見える。

耳もぴくぴくしている。少し気になったので、触ってみると、

「きやうっ！ な、何をするか、無礼者！」

「……面白いな、耳が弱点か……」

「や、やめい……！ うっ、だ、だから、きゅっ、やめると言ってる……」

小さな少女から生えている耳をいじって楽しんでいる男の姿がそこにはあった。まぎれもなく、俺だが。

「桐谷君……」

後ろから鋭く、冷たい声。

「か、皆羽……」

「やっぱり、あなたって……その……特殊な性癖を持っているのね」  
汚物を見るかのような目。ジト目。はつきり言って、辛い。

「お前は遠まわしな言い方をやめてくれ！ ストレートに言われるより傷つくんだけど！」

「ひどいわ……わたしというものがありませんが、まだ己が欲求を抑えられないというのね……」

「どんな欲求だよ！？」

「言っただけじゃないわ」

「言ってくれよ！」

そんなこんなで、夕食が始まる。

皆羽はいつも通りであったが、天狐はどこか違った。何かを思案しているような、己の中に何か複雑なものを溜め込んでいるかのような……言葉では上手く言い表せないようなぎこちなさがあった。

しかし、そんな彼女とは裏腹に日常生活は滞りなく進んだ。雑誌とか読んでいたらいつの間にかもう寝る時間だ。水でも飲んで寝るか。

そう思ったとき、玄関の扉が開く音がした。気になったので、俺も外へ出る。

外に出ていたのは天狐だった。ある程度星が見える夜空を見上げている。今宵は満月でもない。中途半端な月だ。その空を見上げる天狐の姿はとても儂げで、美しさをも感じさせた。

「天狐、こんなところで何をやってるんだ？」

「む……考え事じゃよ。いや、回想かのう。昔のことを思い出していたのじゃ」

「昔の事？」

「知りたいか？」

「……お前が話してもいいのなら、知りたい。無理やり話させるのは失礼だろ」

「ほほう。最近の若造よりも礼儀はできているようじゃな、気に入ったぞ。わしはな、神社にいたんじゃ、昔は」

「稻荷神社みたいなのところか？」

「うむ。千年生きたのでのう、神社に祀られることになって……まあかく言うわしは何もしなかったがな。まあ怠惰な時を送っているときにあることが起きてな」

彼女は淡々としゃべる。さっきまでのぎこちなさがウソのようだ。しかし、まだどこか、その姿は儂げで。

「子供が参拝に来て……確か兄弟だったの。仲睦まじく遊んでおったわ。それが、うらやましくて……その輪に入りたかったのじゃ。

まだ野狐だったころから、そう思っておったわい」

「へえ……」

「神社を降りて、人間に化けてその輪に混ざろうかと思ったわい。しかし神社を降りると、そこは聖域ではなくなる。そうすれば、民が怖がるじゃろう」

「お前も案外人思いなんだな」

「まあ。そんなときに、参拝客が現れて……西洋風の姿をしおつた変人じゃった。そやつは鐘だけ鳴らして、こついいおつた。降りたくないですか、と」

それが、魔女だ。まるで悪徳商売だ。うまい条件だけを前に出し、後に同等の代償をとる。外道だ。

許せなかった。そうやって神様まで絶望に陥れたって言うのか。俺は、無意識のうちに拳を握り締めていた。

「それでのう、わしはついそれに頷いてしもうた。確かに、降りることはできた。しかし、戻ることが出来なかった」

「神社に？」

「そこは家のようなものだから。家の鍵を取られたとって良いな。わしの代償は、そんなものじゃ。あの娘に比べればはるかに良かるつ」

「……………」

「そして神社の信仰が薄れ、そこは取り壊されてしまった、とこんなところかの」

「……………」

俺は電柱に拳を打ちつけた。そうしないとやっていられない。この煮えくり返るような怒りはちょっとやそつとじゃ、収まらない。いつもの明るい表情とはかけ離れた、今の彼女の悲哀を含んだ表情は見ていてとても心が痛んだから。

俺は、皆羽もろともこいつを救う。魔女を一刻も早く捜し出して、彼女らに人間としてのあるべき普通を取り戻してもらおう。

俺のほんの少しの良心だ。

「天狐。神社は直らないかもしれないけど、俺はお前をいるべきと

ころへ戻してやりたいんだ。だから……だから、俺に力を貸してくれ」

「……………」  
彼女はその二つの大きな瞳で俺を覗き込むようにして見る。まるで、心の中まで覗かれているような錯覚にとらわれる。神通力でも使われているかのよう。そして、天狐は、

「おぬしは厄介事に首を突っ込みすぎなんじゃ。しかし、その心意気に入った。改めて、力を貸すぞ、良平」  
太陽のような眩しい笑顔で彼女は言った。

「ああ。こつちも改めてよろしくな」  
今宵の月は満月でないにしろ、俺の目にはとても綺麗に映っていた。

彼女は、家へと戻ろうとして、立ち止まった。すると、俺のほうを振り返って、

「そうじゃ、もしこの一件が片付いたらわしができうる範囲のことだが、願いを叶えてやろう」

「お、良いじゃんか」

「まずはおぬしの特殊な性癖を治すでしょうかの」

「お前は大きな誤解をしているからな……？ まあ、考えとくよ」

「そうか」

彼女はそう言った後、大きなあくびを一つもらしてその場に倒れ込んだ。

「お、おい！」

慌てて駆けつけると、

「……………すう」

寝ているだけだった。可愛らしげなその寝顔が俺の不安を消し去る。そういえば、神社の神様は寝るのが早かったな。

俺は彼女のとてつもなく軽い身体をお姫様だっこなる態勢で持ち上げて家の中に戻った。

「うお……………!？」

しかし、それがいけなかった。お姫様だっこをした瞬間、緩んでいたのか、和服の帯が解けてしまい、その帯を持ってしまい、さらにはそれを急いでとった反動で服がはだけてしまった。

そしてそんな態勢のまま玄関に突撃。そこには何が起こったのか分からず、きよとんとした皆羽の姿がそこにはあった。

「……言い訳をさせてください」

「却下するわ」

「……そうですか」

「前言ったことあるわよね？ 世界には変な人などたくさんいると」

「……はい」

「あなたはわたしの見てきた中で最も変人……いえ、変態ロリコン暴漢野郎だわ」

「……誤解だ、なんて言っても無駄ですよねそうですね。こんな場面を複数回見られれば誰だって変態扱いするものな。」

「ということで桐谷君。あなたは今日からわたしの召使いだわ」

「なんでそうなるんだよ！？ お前なんでもできるだろ！」

生活していくうえでも話だが。

「そんなもの……身体を動かすのが面倒だからに決まっているじゃない」

「お前はゆとり世代の子どもか！」

「なら奴隷で」

「恋人を奴隷呼びわりするとは容赦ないなお前」

「容赦がないわけじゃないわ。加減がないのよ」

「言葉の暴力だな」

「言葉の警察は存在しないのだから、それは存在しえないわ」

口論で勝てる気がしなかった。毒舌という名の凶器をふりかざす彼女にとっては俺をあしらうなど朝飯前といったところだろう。

こんな不毛な会話を続けたところで俺の変態が変態であるという皆羽の認識に変わりはないので、会話を切り上げる。

「とりあえずこいつを布団に運ぶ。軽いとはいえさすがに腕が疲れ

てきたから」

彼女はそう、と簡単に言っただけでリビングへ戻っていった。俺は天狐と皆羽の部屋へ向かう。

中に入ると、女性特有の匂いでも言うのだからカーソンそんな感じの甘い匂いが俺の鼻孔をくすぐった。部屋には化粧品などは一切ないから、少し味気ない部屋になっていた。

年頃の女の子は化粧品やら何やらで部屋がいっぱいになるといふ話はどうやら彼女たちには適用されないらしい。

俺は天狐を布団にゆつくり下ろし、毛布をかけて寝かした。さすがに、はだけた和服を直そうとは思わなかった。そろそろ夜も深くなってくる頃合いだ。そろそろ俺も眠りにつくときでしょう。

リビングに緑茶を飲みにいっただけで先に皆羽が緑茶を飲んでいて、彼女はいつもの表情で、

「あなたも飲む？」

「ああ、頼むよ」

急須から温かい緑茶が注がれる。俺の数少ない楽しみの一つだ。そして、俺はそれをゆつくりと飲み始める。ほんのりとした甘みと苦味が口の中に広がる。

「やっぱりいいな……。そういや、最近日課のトレーニングやってないな」

「いつものやつ？ 卑猥な意味かしら？」

「お前は女の子なんだからそういう言動に注意しような」

彼女の表情が一瞬引き締まったように見えた。皆羽はゆつくりとその口を開く。

「そういえば聞いてなかったわね」

「な、なにをだよ」

「あなた、女性経験ある？」

「う……………」

なんだ、なんだ……。俺は彼女を傷つけてしまうような不用意な発言を無意識のうちにしてしまったのか。少し、不安になる。そん

な不安をピークに迎えたとき、彼女が口を開いた。

「な、ないけど……」

「そう。ならわたしを口説くのだけが上手いだけか」

「ど、どういうことだよ……」

「わたしを、女の子として扱ってくれたのは、あなただけよ。最初から今まででもずっとそうして扱ってきてくれる。わたしをわたしとして見てくれる」

俺を真っ直ぐに見据えるその目は、まるでガラスのように綺麗だった。その瞳に映るものは俺だけ。俺の瞳に映るのは彼女だけなのだ。

「……それは、当然だろ。そんな、見た目も心もお前は女の子だ。たった一人のクズのせいでお前は……」

「そう、それは事実。でも、そんな風に扱う人間はいないの。だからわたしは、あなたのことを変わってる人だ、と言ったのよ」

「そういう意味だったか……」  
「あなたにとつての当然はわたしの幸せなのよ。だから惚れてしまったのかも」

少女の悲しみはあまりにも大きかった。

ただ、死にたくないという死に際の一言だけで大きく運命をゆがめられてしまった。人としては、当然の事だろう。俺もそう思ったのだから。何度目の魔女と自分に対する怒りだろうか。

精神崩壊とかでも起こしそうなくらいだ。

「桐谷君」

「な、なんだよ……」

「あなた、経験ないからかしら？ こんな状況下で何もしないとこのもちよつと男らしさにかけるわ」

こんな状況。

親は不在、帰ってくる心配なし。同居人は完全に寝入った。二人だけの空間。夜。絵に描いたような、ラブコメのシチュエーションだ。

「じゃあ……その……えつと……」

「そんなおどおどしなくていいわよ。わたしは何をされてもいいわ」  
「その……手を……握りたい……」

この状況は誰がどう見たって俺がヘタレである。奥手とかいうのではなく、ヘタレだ……。しかし、皆羽はそんなことは気にしないようだった。

「良いわよ。さあ、どうぞ」

差し出された、彼女の肌と同じ色をした手。俺はそれをおどおどとした手つきで握った。

人間の肌の、柔らかな感触。その手は少しだけ冷たく、俺より数段小さかった。このまま永遠に時が続けばいいのにとも思う。

「桐谷君の手は温かいのね……布団に、入ってるときのような、暖かさが……」

うつらうつらになる皆羽。

「うおっ……!?!」

そしてそのまま、彼女は俺のほうに倒れこむようにまぶたを閉じてしまった。どうやら、彼女は疲れていたらしく、彼女は俺の腕の中で眠ってしまった。規則正しい寝息がやけに部屋に響く。

俺はほんの少しだけ、その状態を続けて、彼女を布団まで運ぶのだった。

自分で仕掛けた目覚まし時計に苛立ちを感じつつ起きる。今日は学校の授業が午前中で終わるから、けっこう嬉しい。言ってしまうば、午前で終わろうと午後で終わろうと俺には全く関係ない話なのだ。

寝起きの身体を引っ張り出してリビングに行くと、皆羽がいた。すでにもう身支度は整えているようで、テレビを見ている。

彼女を見たと同時に脳裏に昨日の場面がよぎり少し恥ずかしく

なつた。

「おはよう、皆羽」

「桐谷君、おはよう……ねえ、あなたどうしてわたしから目を逸らすのかしら。わたしは鏡じゃないのよ。自分の醜い顔を見ているわけでもあるまいし」

「俺は鏡見ても目逸らさねえ！」

「ああ、鏡からは逸らさずとも現実から逸らすと」

「現実逃避はしてねえ！　そういや、天狐は？　遅いじゃんか  
てつきり皆羽と一緒に起きているものかと勘違いしてしまっていた。皆羽が俺の問いに答える。」

「ああ、化け狐ならまだ寝てるわ。昨日夜更かしてしまつたから長めに寝なきゃいけないのかしらね」

あいつは赤ん坊か。まあそのうち起きて、また学校に潜入してくるだろう。しかも今日は午前中で終わるから昼飯を食べるころくらいには帰って来られる。

「まあ大丈夫だろ。そろそろ行こうぜ。遅刻ばかりは勘弁だからな」

「ええ。それはわたしも同じよ」  
今日は曇りのようだ。雨とか災厄が降ってこないように今日も祈る。

これといって何もすることなく登校。皆羽と楽しくしゃべりながらとか手を繋いで登校、などという幻想を少しでも抱いた俺が間違いだつたらしい。

いつものように席に座り、月城にさつそく魔女に関する知識を知らない訪ねた。すると、

「桐谷君もついにオカルトに関して興味をもってくれたようだ……同志よ、共に魔術に励もうではないか」

「するかそんなもの！　お前が前同じことを聞いたとき一番情報もつてたからさ、それでアテにしてただけだ」

「なるほど。賢明な判断だ」

「手伝つてくれるか？　今回は、その重要で……。頼むよ」  
彼女は笑顔で切り返す。

「いいよ、面白そうだ。しかも友人の願いだ、断る理由などない」  
「すまないな……。お前には助けてもらってばっかだよ」  
「そうだな、じゃあこうしよう」

彼女は人差し指を立てて、妖艶な笑みを浮かべる。その顔はまるで、悪戯を考えた子どものように無邪気であった。

なんとなくいやな予感。

「わたしが前言った新しい店行ってもらおう。一緒に、だ。あああと、二人きりで」

「……………え」

あのオーパーツが云々とか言う店か。そんな所に行ったら、俺の社会的地位が……。ってもう下がることはないから、失うものはないのか。

まあそんなことで済むのだったら、行っても良いか……。皆羽には気付かれないようにしよう。二人きりという語感が誤解を招く可能性もあるし。

「……………分かった。で、いつ行けばいいんだ？」

「今日」

「はやっ！　まあいいか……………」

「やった！」

月城にしては珍しくはしゃいでいる。そんなに嬉しかったのだからか。不思議だ。まあ興味のあることをやれるんだったら誰でも喜ぶだろう。

とにもかくにもそんな不思議な店に行くことが決定するのだった。

いつものように、俺が気付くと放課後になっていた。感覚で言うと三十分経っていないか経ってるかどうかくらいだ。あ、でも昼飯はちゃんと食ったぜ？

日野原のほうはいつものごとく、二時間目から来て、その後の授

業は寝ていた。教師はもう諦めたらしく注意さえしなかった。ただ、それとは裏腹に俺は少しだけ安心していた。学校に来るだけの活力があれば十分だと。

そんな日野原（まだ就寝中だ）を横目で見つつ、皆羽の目をかいくぐりつつ、月城と合流した。

「遅かったじゃないか、レディを待たせるとは紳士たるものではないな」

「しょうがないだろ……二人きりで、なんていう条件をクリアするのは色々苦労するんだよ」

「ふむ……まあ詮索はしないでおこう。ではさっさと行くでしょう。場所は商店街のほうだ」

「今行つて大丈夫なのか……？ その……」

脳裏に蘇る、凄惨な映像。あの商店街での惨状は俺の脳裏に焼きついたまま離れない。そのとき自分が笑っていたことも含めて、だ。

今はあの通りは警察が調べていて、通行に規制がかかっているはずだ。

「いや、大丈夫だ。あの場所は商店街よりも少しだけ離れているから規制の対象にはなっていないんだよ。しかもあんな小さい店だ、見つかることもない」

「そうなのか。それならいいな、行くか」

「うん」

そう言つて、彼女の後に俺は続く。

歩いている途中、頭の中でその店を想像する。水晶があつたり、ガイコツがおいてあつたり、はてには怪しげな魔導書なんかがあつたりするところだろうか……。店の中は薄く、不気味な色でライトアップされていたりとか……。

（はあ……）

そういう浅はかな自分の想像力に落胆しつつも、ブルーシートが今でもかけられている商店街を横目に通り過ぎた。

「桐谷君、あれは偶然……悪魔の気まぐれな悪戯だったんだ。早く忘れたほうがいい」

「そうだと信じたいし、忘れたいのには山々なんだけどな。そう簡単にはいかないんだよ……」

「時間をかけてのほうがいい、中途半端に忘れて将来思い出してしまつては困る」

俺は呆然として彼女の顔を見つめる。

「月城……お前意外と普通なことを言うんだな」

「な、なんだい。わたしを信用してなかったとでも言うのかい？」

「信用していたはいたけどさ、その言動がイマイチだったからさ……」

……

「それはデフォルトだ」

「さいですか……」

少しでも彼女の顔を見直してしまつたが、どうやら的外れな拡大解釈に過ぎなかつたらしい。「さあ、ここだよ」

月城がそう言つて指を指した建物は普通の、ちよつと年期があるログハウスの。俺の想像していたものの外観とはかけ離れていた。

「こんなとこに店建てたのか……」

俺がそう言つた理由はこの人通りが究極的に少ないからだ。確かに商店街の方向ではある。しかしこのあたりは言つてしまえば、

『旧』がつくような場所。俺もあまり通つたことがない。

「穴場と言つて欲しいな。ここを探すのに苦労したんだ」

「へえ……じゃあ、どうやってここを知つたんだ？」

「予知夢」

「無理がある……で、実際は？」

「この前散歩してたら迷子になつたんだ」

「ええええ……」

苦労といえは苦労だが……自業自得じゃないか……。期待するんじゃないかつた。

「わたしにも失敗はある」

「失敗しかないだろ」

「君は不用意な発言が多いぞ……まあいい。とりあえず入ろうではないか」

半ば強引に引き込まれつつも、そのログハウスの中に入る。内装は洒落た風な作りだ。木のいいにおいもする。誰もここがオカルト関連の品を取り扱っている店とは思えない。

奥に進むと何やらカフェのカウンターのようなところがあり、椅子が一つ置いてあった。

「誰もいないのかよ」

「店の奥にいるのだろう……すみません、誰かいないか」

文法的に若干間違っているがそこはスルーだ。しかし、月城が声を上げて物音一つとしてしない。まるで幽霊屋敷にでもいるかのような気分。

「と、とりあえずこの店主が帰って来るまでここを探検しようじゃないか？　な、なあ？」

「おどおどしないでいいから……まあ良いぜ、付き合うつて言ったのは俺だからな」

「じゃあ俺店見てくるから、誰か見かけたら声かけてくれ」  
分かった、という彼女の了解の声を背に俺は歩き出した。

店、と言っても商品らしきものが見当たらないのだ。このログハウスは二階建てらしく、ちよつと歩いたところに階段を見つけた。ちよつとした興味でそこを登る。そこは普段使われていないのか、床はホコリで埋め尽くされ、あぐく蜘蛛の巣まで張られているほど汚かった。光源は二階に一つだけついている窓だ。太陽はこんなにも明るいのかと再認識させられる。

歩くと、ギイ、と木が軋む音が聞こえた。二つ聞こえた。俺が立てたものではない音。

本能が恐怖を感じた。いつものスリルとは違う恐怖。いくら太陽が明るいとはいえ、部屋全体を照らすわけではないのだから、部屋の隅には薄い暗がりがある。そして不幸にも音源はそこだった。

(ゆ、幽霊……？ いや、出ないはずだ……出てても対処くらいならできるから大丈夫だ……)

化け物退治屋なのにこの程度にビビるとは滑稽だ、と自分を叱咤し、前進すると、

「なんだ、若い力。期待外れも甚だしいネ」

「なんだこいつ……」

黒いローブがしゃべって動いていた。嘘ではない。何度まばたきをしたって俺の目の前にいるのは……いや、あるのは黒いローブだった。

ソレは紐に引っ張られているかのようにふわふわと浮遊している。  
「なるほどマジックか」

「違うヨ！ ボクはれっきとした……なんだろう力……？」

「俺に聞かれても……」

「どうやらマジックではないらしかった。

「で、何者なんだ、お前は」

「この小さな店の店主だヨ。そのくらい分かるだろウ、人間」

幽霊屋敷……いや化け物屋敷と言った方が適当か。ともかくに

も俺はそんなとんでもないとこに飛び入ってしまったらしい。

「お前、まずなんでそんな格好なんだ？ 身体はどうした身体は」

「レディにそんなことを聞くんなんて無作法な人間だナ、お前ハ」

「そんな姿で性別も糞もあるか」

「確かに糞はしないナ。性的な意味で」

「意味わかんねえよ！」

「ではこれからは語尾に、性的な意味で、とつけることにしよう」

「人の話を聞けつたら！」

「こんな店は疲れるンダ、性的な意味で」

「どんな店だ……とにかくそれは止める」

「つまらない人間だナ。で、その人間がこのボクに何の用があつてここに来たンダ？ 迷子というわけでもないだろウ？」

表情は見えないが、つまらなさそうな声でローブが言った。顔が

あつたなら、唇を尖らせているに違いない。

「で、本当にお前は何者なんだ？ 化け物？ 幽霊？ 地縛霊？」

「そうだな、強いて言うなら朽ち果てたものの残滓とでも形容すベ  
きかな」

「それはいったいどういう……」

「君の守りたい人と同種つてことだヨ。ボクももとは不老不死だっ  
タ」

なぜ、こいつは俺のことを、そして皆羽のことを知っているのだ  
ろうか。

俺の守りたい人。皆羽詩音という不老不死の呪いにかげられた少  
女だ。そして、こいつは不老不死の残滓。少しは関係性があると見  
える。

「じゃあ、昔は人間だったってことか？」

「そういうことだネ。ちなみにボク男」

「お前……さつき自分でレディとか言ってたろ……」

「なんのことだかさっぱりだネ」

心の中で思う。不老不死のやつの中にはろくなやつはいないって  
ことだ。皆羽にしるこいつにしる性格が悪すぎる……。それはもう  
びつくりするくらいに。

「まあ人間だったときの記憶なんてないヨ。今はここでこうして日  
々を無為に過ごすほうが良いのサ」

「じゃあ、教えてほしいあことがある」

「答えられることなら教えてあげよう」

俺は一息おいて次の言葉を言い放つ。

「どうやったら、不死の呪いを解くことができるんだ？ お前も  
大方魔女やら何やらに不死にさせられたんだろ」

ローブが重い沈黙を降ろす。何をも言わせないような、そんな沈

黙。

「……まあ、そんなところサ。ただ呪いを解く方法はわからないヨ。  
ボクは解呪に失敗してこんな姿になってしまったのだし」

ローブの口調が真面目なものへと変化する。彼自身この話をするのはあまり好みではないのだろう。彼はそのローブをひらひらとさせながら続ける。

「解説に失敗したとはいえ、方法は見えてきているんだ。ただ今のボクではもうできないことだ。だから、それを君に託そう」

「そんな簡単にいいのかよ……？」

俺は驚き半分、疑心半分で言った。それも仕方ないことだ。ここ最近では代償だのなんだので、疑心暗鬼になりつつあるのだ。

無償で事を成し得られるなんて考えられまい。それに、おそらくだが、彼が俺に託そうとしているものは天狐でも辿り着くことができなかつた領域を記した物。言わば彼の血の結晶他ならない。

「良いんだ……それにそろそろこの姿を維持できなくなってきたから」

「……じゃあそれをありがたく貰おう」

彼は生きた証、存在した証を残そうとしているのではないかと思いい、俺はそう言った。でなければ、初対面の俺にここまで話してくれたのに申し訳が立たないからだ。

彼はどこからか百科事典ほどの厚さの書物を取り出して、俺の前に置いた。

(どうやって持ち上げたんだ……！？)

俺のそんな疑問をかき消すようにローブが言う。

「これが全てだよ。ボクの全て。もってきなよ」

「ああ、ありがとう……すまないな、こんなことまで」

「なんてことないよ。ああ、そうだ。ボクの横に置いてある腕輪もあげるよ。下にいる女の子にプレゼントしてあげるといい」

確かに彼の足元あたりに紫色の腕輪が置いてあった。

「じゃあ、これでお別れだ。さらばだ、桐谷良平」

彼の声はもう消えつつあった。もしこいつが生きていたなら良い友人となれただろう。だから、俺はそれを見ないようにして、

「ああ」

と、簡単に答えて俺は階段を下りた。不老不死の残滓の消失を背にしつつ。

一階に下りると月城がどこから出したのかわからない木の椅子に座りながら待ちぼうけていた。表情から見るに不機嫌であることが分かる。

「遅かったじゃないか」

「悪い、ちよつと話してた。そんでこれ、お土産」

「誰と話をしていたんだい？」

と、口調はしぶしぶといったところだが、ロープからもらった腕輪を受け取った瞬間、表情はぱつと明るくなった。現金な奴である。まあ喜んでもらえて何よりだ。彼女はそれを即座につける。

「この店の店主みたいなやつ。なかなか不思議な奴だったよ。この本もそいつからの土産だ」

と少し興味を持たせるような口調で言う。すると月城は、

「本当かい！　どんな奴だった！　幽霊の類か、地縛霊かはたまにUMAか！？」

「まずは落ち着け……。おまえは何でこの店の店主がお化けの類だつて断定できるんだ？　まさか知り合い？」

「あ、いや、そのそついうわけじゃなくて……」

なぜか彼女はそこでたじろいだ。わけもなくたじろいだのだ。しかし、そんなことを吹き飛ばすかのような彼女にしては珍しい元気さで、

「ここに来てテンションが上がっているからだな！　まあ状況処理能力が落ちるのも仕方ないことだ」

「ふーん……じゃ、用は済んだし帰ろうぜ」

「うむ」

俺たちはそうして、そのログハウスを出た。

俺はのちにこんなことを知るはめになる。やはり俺の身には最近、厄介事が多いと改めて実感した。俺は正確にその土地の場所を覚えてはいるが、だいたいの位置なら土地勘で分かる。後日、その周辺の場所に来てそのログハウスはなかったのだ。

そのログハウスから家に帰った。月城とは普通に、また学校で、と言って別れた。腕輪は帰るときもつけていたから、気に入ったのだろう。

そして、今。俺は、

「すみませんでした皆羽さん本当にゴメンなさい許してくださいこれ以上俺を糾弾しないでください」

「わたし、あなたを糾弾した覚えなんてないわ」

「そうだな……糾弾はしてないかもしれない……けどな、お茶の間でこの状況ってなんだよ!？」

俺の土下座している頭に足を置く皆羽詩音という構図が見事に出上がっていたのである。異様だ。ちっちゃい神様もいるこのこれは教育上目に悪い。その神様はお昼寝中のようだ。

こんな状況になった理由はただ一つ。皆羽に何も告げずに長時間外出したためである。帰ってきた瞬間、皆羽様がお怒りになり、謝ることになり、現在に至る。

「もう二度とこんなことはしませんお願いします許してください」

「許す? わたしは最初から業腹などしてないわ。だってわたしはあなたのことが好きなのだから」

「言ってることとやってることが矛盾してる!？」

「これは愛情の確認よ」

「んなわけねえだろ!」

こんな悲惨な愛情は欲しくないと心の奥底から叫びたかった。しかし頭を踏まれているので顔も上げることすらできないので、そんなことはできない。

「というか今回はとてもお怒りのご様子である。」

「全く、あなたという人は踏まれないと分からないようね」

「踏まれて分かるような性癖は持ってないが」

「そうだったかしら。まあいいわ。この際言ってしまうけど、わたし、あなたのことを心配していたのよ」

「……………」

それってただのツンデレじゃないか。意外と……いや、滅茶苦茶可愛い。やはり、俺は彼女のことを嫌いになれない。

「魔女に襲われて死ぬんじゃないかと」

「……悪かったよ」

「本当にそう思ってる？ ウソじゃない？ 本当？」

「ああ、本当だ」

彼女は数瞬ためらったような間を置いて、俺の頭から足を離し身体を寄せてきた。驚嘆に値するほどの、甘い香り。

「いなくならないで」

「……できるだけそうする」

「そう」

その温かみの中で俺は、こういう時間が消えてしまうのではないかと、思っていたのだ。

魔女の言っていることは正しい。何かの代償なしに事は成し得ないのだ。人間が活動するには栄養を取らなければいけないし、鉄を作るには二酸化炭素を排出しなければならない。

また、彼女を助けることも然りだ。皆羽詩音という一人の少女の呪いを解く為には、必ず対価がいるのだ。それに目の前で寝ている天狐を救うためにも、だ。

魔女という化け物を探し出して、解呪の方法を聞きださなければならぬ。たとえば、それで化け物と戦うことにもなるうともだ。それに、それが本業でもあるし。だから、俺は最初から腹は括っているつもりだ。

「ねえ、桐谷君」

彼女は身体を離し、

「わたしに欲情した？」

「え、ええと、その、えつと……し、してないぜ!？」

「それは残念だわ。せつかくわざと胸が当たるような抱き方をしたのに……」

「わざとかよ!？ 夢を壊さないでくれ!」

「欲情してくれないのは本当に残念」

「お前はなんだ、その……変態なのか?」

「あなたとは種類が違う変態よ」

彼女の認識だと、変態にも種類があるらしい。俺は種類が複数あるとは到底思っていない。それが常識だと思う。

彼女はそんな考えを巡らせる俺を無視し、

「さあ、夕食にしましょう。今日は時間があるからわたしが作るわ。簡単だけど鮭のムニエルでいいかしら?」

「何でもいい。お前のカレーはうまかったから腕に心配はないし」

「そう、期待に沿えるようがんばるわ」

こう、あれだよな。こつも表情に変化が乏しいと彼女が俺のことを好きであるという事がイマイチ実感できないときがある。

頬を赤らめてほしいものだ。切実に。

表情に変化が乏しいのも、やはり長い間生きていて、精神が疲弊しているからだろうか。

「良平、煩惱は垂れ流すものではないぞ」

「はっ!?!」

「今、おぬしの鼻の下が思いつきり伸びとったからのう。すぐにわかるわい」

「あらら……ばれちまったか……こ、このことは内密に……」

「さて、どうするかのう?」

小さいくせに悪魔のような頭脳だ。ま、そりゃそうか。神様なんだし。そんな煩惱垂れ流しの妄想をしていると、台所からリズムが軽快な音が聞こえてくる。

うん、家に人がいるのというのはいいものだ。孤独もいいかなという考え方が吹き飛んでしまう。

「じゃ、ちよつと部屋戻ってるわ。飯が出来たら呼んでくれ」  
「うむ」

天狐にそういい残し、俺はリビングを出て自室に移動した。理由は簡単だ。

あの黒ローブから受け取ったものを見るため。皆羽や天狐にはあとでこのことを話すつもりだ。なんとなく、見せてはいけない気がしたから、一人で読むことにしたのだ。

分厚いページを開き、中身を見る。古典のような漢字とか、ラテン文字とか、ギリシャ文字とかで書かれているかと思ったら、日本語の綺麗な書体で書かれていた。

ただ、それは目次だけ。その他のページには何も書いていない。そう思った瞬間、本に文字が浮かび上がった。

『あなたは歪んでいる』

「ッ!？」

これは確か黒ローブが、書いた本のはずだ。だというのに、なんだこれは。

『人は対価を払う』

文字は一行ずつ、丁寧に浮かび上がってゆく。

『それは分かっているだろう。しかし、魔女はどうだろうか』

まるで、黒ローブが話しているようだ。俺はその本に引き込まれていく。

『魔女はただただ奪うだけで、何も対価を払っていない』

『悪魔と契約することはとても大きな代償を払ったことになる』

魔女に関しては伝承通りのようだ。

『しかし、それでは足りない。魔女はどこかで、対価を払っているはずだ』

(……言われればそうだな。呪いだって、ちゃんとした手順を踏まなきゃいけないのに、魔女はそれを一瞬でやっているんだもん……  
…確かにおかしい)

『それを捜せ。それが解呪の方法だ』

要するに、その矛盾点を探せという事か。それができれば、皆羽や天狐、日野原が救えるというのなら、俺は地の果てまであるごとそれを捜す。

化け物の弱点なんて、俺のロマンだ。

『最初のページに書いたことは、おそらくあなたの弱みだ。健闘を祈る』

そう文字が浮き出て、そして、消えた。

何か、分からない点があった。そう、最初と最後にあつた通告のような文章。特に最後なんか、文章が繋がってすらいない。暗号とも思えないそれは俺に不信感を抱かせる。

俺の中の歪み。それは、自分でも分かっている。あまりにもスリルを追求し続けると、それが快樂になつてしまい、瞬間だが、自制が利かなくなつてしまう。これは、商店街の事件のときに確信したので。今まではずっと目を逸らしていた。

しかし、こんなことを考えて一体何になる？

俺の目的は皆羽と、魔女に人生を壊された俺の友達を助けることだ。自分は二の次三の次のはず。それなのに、自分のことを考えるだなんて、おかしい。

(くそっ……なんなんだよ……)

あの黒ローブは俺に一体何を伝えようとしているんだ……。

「おい、良平」

「みぎやあつ!?! な、なんだ!?! 天狐さんじゃないでふか!?!」  
慌てて本を閉じ、目の前にあつた本棚へとそれをぶち込んだ。逆にこれをしないほうが良かったかもしれない……不審者すぎるぞ、これは。

天狐は目を細め、にやりと笑いながら言った。

「思春期の男子の嗜みというやつかのう? そうじゃな、お兄ちゃんと言ってくれる女の子のいかがわしい……」

「それ以上言うな! 俺の心の傷を大きくしないでくれ!」

「じゃあ違うのか?」

「ああ……そうだよ」

どうやら目の前にいる少女は俺が自分の部屋でR - 18指定になるような本を読んでいたらと勘違いしているらしい。

まあ都合がいいのだが、これ以上こいつを調子に乗らせると大変なことになるという予感が俺の脳から発せられた。

「年上系、とかいうやつかの？ それともメガネをかけたやつか？」

「お前は どうして そういう知識が豊富にあるんだよ！？ U M A も知らないやつが どうして そっち方面のこと知ってたんだ！？」

「いや、よく神社にそういうモノが置かれたりしていな」

神社は聖域だから、そういうモノをポイ捨てしてはいけませんよ、青少年の諸君。

「お前は先刻といい、今といい、隙ができすぎておるのう」

「接しやすい男子と言って欲しい」

「寝言は死んでから言え」

「永遠の眠りには就きたくない」

「そんなことより夕食の支度が出来た、と娘が言っておったぞ」

「そっか、サンキュ」

どうやらこれが本題らしい。これ以上彼女を待たせるのも悪いので、俺は部屋を出て、リビングに向かった。

俺は席に座り、とても口当たりの良い鮭のムニエルなるものを食べていた。やはり、皆羽の料理の腕は折り紙つきである。

「美味しいかしら？」

「うん、すげえ美味いぜ。将来はいい嫁さんになるんじゃないかと思っくらしい」

「そっ……」

と、腕を取って、ご飯を食べた。照れ隠しじゃない、か……こいつが照れ隠しをした覚えなんてないし。そんなこと思いながらそんなことを考えつつ、夕食を平らげた。

その後、部屋に戻って寝そべっていると、突然、視界が、真っ暗に、なつて、何も、見えなく、なつ、た。

身体が動かない。金縛りにあつたような感覚。そして視界ですら奪われている。真っ暗で、何も見えない。嗅覚は働いてるか分からず、聴覚は何も聞こえないから、こちらも働いてるか分からない。

どこか別の場所にも放りこまれたのではないか、と唯一働いている思考がそう考えた。

『へえ、あなたは歪んでいるのね』

そう、誰かが言った。脳に直接響く、甘美な囁き。

『ああ、そう……わたし美人と思われたのね』

人の思考まで勝手にのぞかれたらしい。非常に不快だ。俺はこの声が、甘美なものであつたとしても好きにはなれない。

『まあそれはそれでいいけど。それで今やつてることを教えてあげるわ。まず、あなたの意識を外部から切断し、切断した意識にダイレクトに話しかけてるのよ』

まったく意味が分からないが、適当に受け流してオーケーだろう。『困るわね、わたしとりあえずあなたの因縁の相手といったところなんだけど』

魔女。俺の殺したい相手。

『まあそんなところよ。で、わざわざこんなことをしたのは、あなたから代償を貰うためよ』

代償なんて払うつもりは毛頭ない。

『困るわねえ、じゃあ何か代わりを用意してもらおうかしら』  
代わりつてなんだよ。俺の家なんて何も無いぞ。

『あなたバカね。頭が回らないも良いとこだわ。どうしてそう、代償はモノで取るって言う固定的な概念で考えるのかしら』

モノ以外に何を取るっていうんだ？ 俺の『命』をとるか。それとも、記憶をごっそり抜き取るのか。

『それもいいけどねえ……散々困らせてくれちゃったから、ちょっときつめでいきましよう……。あなたにとって、ね』  
そして、魔女は言う。悪魔の声だ。

『あなたのお友達とサヨウナラ、するなんてどうかしら？ ステキでしょう？』

ふっと、思い浮かべたのが月城と、精神的に不安定な日野原だった。その存在がごっそりと無くなる。死ぬ、ということはそういうことだ。

やめろ

『あなたが払わないのがいけないのよ。しかるべき報いなの』  
ふざけるな、それはお前が勝手に押し付けたんだろう！

『じゃあ今、ここで死ぬ？ まあいけないモノを見てしまっているから、排除するのが一番なのだけだ』

いったいなんなんだよ、お前は。外から見て、人をもてあそんで、一体何がしたい？ 何が目的なんだ？ お前のせいでいったいどれだけの人間が悲しんだと思っっているんだ。

『偽善の押し付けは嫌われるわよ。あなたは、ヒーローじゃないのだから。ましてや、一人前の化物退治屋でもない』

そう、こいつの言うとおり、俺はヒーローなどにはなれない。

特殊な能力を持つているわけでもなければ、正義の味方にもどうしてもなりたくないわけでもない。人をすすんで助けるわけでもないし、己を貫く信念なども持っていない。

だから、この窮地を乗り切れない。

だから、彼女を救うことが出来ない。

一方を救うためにはもう一方を切り捨てなければならぬ。それが出来ない。要するに俺は、甘いのだ。

『じゃあ、あなたが死ぬ？ そうすれば、借金ゼロにしてあげるわ』  
まあ俺が死んだとしても、悲しみヤツなんていない。俺は人と接

していなかった。葬式は来るだろうが、皆心の中は空っぽだろう。だから、死んでもいい、と思った。

だが、残されたあいつらは？ 天狐と皆羽は、魔法のありかを知ることにも出来ずに、また、悠久の時を過ごすというのか。

させるわけにはいかなかった。

『そう、ならいいわ。これはわたしに対する挑戦と受け取って構わないのね』

どうだっていい。

『じゃあ、桐谷君、さようなら』

そして、その声は残響しつつ、消えていった。

「っ……っ！」

気付けば、同じところに横たわっていた。傍から見ればただ寝ていただけ、という認識が正しいのだろう。しかしその中で見た夢はあまりにもリアルで、夢などではなかった。

現実。あれは全て現実なのだ。

「畜生……」

起き上がり、机の引き出しを見る。そこには、魔法から貰った小瓶が入っている。これを使えばなんだってできる。大金も入れば、死人だって蘇る。

しかし、魔法を殺したら解呪ができなくなるかもしれないのだ。

それだけは、避けなければいけない。

「桐谷君？ 顔真つ青ね。死んだの？」

「ゾンビじゃねえよ、俺は……あ、でも一度死んだか」

「おかしいわね。最初からだけど」

「うるさいっての」

というかいつの間にも部屋に入ってきたんだ、という疑問はもう既に浮かばなくなりつつあった。それは良いことなのだろう、とは思う。しかし、あまりに情が深すぎるとそれを失ったとき、俺は一体

どうなるのか。

想像がつかなかった。

「今日ここで眠っていい？　っていったらどうするかしら？」

「廊下で寝る」

「また夜這いしちゃうかもね」

「なんだ、お前酔ってんのか？　やけに機嫌が良いじゃん」

「まあ、そうなのかもね」

彼女は何気なさそうに言った。

「ところでさ、魔女の素性って一体なんなんだろうな。どんな顔してんだろ……帽子を深く被りすぎて見えないんだよな、いつも」

「美人だったらわたしを捨てるつもりね」

「んなことするわけねえよ」

と、つい、条件反射で、心の中の声がぼろっと出てしまったのを意識すると、もう皆羽と目を合わせていられなくなってしまった俺じつにウブである。

するとそんな俺に追撃をかけるかのように、彼女がぬっと身を乗り出し、そむけた俺の顔の目の前に出てきた。

「どうしてこっち向いてくれないの？」

「それはな……」

痛い。顔を背けられないように首ががちりとかまれているっ

……。

「その……アレだ、アレ。そう、ええとな……」

「さっさと言ってくれないと首を一八〇度曲げてしまつかもしれないわ」

冗談抜きでやりそうだったので、答える。

「お前が、その……好きだからだ……」

実際、学校初日に会ったときはなんて厄介なヤツなんだ、と思っていたがそれは錯覚だったのだ。俺はおそらく、初めて会ったときからこの女に一目惚れしていたのだらう。

今まで人を好いたことが無い俺にとっては初めての感情だったか

ら、気付かなかっただけ。

「そう。そういつてくれると嬉しいわ」

「嬉しそうに見えないのはなぜだろう……」

「わたしは表情より行動に出る女よ」

「珍しい女だな……ま、そんな女を好きになつた俺が悪いのかね」

「そうよ」

「参つたな、こりゃ」

今の不安を隠し通すために、俺は飄々と言う。心の中の弱みを見せないためにも今はこうしないと、保たないと思つたからだ。

「じゃあ、わたしもう寝るわね。おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

彼女は身体を翻して、部屋を立ち去る前に、こう言った。

「あんまりバカなことは、しないで。わたしはあなたに消えて欲しくない」

たつたそれだけ。それだけで、俺は嬉しくも、悲しくもなつてしまった。今の俺は、不安定で、甘くて、追い詰められているのだと思う。

自分のことですら、分からないのだから。

魔女のせいで、俺の少なくとも、大切な友人が危険な目に晒されているんだ。しかもそれを知っているのは俺だけ。日野原には話せないし、皆羽はもちろんの事だ。天狐……そうだ、彼女に相談してみるのがいい。

精神状態も不安定ではないし、魔女に解呪の法を吐かせるという点では利害が一致する。頼れる神様つてやつだ。

思い立ったが吉日。リビングにいれば、すぐにでも話すし、寝ていたら明日の朝に話そう。そう思い、リビングに出ると

「おい……なんだよ……なんだよ、これ！」

のどが張り裂けそうな勢いで叫んだ。

リビングの奥の壁が、血で埋め尽くされていた。べたりと赤いペンキをこぼしたようになった原因は 床に背をもたれかかるようにして、うなだれている、天狐だった。その特徴的なキツネ耳も尻尾もほとんどが、鮮血だ。

「おい、しつかりしろ！ 何があったんだ！」

「……おお、良平か……すまんのう、油断しておったわ……げほっ」  
わき腹に穴がぼっかりと開いている。このままだと、出血多量で死んでしまう。

「もうしゃべらなくていい！ きゅ、救急車を……」

「ごほっ……良いか、良平。魔女は、自分の劣等感をつついて……ごほっ」

続けようとするが、ウソみたいな量の血を吐いて、それが中断させられる。

「あやつに弱みを見せてはならない……良いな……」

「どういうことなんだよ……なんで、どうしてなんだ……」

「大丈夫じゃ、一週間もすればこんな傷は癒える……少し、眠らせてくれんかの……」

「……全部、お前の言うとおりにする」

「そうか、なら、よかつ、たのう……」

そう消え入るような声で咳いて、天狐はその瞼を閉じた。脈はあるから、本当に治るのだろう。しかし、このままというわけにもいかない。とりあえずは止血を……

「手伝うわ」

「……すまない、手間かけさせる」

「良いのよ」

引き出しから応急箱を取り出して、俺たちは手当てを始めるのだ  
った。

午前三時三十分。俺と皆羽は、ようやく全ての作業を終わらせて

休憩していた。休憩、と一概に言ってもお茶やら何やらをしているわけではなく、疲れてぼうつとしていただけなのだ。

襲い掛かる睡魔に必死に抗っているだけの事である。

「疲れたな……もうすぐ日の出だな……。見に行くか？ きつときれいだぜ？」

「そうね、でもそれはまた今度に、ね。全部終わったら見に行きましよう。あと、わたしのとっておきの場所があるから、そこにも」「そうだな、それがいい」

そう言っつて、俺は眠りに落ちた。

今日は学校が休みだから、ゆつくり寝られた。といつてもまたあくびを噛み殺しているわけなのだが。天狐は本当に、人形のような姿で眠りに就いていて、寝言一つさえ呟かない。

おそらく ほぼ間違いないといったほうが正しいだろうが

彼女は魔女にやられたのだ。人の身体は案外頑丈だ。あんなに綺麗に円形の穴が開くはずがない。ナイフで貫いたとしてもその傷跡は円形にはならない。

外部からの特殊な能力。それによって天狐は負傷したのだ。常人なら死んでいたところだったものの、神獣の力なのか、大事には至らなかった。そして、魔女が彼女を襲った理由は俺だ。

俺が魔女の催眠のようなものから覚めてすぐに天狐が負傷しているから、時間的にもつじつまが合う

「っ！？」

あの催眠のようなものはつつきり、外部から行っていると思っただが、違う。遠距離からでは難しいはずだ。なぜならば、大掛かりな魔法を使う際には手順が必要だと天狐は言っていたし、それには気付くはずだとも言っていたからだ。

ならば、彼女はなぜ気付かなかったのか。

近距離の魔法なら痕跡は消せる……。それならば、俺に魔法が使われたときも、天狐に使われたときも、魔女は近くにいた、ということになる。

(そんなはずないだろ……！ 違う、それだけは絶対に違う……！)

その刹那、自分の考えの中で出てきた結論を全力で否定した。

「桐谷君、どうしたの？ 顔色悪いわよ……寝不足？ 昨日……今日かな、寝れなかったの？」

「いや、ちよつとぼうつとしてただけだ。悪いな」

「別に良いけど」

「ちよつと眠気覚ましがてら散歩してくる。ああ、でもすぐ戻るよ」  
「そう」

そう簡単に言っただけで外に出た。今、彼女と話していると胸の中のこの吐き出すような苦しみが全部にじみ出てしまいそうだから。まあ俺だって男だ、そういうところはあまり見せたくない。

紅葉に染まる自分の家の前の茂みを何気なく見つめる。今はただ、何も考えなくなかったのだ。その茂みをじつと見ていると、

「ん？ なんだ、ありゃ」

茂みの中になにやらモノがある。ここからだど枝やら紅くなつた葉やらがじゃまでよく見えない。少し気になつたので、身をかがめ、それを見てみると、

それはモノではなかった。何かの紋様。枝を掻き分けて、もっとよく見てみるとそれは、幾何学的な円形の紋様だった。そして、そこにはもう一つのモノが落ちていて、それを拾い上げ、確認した瞬間、俺は頭がおかしくなりそうだった。

「ひひひはははひひ、あははははひひひひひは！」

狂つたように嗤いながら、俺は泣いていた。視界が霞んで、もう、涙が止まらなくなった。魔女の正体分かり、それが魔女の言葉どおり、本当に俺の近くににいる人間だったのだから。

世界が俺を拒絶しているのではないかと、馬鹿馬鹿しい被害妄想を抱いてしまう。その場にうずくまって、何も出来ずにいると、不意に背中に温かいものが触れた。

「一人で抱え込む必要なんて無いのよ。辛かったら、相談すればいいじゃない……お人よしの、桐谷君」

「……俺が、お人よし？ 妄想の行き過ぎなんじゃないか？」

「実際そうじゃない。知りもしない、家が無い女を無償で自分の家に泊めるなんて。普通の人間がやることじゃないわ。普通なら、警察に保護してもらおうでしょ」

「お前は普通じゃない気がしたからな……化け物退治屋の勘だよ、勘」

「だからお人よしのよ」

彼女は俺の首に手を回す。

「お人よしって、自分の抱え込んでいることを自分だけで解決しようとするらしいのよ……ゲームでも、マンガでも現実でもそれは同じ」

「へえ……博識なんだな」

「天才美少女詩音ちゃんだから」

「自分でそれを言うか」

彼女は俺のことを氣遣ってくれているのだ。それはとても嬉しいことだ。だから、俺はそれに答えなければいけない。

「なあ、皆羽。俺、お前を助けるよ。恥ずかしいけど、助けてみせる」

「当然よ。それが、魔女捜しの本当の目的だもの」

「ははっ……そうだったな」

自分でも分かるほどに声に覇気が無かった。しかし、この苦しみももうすぐ終わる。

魔女に解呪の方法を吐かせて、それで、オワリ ジ・エンドなのだ。俺は自分の残った力で立ち上がり、

「俺、ちよつと行くところがある。だから、待っていてくれ。必ず帰ってくる」

「クサイ台詞ね、もうちよつとボキヤヴラリーなる物があなたにはないのかしら？ ボキヤ貧とはまさにこのことね」

「不器用で、何も出来ないからそう言ってるんだろ。それにこういうを遠まわしで言うの、慣れてないんだ……その、お前が始めての

彼女だし……」

「……分かったわ。もう知らないから……必ず、帰ってきて」「鼻っからそのつもりだ。じゃ、行って来る」

I a m n o t a H E R O 　↳無力な少年の思い

これで、全部終わらせられるはずだ。挑む相手は魔女。小瓶と、日野原から貰いつばなしだったバタフライナイフを持って出掛けた。

魔女は、俺の近くにいます。要するに、俺の友人だったわけだ。そこで俺が向かった行き先とは、

「ここか……」

表札には、月城と表記されている。ここに来る前、わざわざ学校に行って住所録を見てきたから、間違いはあるまい。

ドアホンを鳴らし、返答を待つ。その間、十秒も無いだろうが、今の俺にはそれが途方も無く長い時間のようだった。やがて、そのドアホンから返答があり、

『月城だ、ん……桐谷君か。こんな日曜の朝に何の用だ？ 君にしては随分早いな』

「ああ、ちよつと貸してほしいものがあってだな……その宿題を……」

『まあいいだろう。立ち話もなんだ、上がってくれたまえ。今開けるから』

「サンキュ」

しばらくもしない内に、ドアが開いて私服姿の月城が姿を見せた。その服も着こなしていて、非常に綺麗である。

「さあ入りたまえ。なに、親はいないから大丈夫だよ」

「そうか」

月城が俺に背を向けたその刹那、俺はバタフライナイフを取り出し、月城を玄関の床へと打ちつけ、馬乗りになった。不意打ちは成功したらしく、何も抵抗はなかった。

そして、こいつこそが 魔女だ。

「答える、魔女。皆羽の不死の呪いを解く為にはどうすればいい？

答えなかったらお前は死ぬだけだ」

首にナイフをあてがう。目の前のヤツには罪悪感さえ、浮かんでこない。そして、その相手は首筋にナイフをあてがわれてるにもかかわらず、表情は涼しげだ。

「いやいや、どういいう見だい？ 女の子の家に押し入って、そんなもって入った瞬間に押し倒すだなんて……君は暴漢かい？」

「黙れ。俺の言ったことに答える」

「あははっ」

月城が唾った瞬間、彼女の放っている雰囲気ガラリと変わった。目つきもそれに伴って変わる。

「よくここまでたどり着けたこと。どうして分かったのかしら？」

聞かせて頂戴」

「お前はヒントを残しすぎたんだよ。俺たちは遊び道具じゃないんだっ……」

「そうね」

「まずあの商店街の事件のとき、魔女は近くにいてることが分かったんだ。魔法は天狐が気付くはずに気づかないのは痕跡を消されてるんだとか」

「あらら、あの狐、余計なことしゃべっちゃって……」

俺は無心に続ける。

「そして第二にだ。お前は俺の名前を知っていた……それで呼び名が桐谷君だったんだよ。あの一回死んだときだ、覚えてるか？」

「ええ」

「最後に、だ。お前は皆羽が転校した初日、俺の家の前にいたよな。あれは、魔法を発動するための布石だったんだろ。あのお前が出てきた茂みの中に怪しげな紋様と腕輪があった。俺が挙げたはずの腕輪が」

「そうよ」

「それで天狐に気付かれず、あいつを負傷させたんだな」

これが全てである。また諸々の仕草に月城がするような動作が混じっていたから、というのもあるが、最後が一番有力な鍵であった。

あれを見つけれなければ、俺はいつまで経ってもこいつが魔女であると気付きはしなかっただろう。

俺の殺したい相手。不意打ちは完全に成功し、今は俺が優位に立っている。

「さあ、これからどうするの？ わたしが呪いを解く方法を簡単に教えると思う？」

「思わないからこういうことをやってるんだ」

「ははっ、それもそうね……。じゃあいいわ。ゲームをしましょう。あなたが勝ったら、呪いを解く方法を教えてあげるわ」

「……………」

その言葉を信用していいのかと自問自答する。

「そう疑心暗鬼になる必要は無いのよ？ いくら精神的に痛めつけたからと言ってね」

精神的なダメージというのはおそらく、日野原の記憶を消失させ、天狐を死傷させたことだろう。いくら精神が強い人間だからと言って誰とも話さずにそのダメージを受け流すことは不可能なのだ。

俺を精神的に弱らせてこいつは楽しんでいたのだ。

「……………いいだろう、その言葉を信用してやる。さっさと内容を教える、ゲス野郎」

「レディの扱い方をわきまえたほうがいいわよ？ そうね、ルールは至って簡単。ギブアップと言わせたら勝ちのケンカだよ」

「なんだと？」

「君の得意な分野にしてあげたの。君は、お人よし。それは負の感情を溜め込みやすい性格。つまり、かならず歪みがあるの。凶暴な、ね」

「俺の歪み……………」

「ま、日々溜め込んだ怒りを発散するってところかしらね。それで、ケンカよ。あなたに有利なゲーム」

ケンカ、というよりは殺し合いだろう。それを魔女はゲームと称して、俺を遊ぶのだ。

しかし、一方的に遊ばれる気はない。

「……なら、このままナイフで首元を抉っていいわけだな？」

「どうぞ。これはゲームだから」

だから俺は容赦など、加減もせずに思いっきり魔女の首に向かってナイフを突き立てた。ナイフと首の隙間からポンプのように血が噴出し、自分の手が赤く染まる。

だが、手ごたえが無い。肉体はあるが手ごたえというモノがそこには存在しなかったのだ。

「っ!？」

「ほづら、こうやって遊ぶんだよ？」

鎌を持った魔女が天井から襲い掛かってくる。身をよじらせるという簡単な動作で間一髪でそれをかわし、すぐに起き上がり、体勢を立て直した。

俺が突き刺したはずの魔女は、そのまま塵となって消えた。

「魔女の家って言うのは一種要塞みたいなものなのよね。わたしってほら、いろんな人から恨まれちゃってるらしいからさ、警備はしっかりしておかないと不安なのよね」

「相応の代償だろ……いや、それだけじゃ、済まないはずだろっ……!

人を道具のように弄んで!」

「……何か勘違いしているようね。わたしは、悪魔の代行者……断罪者なのよ。人間は欲を持ちすぎている。だから、わたしはそれを裁く」

「そんな押し付けがわけねえだろうが!」

このまま、魔女の懐に入るべく駆け出そうかと思っただが、この狭い玄関では戦いにくい。もっと広い空間に持っていくべく、俺は後ろ走り、リビングを目指した。

この家は構造は一般的なようで、玄関、廊下、そしてその先に部屋があるようだ。俺はその部屋に出る。広さからいってリビングだろう。

後ろから魔女が追隨してくる。

「人を道具にして、そんなに楽しいか!？」

「さあどうだろうね! 人の感情というのは推し量りがたいものよ」

「お前は人じゃない、化け物だ!」

「そうかい! なら退治してみなよ!？」

言われるまでも無い。

周囲を見回す。リビングの隣はダイニングとキッチンだ。とりあえずそこでナイフがあれば武器として使えるだろう。部屋の入り口に魔女の姿はない。

どこかに隠れているのだろうか。家の中は朝だというのにもかかわらず、カーテンを閉めているせいかわかしく視界が悪い。

(このままいったほうがいいか……)

俺はそう判断し、身をかがめながらキッチンへと向かう。どこからか魔女が沸いてくるのではないかという緊張が俺の心臓の鼓動を加速させる。

無事にキッチンまでたどり着けた。自分の呼吸が荒い。

キッチンの引き出しを漁るとすぐに包丁は見つかった。内ポケットに二本入れておく。

「武器の調達は終わったかしら?」

いつの間にか、魔女が後ろに立っていた。心臓の鼓動が限界かというくらいまで速くなる。

「このままゲームオーバーにする?」

「させるか……よッ!」

振り向きざまに袈裟切り。切ったそれは塵気楼のように消え、またしても魔女は姿を消した。

(確かにこりゃ、魔女からすればゲームだよ……自分の有利な場所まで戦えるなんて……アドバンテージにもほどがあるか……)

そう自分で愚痴を心の中で言いつつ、魔女を捜す。家自体はそれほど広くはないから、隠れるところはさほど無いのだろうが、お得意の魔法とやらで幻惑しているので姿が見えない。

まるで、スパイでもやっている気分だ。息を潜めて、敵を探す……

…我ながらに笑える話だ。

(こんなことに巻き込まれた……巻き込まれにいった俺はバカだな)  
そう自己嫌悪に陥っていると、

「君にいいことを教えてアゲル」

声が5・1サラウンドのごとく反響した。

「もし、あの子の『命』を返したとするね。不老の薬でついでしまつた作用も取り除いたとしよう。しかし、それで彼女の身体は耐えられるのかしら？」

「何にだよ……？」

「自分よ、自分。彼女は人よりも長く生きている。普通は死ぬはずなの。『命』がないおかげでそれが止められているし、老化もない」

「……何が言いたい」

「だから、『命』を返したら、彼女、死んじゃうよ？ だって、『命』は有限なもの」

「一体、どういう……？」

声が、かすれた。

「あの子の『命』はそろそろ風前の灯つてわけね。いくらわたしとはいえ、有限のものを無限に伸ばすことは出来ないわ。せいぜい、有限の時間を延ばすくらいが限界」

「じゃあなんだ！？ あいつは、皆羽は、どちらにしろ幸せになる道はねえつてのかよ！」

「幸せというのをあなたの主観で決めるのは良くないわ。だって幸せの感じ方は人それぞれでしょう？」

確かに、そうだ。

世の中には色々な人間がいる。寝ていることが幸せだと感じる人間もいれば、結婚することが幸せだという人間もいる。仕事をするのが、身体を鍛えることが、映画を見ることが、幸福だと感じる人間もいる。

ならば、皆羽詩音の幸せとはなんだ？

彼女は生きることが望んでいるのか。それとも、もう生きたくない

いと願い、死ぬことが望みなのか。俺には、わからなかった。

しかし、

「そんなのってねえだろ！ あいつは、壊された人生をやりなおそうとしてるんだ！ 人のために料理作って、学校に行って友達作って、恋もしてっ……！ それをお前は、もう一度壊そうってのかよ！？」

「あくまでも、主観に過ぎない。彼女はどう考えているのかは彼女自身にしか分からない、人間というのはそういうものなんでしょう？」

くふふっ、と薄く笑いながら、魔女は続けた。

「それじゃ閑話休題もここまでにして、ゲームを再開しましょうか……」

その薄くて不気味な笑い声はいつまでも俺の頭の中で残響していた。

俺を心理状態を把握し、弄ばれているのではないかという錯覚に陥るほど、俺は魔女の言葉に焦燥した。それが、唯一分かっていないことだったから。

そう、俺は主人公じゃない。だから、無力なのだ。そんなことは分かっている。でも、主人公じゃなくなっただって大切なものの一つや二つは守れるはずだ。そう思ったから、魔女に挑もうと思ったのに。

それが、今、崩れかけていた。

足がすくむ。思考が止まる。いつものようなスリルを感じる事が出来なくなっている。魔女の放った言葉は圧倒的重圧で俺を壊そうとしていた。

彼女の本望が死ぬことだとしても、彼女と過ごした時間は本物だったはずだ。なら、あの場所にいた俺も彼女も天狐も本物だったはずだ。みんなで、笑って過ごせる時間が楽しいという気持ちはウソじゃないはずだ。

いくら彼女が苦しむとしても。

自分の道を自分の手で選んで欲しいから。

俺は、彼女に、本当の意味で、生きて、欲しいから。

たとえ、それが、俺のエゴだとしても。

だから、俺は

「やるしかない……」

自分を犠牲にして戦う。それが、大きなリスクを孕むことになったとしても。

内ポケットを探り、小瓶を取り出す。俺は、その中から禁忌とも言うべき錠剤を取り出し、一気に飲み込んだ。水が無くとも薬は飲めるってね。

俺が、心の中で願ったこと。それは、

(俺の手で、魔女を、殺したい )

しかし、飲んでも特に変化は無い。いつもどおりの身体だ。超能力が宿ることを期待していたんだけどなあ……。

「まあ……いくか……」

ゆっくりと息を吐いて、再び前進する。

この家は二階まであるらしい。魔女は一階にはいない可能性が高いので、階段を上ることにする。そしてその階段の一段目を踏んだ瞬間、

「っ！？」

俺の鼻先数センチ前にギロチンが振り下ろされた。というより、落ちてきたのだ。断頭のための、巨大なギロチンが。

天井を見上げて、そこには何も無い。魔法で罫を作っているというのか。予想できることだったのに、予想できなかった。相当頭の回転が遅くなっているのだろう。

そのままギロチンを超えて階段を上りきった。ギロチン以外には罫は無いようだ。

「ハア……ハアッ……」

カタカタと手が震える。ただ、それが少しだけ、楽しくもあった。「死ななかつたのね。意外だね。ということで、大サーブスよ、目の前に出てきてあげたわ」

階段を上りきった廊下に魔女がどこからとも分からず、音も出さずに現れた。今までに見たどんなホラー映画より不気味だ。

「大サービス、ね。意外とあってるんじゃないか？」

瞬時に踏み込み、一気に距離を詰め、抜き身のナイフで袈裟斬りをする。分かつてはいたことだが、それは幻影。本物は

「そこだあつ！」

そのまま袈裟に斬った勢いでナイフを後ろへと、力任せに投げた。それは魔女の不意を見事に突き、彼女の肩に獲物が深々と刺さった。「くっ!？」

初めて、魔女が表情をゆがめているところを見た。化け物でも流石にアレは防げまい。しかし、魔女は口の端を狂気じみた笑みに曲げ、

「今のは、流石に痛いわ……でも痛みを感じるのなんて久しぶり! やっぱり最高ね、あなたって人は！」

「イカれてるぜ、お前……」

「わたしが十年ちょっと前に経験したことなんだけどさ……死に近づくほど、興奮するらしいのよわたし! 最高じゃない!? どんな快感より、イイ！」

「お前も、俺と似たモノ同士、つてか……気味悪いね」

「歪みとは違うわね……わたしって治癒の魔法とか使ったことないのよねえ……だから、こんな体質になっちゃったかもしれないのだけど」

ぼたぼたと、まるで点滴でもやっているかのように魔女の肩に刺さったナイフから血が滴り落ちてゆく。しかし、ナイフと言ってもバタフライナイフだから、傷口は狭い。

残る武器は包丁が二本。これで、どこまでやれるか。

「今からあなたを苦しめ、死なせてあげるわ。それまで、存分に悲鳴を上げてね」

(大丈夫だ……ちゃんと、薬は飲んで……。願いは、叶うはずだ) 「ゲームは楽しまなくちゃ……ふふっ」

上だ。上から、何か来る。とつさに後ろに飛び、階段から転げ落ちるも、ソレを回避する。回転する俺の体は、ギロチンに当たって転落が止まった。身体のおちこちが痛む。

俺が転げ落ちると同時に、ベきり、という木を砕く音がしたのは間違いない。

今、分かった。薬の効果は、第六感に出ている。魔女を殺すための第六感。

「回避しちゃったのねえ？ まだまだ終わらないわ！」  
「やべっ！？」

不明の攻撃。どの方向から、どのような力で、どのような効果があるのか分からない、攻撃。分かることはただ一つ。

(アレ受けたら、確実に死ぬッ……！)

鈍い痛みが残る全身に鞭を打って、ギロチンを飛び越え、不明の力を回避する。この狭い空間の中ではあの攻撃を回避するのは限界がある。

外に出れば……！

窓を蹴って、外へ

(っ！？ なんだこれ……まるでコンクリートじゃないか！)

この窓は絶対に割れない。おそらく、この家は現在、密室だ。ドアも開かないだろう。

そう判断し、横に飛んだ。その刹那、床が、抉られる。

「あいつ二階に近づけさせない……まさか、そうか……そういうことか！」

黒ローブの残した書物に記されていた、意味の分からない文字。

そう、歪み。それはおそらく、二階のどこかにある。

あの魔女の唯一と言ってもいい弱点のはずだ。これは賭けだ。外れたら、死ぬしか道は残されない。

「大丈夫だ、倒せる……！」

その次の不明の攻撃が繰り出される。地面に放ってあったガスボンベが五、六本、塵々に砕けた。

しかし、二階に上がるためにはこの不明の攻撃をどうにかしなければならぬ。この攻撃は俺を追尾するかのような攻撃パターンをしているから、これを振り切れれば、二階へ楽に行ける。

いや、振り切る必要はない。

階段を目指し、全力で駆け出す。

「う、おおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

ギロチンをハードルのように乗り越える。その不明の攻撃は易々とギロチンをも潰す。恐れることは無いのだ。

なぜなら、この攻撃は一瞬だけ、ほんの一秒もないくらいだが、遅れてくるのだ。走り続ければ、当たることは無い。

階段を上りきると、魔女がいかにもという様子で壁に寄りかかっていた。さすがの魔女も、急に上ってきた俺には驚愕したらしく、

「なにっ……!?!」

しかし、こいつではない。

「お前に用は無いッ！ どけ、邪魔だッ！」

「まさかッ……!?!」

この魔女は幻影だ。後ろから攻撃されるかもしれないが、今はそれどころではない。本命は、魔女の歪みを捜すことだ。この不明の攻撃が止まったところが歪みのある場所だろう。わざわざ自分で自分の弱点をつぶしたりはしないだろうからだ。

部屋は三つ。入ったら一度、引き返さなければならぬ。そのとき数秒だけ足が止まる。その瞬間、俺の肉体はこの世には無いだろう。だから、チャンスは一回。魔女の歪みを見つけ出し、破壊する。そうすれば、俺の勝ち。

そして俺は、真ん中。真ん中の部屋に飛び込んだ。

「頼む……!?!」

ヘッドスライディングのように、飛び込んだその部屋は至って普通の部屋であった。何も、無い。歪みがある部屋ではないと推測できるような、特に普通の部屋と変わらない、殺風景な部屋だった。

「ちくしょう……!?!」

要するに、ハズレだ。最後の最後で間違えてしまった。

俺は、死ぬ。

そう思った瞬間、

「やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおー！」

「ッ!？」

鬼のような形相で魔女がこの部屋に飛び込んできた。まるで、自分が死ぬときのような顔つきだ。

俺は、瞬時に考えを切り替える。この場所こそが、魔女の歪みなのではないかと。この焦りようはただ事ではない。だが、どうやって破壊する？

歪みは部屋そのものかもしれない。もしかしたら、この殺風景な部屋のどこかに、歪みが見えないように隠しているのかもしれない。まずは、歪みを捜さなければならない。

「おっと、下手な動きはすんなよ？ 大事なものを壊しちまうぜ？」

「ぐっ……!」

こんなものは三文芝居。ハツタリだ。ハツタリをかまして、魔女の言動から歪みの位置を特定できればいい。

どうやら魔女はハツタリに騙されてくれたらしく、大いにだじろいでいる。第一段階は成功、次の手をうたなければならぬ。

「そうだな、お前の大事なモノは壊されたくないだろ？ だから、交渉しよう」

「何かしら……？ 随分上からものを言うじゃない」

「実際、今の立場は俺のほうが上だ。お前の大事なものの命運は俺の手にかかっているんだ」

「………………。で、要求は何かしら？」

演技がいつまで持つか。ボロが出る前に決着をつけなければならぬ。俺はゆっくりと息を吐き、

「このゲームの勝者を俺にしる。それでチャラだ」

魔女はほんの少しだけ逡巡し、

「…………それで良いのかしら。『命』と薬で染み付いた呪いを解いた

としても生きている確証は無いわ」

「前例はないんだろ。『命』は有限だ。なら、その有限の中で自分の生き方をすりゃいいだけの話だ。人生を立て直すのは、皆羽自身なんだ」

「悟ったようなことを……。まあいいわ。このゲームの勝者はあなたね」

「解呪を今すぐにやれ」

「分かっているわよ、焦らないで。ああ、あの子がここにいなくても遠隔操作でなんとかできるわ。桐谷君の家の前に仕掛けた魔法陣でなんとかなるわ」

三分ほどだろうか。目を閉じて、長々と呪文を吟き、その度に魔女の足元からよく分からない何かを書いてある円形の紋章が出てきては消え、という工程を見続けていた。

それが終わったらしく、魔女が目をゆっくりと開く。

「終わったわ。返すものは還した……。約束は果たしたわ。物を返してもらいましょうか」

皆羽の『命』は無事に還ったようだ。あとは、俺の問題。

「……ああ、返してやる、よっ……。！」

隠してあった包丁を手に取り、出口に向かって突き進む。まあ結局最後まで、魔女の歪みはわからなかったわけだが、最大の目的は達成した。

「ッ！？ ウソだったっていうの！？」

「そうだった！」

ナイフを傷のある肩へと向かって突き出す。しかし、突き刺したそれは幻影に過ぎず攻撃は無駄に終わる。

「よくも……。よくも！ わたしを弄んでくれたわね！」

横に回りこまれる。魔女は何かをしようとしているのか！

「散々他人を弄んできたのはお前のほうだろうかあっ！」

突如、突きだしていた右腕から激痛が走った。それに遅れて、鈍い、音。感覚的に分かるのだ。折れた。右腕が。そして、無意識の

うちに魔女と距離をとっていた。

「がっ……あがああああがあがぐッ！」

鳩尾を蹴られたときのようには呼吸が一瞬できなくなる。右手に握っていたナイフが離れ、地面に落ちる。

「わたしが、幻惑魔法だけのバカと思わないほうがいいわよ？ 他の魔法だつてちゃんと使えるんだから」

病的なまで見える、薄い笑み。

「はっ、がっ……なんだ、お前……」

「あなたはわたしを騙した……あなたのような、ゴミほどの分際がわたしを騙した！ 許すわけにはいかない！ ここで、絶対、必ず、百パーセント、痛めつけて、殺してあげるわ！」

「傲慢だな……ぐっ……」

満身創痍。それが今の自分の身体の状態である。ゲームであるならば、HPが1くらの状態だろう。

しかし、ゲームはゲームでも現実世界で起こっている殺し合いというゲームである。そこには、生き返るアイテムとか力が增强されるアイテムとかは存在しない

(まだ勝機はあるか……)

内ポケットにしまつてある小瓶の中の錠剤は残り一錠。まだ先ほど使ったときの副作用、つまり代償を払うということがない。魔女さえ抑えておけば、大丈夫なのだろう。

代償を取るのは魔女なのだ。何も心配することは無い。だから、この胸の中にある不安はウソだ。

右手の痛みをこらえて、落ちたナイフを左手で持ち、構える。

「それに俺はゴミじゃねえ、皆羽といい、勘違いする輩が最近多くてな……」

「黙れ！ 次は左手よ！」

「させるかっ！」

またもや不明の攻撃だ。直感がそう告げている。前に駆け出し、それを回避。

「うおらっ！」

「なるほど……薬、使ったのね……。通りでさっきから死なないと思っただら！ あなたは一体何を願ったのかしら!?」

出口に魔女が立っているから、この狭い空間の中で不明の攻撃を避け続けるしかない。体力には自信がある。以前やっていた走りこみのおかげか。

「お前を、俺が殺す！」

「ゴミが！ 生意気なのよオ！」

その瞬間、床が抉れた。それによって出来た穴に俺は落ち、受身さえも取れずに一階に叩きつけられる。肺の中にあつた酸素が一気に吐き出される。

「あがつ……！」

少しだけ、解った。この不明の攻撃は、空間だかなんだかを上からの圧力で潰しているのだろう。俺は右手の骨が潰されて折れたと考えるのが妥当だ。

そう、このまま寝ていると次は身体が潰されるのだ。とっさの行動で、横に何回か転がり、攻撃を回避する。

「殺し損ねたわ」

「はあっ……！」

今までの肉体へのダメージが蓄積し、中々立ち上がることが出来ない。全身に鞭を食らったような感覚だ。そんな感覚に陥っている隙に、魔女は開いた穴から飛び降りて着地する、

「さてと……そろそろ殺しても良いかしら」

「くそっ……」

内ポケットの小瓶をまさぐる。あの圧殺攻撃が発射された瞬間に死ぬという事は目に見えていた。それに間に合えば、というたった一つの希望に任せて、薬を掴み

「じゃあね、ゴミ」

「ッおおおおおおおお！」

その刹那、絶叫を上げながら、横に一回だけ転がり圧殺攻撃を避

ける。すると、床に穴がまたしても開いた。俺は横に転がった先にあったライターを取って、穴に入ってからそれを点火し、

「じゃあなッ……！」

それを、上の部屋に投げ込んだ。

ガスが充満した空間が爆ぜる。ここは防空壕のようなものだ。魔女とはいえ、この家ごと焼き払う攻撃をよけることはできない。

弱点である魔女の歪みもこの家のどこかにあるなら、一緒に吹き飛ばしてしまえる。

結局薬を飲むのは間に合わなかったのだ。おそらくこぼした錠剤がこの家のどこかにあるだろう。しかしそれも今や、この業火の餌食である。あんなものは、持たないほうが良いのだ。願望を叶える薬など、人を狂わせてしまう。

家を吹き飛ばすような、激しい爆発ではなかったようだ。ただ、火災は発生する。このままここには、いつか酸素が尽き、酸欠で死んでしまう。俺は玄関から出るべく、穴をよじ登る。

燃えさかる炎。部屋がまるで砂漠のように暑い。

「さっさと出ないと燃えちまうな、こりゃ……！」

そう愚痴った瞬間だった。

「待てよ……！」

そこには、片腕を失い、血まみれになった魔女が、いた。

「火傷治す代償に、片手失っちゃったじゃん……。どう落とし前つけてくれるのかなア……？」

「お前、そんな身体でまだ戦うのかよ……。このっ、化け物が……！」

「化け物オ？ そんなこと一番最初から分かってたでしょオが！」

魔女は包丁を持ちながら俺に向かって駆け出した。その姿は狂気じみたモノにも見える。もう、魔法を使う力すら残っていないという事だろう。

「えいッ……！」

大振りな攻撃をかわす。大振りだからかわすのは容易だが、一撃でも当たったら即死だ。

「お前は。ここで死ぬべきなんだ！　たくさんの人の人生を壊してきてッ！　罪を償え、死をもつて！」

「黙れ！　わたしは、悪魔と契約した、わたしだって必死だったのよ！　人の欲を満たさなきゃわたしは死ぬッ！」

「っ！？」

理解した。魔女の歪みとはモノでもなんでもなく、こいつ自信が歪みであり、弱点なのだ。悪魔に縛られる存在、という歪み。それは歪みであると同時に苦痛でもある。

そのことを知り、急に憎悪にまみれていた頭が冷える。誰かに縛られ続けるというのは耐え難いことだ。その縛っているものが、この人間を変えたというなら、助けなければならぬ。

「一つ聞くぞ！　お前は誰なんだ！？　月城神流なのか、魔女なのか、ただ悪魔に縛られただけの女なのか！？　お前は、誰だ！」

「わたしは……わたしは……」

彼女のナイフの動きが止まる。憶測どおり、うるたえた。

「わたしは、わたしだ！　それ以外、何者でもない！」

再び、ナイフが振り下ろされる。

「このっ……！　バカ野郎！」

後ろで柱が折れた。もうこの家の全焼も近い。近所の人間が消防車を呼んでいることだろう。早々に決着をつけないといけない。左腕はまだ動く。この腕一本でやるしかない。

ナイフをかわし、反撃の機会をうかがう。魔法も使わない肉弾戦では、体力のあるほうが勝つのだ。しかしこの環境下、つまりはこの煙の出る環境の中ではどちらが勝つかなど分からない。さらに相手は狂気に吞まれているときた。

もう賭けの領域である。

下がりながら避けていると、ついに壁に当たってしまった。そのせいで一瞬動きが止まる。

「しまっ……！」

「はあっ……！」

顔をとつさに動かすと、彼女の持っていたナイフが壁にめり込んだ。彼女の動きが止まる。それを俺が見逃すはずがない。

「さっさと、いつもの月城に戻れッ！」

顎に左アッパーを全力で入れた。

「ごふっ！」

彼女は気絶し、その場に倒れた。安堵をする暇もなく、彼女を肩に担いで外に出る。だが、今の俺には人を一人担ぐのは重すぎた。すぐに倒れる。

このまま、こいつ諸共俺は、火の海に吞まれて死ぬのか。そう思ったとき、不意に肩が軽くなった。

「皆羽……」

「お人よしの桐谷君、さっさと出ましよう」

「お、おう」

皆羽が月城の肩を担いでいたのだ。彼女と共に火に吞まれる寸前の家突き進み、出る。玄関は開かれており、すぐに出られた。

「まったく無理をする人ね、あなたは」

「お前も無理しすぎだとおもっぜ」

そう言葉を交わしたのを最後に、俺の意識は途切れた。

I a m n o t a H E R O 　↳無力な少年の思い　↳（後書き）

次でオワリ、かな？

**End of story** 〽本当の……〽 **(前書き)**

これでオワリです。ここまで読んでくださった方、ありがとうございます。

End of story (本当の……)

目が覚める。この硬いとも柔らかいとも言えないベッドの感触。今俺が寝ているのは病院のベッドの上だろう。一度、入院したことがあるから分かる。

「っ……………」

いったいあの後、どうなったのだろうか。まあ、家を全焼させたのだから警察の事情聴取を受けるのは間違い無さそうだ。首を動かすとそこには

「外の景色が見えると思っただかしら？」

「か、かかか皆羽！？ 驚くじゃないか！ 俺が起きたら声くらいかけろよ！」

「あらあら、こんな美少女な恋人の顔を見て第一声がそれかしら。まったくレディに対する扱いがなっていないわ。教育してあげようかしら」

こいつが今の最後のセリフを言うとエロティックに聞こえるのは気のせいだろうか。

「教育は結構だ！ で、一つ聞きたいんだけど」

「何かしら。わたしのボディについてなの？」

「んなわけねえだろうが！ そんなもの興味…………あるけどさ！ って話はずれてるじゃねえか！」

「病院のベッドにいる割には元気なのね、桐谷君。びっくりだわ。さすがは変体と言ったところかしら」

「そのことはどうでもいい！ ……本当に聞きたいことはだな、あの後どうなったか、だよ。俺はこうして病院にいるけど、月城はどうなったんだ。あいつだって重症だろ」

「……………」

皆羽が少し返答に詰まる。

「魔女も、この隣の部屋で静かに眠っているわよ。還すものは全部還したらしいわ。でも化け狐は未だにあなたの家にいるけどね」

「そ……」

魔女はどうやら助かったらしい。あの時、片腕を失ったようだったが　言ってしまったえば、当然の贖罪だろう。たくさんの人を傷つけ、壊した代償には相応しいのではないか。

悪魔との契約はどうなったかは知らないが、もう彼女に魔女として、何かをする、という気力は起こることはないだろう。なぜならあの時魔女が言ったのだ。自分のプライドを傷つけられた、と。

彼女は自尊心が高い人間であると伺える。それが、なくなってしまうた今、彼女は空っぽになっているはずだ。だから、もう何をやる気もないだろう。

「まあ、平和であって欲しいものだけだなあ……」

「あなたに平穏なんてないわよ、このわたしは崩すのだから……。覚悟は出来ているわね？　散々人に迷惑をかけておいて、タダで済むとは思ってないわよね？」

「え、いや、その……」

のろり、と立ち上がり、俺のほうに近づいてくる。またお仕置きでもされるのだろうか……

「へ……？」

お仕置きではなく、俺の胸に彼女が飛び込んできたのだ。

「散々人に心配をかけておいて……また他人の心配なの？　随分と

忙しいことね……」

「悪い……」

「少しは自分の心配もしなさいよ……」

「ごめん」

「あと、わたしのことも気遣いなさいよ」

「できるだけ、そうする」

以前までは皆羽詩音という女の子は表情に変化がないなという印象が濃かったが、今ではその正反対だ。思春期の女の子そのもので

ある。彼女はもう、人だ。

不老不死の化け物などではない。そのせいでもあるのだろう。

俺は皆羽の頭を抱き、

「お前がいてくれて良かった。死んだんじゃないかって……こつちだつて心配したんだ……。でもお前はここにいる。本当に、良かった」

「当然でしょう。わたしという厄介な呪いはいつまでも解けないのよ」

「そりゃ嬉しいことだ」

見つめあいながら、彼女と俺の顔の位置は近づき、やがて鼻息がかかるところまでいつて

「良平よ、見舞いにきた、ぞ……」

「えっ」

天狐が病院の扉を勢いよく開け、入ってきたのだ。そして今の俺たちは、今かと口付けをかわす寸前の状態であった。

「すまぬ、邪魔したのう。ではな」

「待て待て待て待て。勘違いして……ないけど！ とりあえず立ち去るのはやめるんだ！」

「神社の主たるもの、作法はわきまえねば」

「……神社？」

魔女は還すものは還した……ということは天狐も然り、なのだろう。彼女はまたちゃんともとの居場所に戻れるという事だ。日野原の記憶も戻っていることだろう。次、学校に行くときは気兼ねなく話せそうだ。

「良かったな、天狐」

「い、いきなり笑うでない！ 気色悪かろうが！」

「黙れ！ とりあえず、出て行け！ 話はそれからだ！」

「言われなくても出て行ってやるわい！ ふんだ！」

と、肩を怒らせながら、天狐は出て行った。

それにしても、顔から火が出るほど恥ずかしかった。人生最大の

汚点ではないかと思うくらいに。そう思い、ちらりと皆羽のほづを見してみると、

「ッ……………!!」

顔が真っ赤になっていた。

「皆羽。お前の苗字って変わってるなって思ってたけど、これは偽名なんだろう？ 始めて俺と会ったときにとっさに出た名前だと思うんだ」

あの始めて会った夜、彼女は自分の名前を考えていた。おそらく、生きていく中で名前が複数必要だったのだろう。だから、俺にも偽名を教えた。

「……………ええ。そうよ」

「じゃあ、本名を教えてくださいませんか。できれば、そっちの、名前で呼びたいんだ。俺は、お前のことが好きだから」

「……………その言葉はわたしに対しての対抗策かしら？」

彼女はそう愚痴ってはいるものの表情はとても明るいものだった。化け物退治屋は化け物を退治するのではなく、化け物でなくした。化け物を退治するのではなく、救うという方法だ。彼女に死の選択が無かったのを変えたのだ。化け物退治屋としては、それだけでも立派な功績だろう。

俺は、これからの日々を怠慢で過ごすことはないだろう。なぜならば、大事な人間がそばにいるから。

「じゃあ教えてあげる、良平君。わたしの名前は」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7068v/>

---

彼女に死の選択はない

2011年10月19日22時22分発行